ドラゴンクエストX ～ワルキューレ～

リョンさん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ドラゴンクエストＸの原作添いのオリジナルストーリーです

オリジナル性をなにより重視しているので、原作と、少し、……いや、だいぶ違いますが、流れは同じです！

オーガの姉妹の冒険の物語です！

口が悪くて皮肉屋の、不良娘、姉のミュスナと

優しくてヘタレでオタク気質な妹のユイナ

二人が、様々な人と出会いながら、成長していく物語にしていきたいです！

駄文ですが、よろしくお願いします（＊゜ω゜＊）

追記！挿絵追加しました！（２０１６／０６／０９　１６：５９：２３）

目次

第１話　絵本の中の英雄 ―― 1
第２話　ランガーオ村 ―― 8
第３話　ロンダ岬にて ―― 15
第４話　狂鬼ジーガンフ ―― 22
第５話　姉妹の旅立ち ―― 30
第６話　グレン城下町 ―― 38
第７話　魔法戦士アルベール ―― 46
第８話　妖剣士の塚へ ―― 54
第９話　聖杯の守り手 ―― 62
第１０話　雲上湖の怪物 ―― 70
第１１話　激闘、ギルギッシュ ―― 78
第１２話　家族 ―― 87
第１３話　グレンの救世主 ―― 98
第１４話　風の町アズラン ―― 113
第１５話　風泣き峠にて ―― 125
第１６話　秀才と天才 ―― 135
第１７話　すれ違い ―― 146
第１８話　伝わらない ―― 156
第１９話　でも愛してる ―― 164
第２０話　風乗りと旅立ち ―― 177
第２１話　心霊探偵ユイナさん ―― 190
第２２話　ジュレットの町 ―― 204
第２３話　道化師と… ―― 216

第1話　絵本の中の英雄

ワルキューレ
それは、戦乙女の名を冠する戦いの女神
荘厳な武具を身にまとい、煌めく槍を奮う女戦士
怒りは雷撃となり悪を討ち、民を守る
絵本の中の英雄だ
これは、そんなワルキューレに憧れ、志し
戦った、戦乙女の物語である。

◇◆◇◆◇

エテーネの村
周りを海に囲まれた小さな孤島の平和な村
あたしの故郷だ。
あたしのその村一番のヤンチャ娘
ケンカだって男の子に負けないし、最近は剣だって使える
本当に使いたいのは槍なんだけどね。村にないんだもん
「お姉ちゃ～ん！」
頼まれた手伝いを無視して、日光の気持ちいい軒先で
昼寝を決め込もうとしてると、声をかけられた。
「ミュスナお姉ちゃ～ん!!」
この声は…、あたしの心は静かに躍る。
かわいい、たった1人の妹のユイナ
ツヤツヤした黒い髪は肩でふんわりしてて、
あたしと揃いの金色の瞳は、まんまるでかわいい
似てないと言われるけど、あたしの大切な妹
今は巨大な亀にまたがり、世界一の笑顔でこちらに手を振っていた。
「ユイナ　カメさまに乗ったらダメでしょ」
楽しそうで何よりだけど、あの亀は村の守り神

降ろさないと、あのやかましいばーさんに怒られてしまう。
「乗っていいって言われたんだもん～」
あたしに注意されたのが不服なのか、ユイナは唇をとがらせた。
あー、かわいいなもう
「なら、いいよ。ところでババアは？」
「誰がババアじゃ」
あたしは、ユイナに聞くなり後頭部にゲンコツをもらった
ババア…、エテーネの村の長、アバだ。
この人をババアと呼ぶのは、あたしくらいだろう。
「ってーな！なにすんだババア！」
「うるさいよ、じゃじゃ馬。アンタ、おつかいは？」
そうだ、ババアにめんどくさい、おつかいを頼まれてたから逃げ回ってたんだ
あたしは、やってあるとでも？と言うように肩をすくめて見せた。
ババアは思った通り、苦い顔をした。
「…まあいい。それより、アンタには他に頼まれて欲しいことがあるんじゃ」
あたしは、きっと、あからさまにイヤな顔をしたのだろう。
呆れ顔のババアの次の言葉で、すぐに、歓喜のものへと変わるけど
「ちょっと外に行って、花を持ってきておくれ」
「外に出ていいの!?」
外には比較的温厚だけど、魔物がいる。
だから許可がないと、村の外には出してもらえない
村一番のヤンチャ娘のあたしには、村の中は退屈すぎる。
だから外出の許可は心が踊った。
「あんまり無茶するんじゃないよ」
「わかってるって！行ってきまーす！」
詳しい話も聞かずに飛び出そうとする、あたしの襟首をババアが掴んだ。
「こら！話は終わってないじゃろ！」
あたしは、つんのめって、ババアの話を聞くことになる

◇◆◇◆◇

つまりは、洞窟の奥のキレイな花を取ってこい
とのことだった。
テンプラ花だか、そんな感じの
「テンスの花じゃ。」
「わかってる、わかってる」
あたしは、投げやりに言うと、村の外へ通じる道へ飛び出していった。
「あ！お姉ちゃんー！」
妹に呼び止められる。
急ブレーキで、振り返る。
「帰ったら、いつもの絵本、読んでね！」
いつもの絵本とは、ユイナのお気に入りの絵本のことだ
題名は『ワルキューレ』
何回目よ、と苦笑するけど、イヤじゃない
あたしも、あの絵本が好きだから
「わかった！いい子に待っててねー！」
こう言って出かけるのも、好き。
「うん！」
返事がとても、かわいいから。

◇◆◇◆◇

この時、村を空けるんじゃなかった。
あたしは、知っている。
世の中には、どうしても理不尽なことがあると。
自分が、どうしようもなく、無力だと言う事を。
あの絵本みたいに、強くてカッコイイ、ワルキューレだったら、
ずっとあの村で、ずっと幸せに、皆と、ユイナと、生きていけたは

ずなのに。

◇◆◇◆◇

花を摘んで帰ると、村は火の海だった。
突如、魔物が襲来したからだ。
戦うことの出来ないエテーネの民は、なすすべなく、蹂躙されていた。
パニックになりながらも、あたしは、皆を守るために、剣をとった。
…けど
襲来した魔物は、村の外のそれとは、ケタ違いだった
桃色の巨体に、鉄の槍を持った魔物
確か…、アークデーモン
睨まれただけで、身体が動かなくなった。
アークデーモンが、指を天に向けた。
これは確か…呪文の合図
爆発呪文の、イオナズン
あたしは、咄嗟に後ろに跳んだ。
それが功を奏したのか、直撃はしなかった。
けど、爆風だけで、あたしの身体は宙に舞った。
地面にしたたかに打ち付けられる。
くぐもった悲鳴が口から漏れ、視界が歪んだ。
歪んだ視界が、戻ると、目の前には…
「お姉ちゃん…」
泣きそうな、ユイナがいた。
良かった、怪我はない。
安堵したのはつかの間。
闇の底から響くような恐ろしい声が聞こえた。
「エテーネの民は、皆殺しだ」
聞いてるだけで、ナイフを首元に突きつけられるような感覚を味合う恐ろしい声。

あたしも、ユイナも、その声の主を見て、
恐怖で、動けなくなった。
大きな鎌を持った、角の生えた男。
そして、男の指は、ユイナへと向いた。
「…！」
狙いは、ユイナ
そう認識しただけで、恐怖が吹き飛んだ。
飛び出して、ユイナを庇わなければ
身を呈すれば、きっと守れる
けど、無理だった。
爆風で、打ち付けられただけで、あたしの身体は使い物にならなくなっていたから
なんて貧弱な身体だろう、あたしは自分を呪った
ユイナに手を伸ばす
「ユイナ！ユイナァ!!」
神でも悪魔でもいい。
お願い、ユイナを助けて。
そう、願った時だった。
あたしの手は強く輝き、その輝きはユイナの身体を包みこんだ。
それは、大鎌の男の放った術を、弾き返した。
「…む？」
男は、興味深そうに、片眉をあげた。
ユイナは、光に包まれたまま、宙に浮いて…
「お姉ちゃん！お姉ちゃん!!」
そして、光と一緒に…消えてしまった。
願いが通じたのか、自分の力なのか
分からない。けど…
ユイナは、守れた。
「そうか…お前が…」
大鎌の男は、あたしに向き直る。
やっと立ち上がれたあたしは、剣をとった。

それを、ヤツに向けた。
「殺してやる……！」
力の限り、睨んだ。
「我が名は、冥王ネルゲル」
ヤツは、冥王ネルゲルは、あたしに指を向けた。
そこに力が集中するのが、分かった。
「いつでも、殺しに来るがいい」
放たれる火球。
あたしは、絶叫して、剣をヤツに向かって投げた。

最期に見た光景は、火に包まれたエテーネだった。

けど、ユイナは無事

あたしは奇妙に満足感を持って、目を閉じた。

◇◆◇◆◇

目を覚ますと、不思議な空間にいた。
５つの像がある、妙に神秘的な、空間。
そして不思議と、死んだんだな……と、実感があった
『貴女は、まだ死ぬときではありません。』
女の人の声がした。
『新たな姿に生まれ変わり、自分の宿命に立ち向かうのです』
生まれ変わる…
かの伝説の勇者たちは、何度死んでも甦れることがらしいけど
それだろうか。
生まれ変わるなら、強靭な身体が欲しい。

力強くて、頑丈で、
もうあんな思いは、したくない。
強い身体が、欲しい。
『その姿を選ぶのですね』
迷いはなかった。
あたしが選んだ姿は…オーガ。
強くて、優しい、戦いの民。
あたしは生まれ変わって、冥王を殺す。
そしてユイナを探して、
一緒にエテーネに帰るんだ。

第2話　ランガーオ村

重力などないように、ふわふわと宙を舞う
このままどこへでも飛んでいけそうな気がするけど、
意識は、ある1点を目指していた。
そこは雪山の小さな村。
そこに住む人々は、赤い肌と角。そして強靭な肉体を持つ、人と異なる種族。
オーガ。鬼の名を冠する彼らは、戦闘民族で、
あたしが望んだ、強い身体を、持つ種族
村の入り口の広場に、女性が倒れていて、そこに、人が集まっていた。
宙から見下ろしていても、わかる。
彼らは、惜しい人を亡くしたのだろう。
魂だけのあたしは、吸い込まれるように、
眠るように死んでいる彼女へと、向かう。
身体の中に入る。
誰かと、すれ違った気がした。
『妹を頼む』
そう、言われたような気がした。

◇◆◇◆◇

ゆっくりと、瞼をあける。
ぼやける視界の中、上体を起こす。
まだ、焦点は安定しないが、それでも分かった。
幽霊でも見たかのように、固まってる。
それが、少し面白い。
「み、みみみ、ミュスナが……！」
神父の格好をした、オーガの男性が、アタシを指差した
定まった焦点、最初に、視界に飛び込んできたのは

「……姉さん!!」
黒い髪の少女だった。
視界にだけでなく、胸に、飛び込んできた。
このツヤツヤとした黒い髪。それでいて、ふわふわしていて、
見覚えがあった。
「良かった…!本当に良かった…!」
涙をためた瞳をみて、見覚えがあった、どころではない
それは確信に変わる。
「ユイナ…?」
黒い髪も、丸くて大きな金の瞳も、同じだった。
黒髪の少女は、ハッキリと答えた。
「はい!ユイナです!」
ユイナも、生き返しを受けた。
そう確信して、あたしは、ユイナの肩を掴んだ。
「ユイナ!怪我は、ないのか!?」
ユイナは苦笑した。死にかけてた人に、怪我の心配をされるとは、
思わなかったからだろう。
「自分の心配をしてください。姉さん。」
質問を重ねる。
「エテーネの皆は!?」
その質問に、ユイナは、眉根を寄せた。
「エテーネ??」
聞き返される。あたしは焦りをつのらせた。
「エテーネだよ…、アタシたちの、故郷の…」
「故郷?」
ユイナは、きょとんとした表情で、こう続けた。
「私たちの故郷は、ここ、ランガーオ村ですよ?」
この子は…ユイナじゃない。
「変な姉さん」
微笑んで言う姿が、妹と重なる。
『変なお姉ちゃん!』

けど、この子は、妹じゃない。
オーガのミュスナの妹、ユイナだ。

◇◆◇◆◇

状況を整理しよう。
今ここは、ランガーオ村の、オーガのミュスナの家。
ユイナに連れられ、言われるまま、やってきた。
問題は、先ほどのおかしな言動だが
それについては村の人から、頭を打ったから…
みたいな微妙な態度を取られ、心配された。
そして…
あたし、人間のミュスナはエテーネで殺されて、生き返しを受け、
この村のオーガの女性、ミュスナに生まれ変わった。
あたしと同じ、銀の髪と、金の瞳の女性。
オーガにしては白い肌。
他にも似通った点は多いけど決定的に違うのは、
角と尻尾。
…そして大きい胸。
前のあたしには…この半分もなかったな…
よし、揉んでみるか
ちょっとだけ、失礼します。オーガのミュスナさん
「姉さん～ご飯ですよ～」
あたしの変な葛藤は、食欲をそそる香りと共に現れた、ユイナに
よって中断される。
その手には、平皿と、それを覆う銀色のボール
彼女も、オーガにしては小柄だが、オーガらしい豊満な身体付きを
していた。
妹のユイナは、こんな身体ではない。断じて。
アタシより胸があるとか、そういう風に成長するとか、断じてない。
「食欲ありますか？」

アタシの混乱をよそに、オーガのユイナは、アタシを完全に姉だと思い込んでいる。
無理もない。
この身体に入る一瞬で、聞いた声の主
『妹を頼む』
そう言ったオーガのミュスナは、もう亡くなってしまったのだから。
…頼むって、こういうことかよ…
あたしは前途多難なこの先を思い、頭を抱えた。
「あぁ。大丈夫。」
とりあえずは、心配させてはいけない。
あたしの返事に、ユイナは、満面の笑みを見せた。
笑い方まで、同じだ。
「姉さんの好物用意したんですよ!ジャジャーン!」
大きな平皿に乗せた、銀色のボールを取り払う。
「いっかくウサギの丸焼きですー!」
平皿の上には、見覚えのあるモンスターが、ウェルダンに焼かれていた。
…オーガって、料理も豪快なんだな…
「いま、取り分けますからね～」
ユイナは、テーブルに、小皿をならべ、ナイフで、慣れた手つきで、うさぎを切り分ける。
アタシの分が渡される。
「はい!どーぞ♪」
とりあえず、受け取る。
「あぁ…。ありがと」
これって…モンスターだよな…?
あの、いっかくウサギだよな…??
なかなか手をつけないアタシを、ユイナが心配した。
「大丈夫ですか?姉さん…やっぱり食欲が…」
そんな顔されたら、要らないとか言えないだろうが…

この身体なら、腹こわしたり、しないだろう。
アタシは、覚悟を決めて、それを、口に運んだ。
「…んまい」
意外と、イケるんだな。
食ってみるもんだ。
「姉さん、まるごと1匹いけちゃうくらい、好きですからね！」
え…？これ1匹…？
抱えて余るくらいあるウサギを、丸々1匹食えちゃうの？
「たーんと！食べて！元気になってください！」
オーガって、何から何まで豪快なんだな…
慣れるまで大変そうだ
そんな心配をよそに、意外とすんなりと、ウサギは、アタシの胃に収まった。もちろん、1匹まるごと。

◇◆◇◆◇

食事を終えたあたしは、食後の運動がてら村のなかを見て回ることにした。
相変わらず、頭は混乱していたけど、村の人は、良くしてくれる。
当然か。あたしは、もうランガーオのミュスナなのだから。
ランガーオ村は雪山の山頂付近にあるため、かなり気候が厳しい。
けど、オーガの強靭な身体は、寒さにも、へっちゃらなようだ。
裸同然の毛皮の服という姿だが、あまり寒さを感じなかった。
そして何より、視点が高い。
元々大柄なオーガだが、ミュスナは、その中でも背が高い方なのだろう。
並の男性より、背が高い。
恋人探しには、苦労しそうだ。
まぁ、あたしには関係ないか。と自嘲気味に嘆息する。
そんなことを逡巡しながら村を歩いていたら声をかけられた。
「あら　ミュスナさん。　どうしたんですか？」

確か、この人は…村王の娘さんの、マイユさんだったっけ
倒れてたあたし…、つまりオーガのミュスナを見つけてここまで運んでくれたらしい。
つまり、彼女は恩人だ。
「ちょっと散歩にね。ここまで運んでくれてありがとう、マイユさん」
お礼を言っておかなければ。
マイユは、朗らかに笑ってくれた。
「いいんですよ。　ミュスナさんが無事で本当に良かった」
無事と言っていいものか、あたしは苦笑する。
マイユは言い終わったあとで、なにかに気づいたようだった
「あら？ミュスナさん。　ルーラストーンは、どうしたんですか？
いつも腰につけてるのに……。」
「？　ルーラストーン？」
聞いたことのない単語に、あたしは、眉根を寄せた。
「えっ　ルーラストーンが分からない……？
使うと　記憶させた場所に一瞬で飛べる魔法の石のことですよ？」
む、そんな貴重品を無くしたのか。
死んだ時に落としたのかな
「もしかして、ルーラストーンのことだけじゃなく、自分のことも、分からないんですか？」
そういうことに、しておこう。
あたしは、頷いた。
それから、マイユはいろいろと教えてくれた。
幼い頃に、ここにユイナと来たこと。
必死に修行に励んでいたこと。
「記憶が混乱しているのかもしれませんね……。
それにしても、なぜミュスナさんは
あんなところに倒れていたんでしょう？」
「あんなところ？」
マイユは、滅多に人が行かない所、と説明してくれた。
「そこに行けば、なにか思い出すかしら」

その場所はロンダ氷穴というらしい。
場所を、詳しく教えてくれた。
あたしは、その先のロンダ岬というところに、倒れていたらしいルーラストーンも、そこにあるかもしれない、とのことだった。
きっと、オーガのミュスナさんの大切なものだったのだろう。
なんとかして、取り戻してあげたい。
「分かった。行ってみるよ。」
「行くなら気をつけて。チカラも落ちてると思うので慎重に行ってください。」
心配が、心に染みる。
きっと、オーガのミュスナは、愛されていたのだろう。
ありがとう。と礼を行って、あたしはロンダ岬へ、ルーラストーンを探しに行くことにした。

第3話　ロンダ岬にて

ロンダ岬で落としたルーラストーンを探すべく、村の外へ向かうところを、ユイナに呼び止められた。
「あれ？おでかけですか？姉さん。」
心配そうに、見つめてくる。
数時間前まで、死にかけてたのだから、無理はない。
「宝物を落としちゃってさ」
自分の腰の辺りをポンポンと叩いてみせる。
ユイナは、その動作で、なにを落としたのか、察したようだ。
「あ、ルーラストーン落としちゃったんですか～」
おっちょこちょいですね、と、くすくすと笑うユイナ。
落としたのはあたしじゃなくて、君のお姉さんだけどね
「すぐ戻るから、心配しないで」
「姉さんなら大丈夫でしょうけど……」
やはり心配そうだ。
「いつもどんな魔物も、素手でバーン！ってやってしまいますし……」
オーガのミュスナ、ワイルドだな。
剣とか、欲しいところだけど、あいにく持ち合わせがない。
「うーん……、わたしもついて行っていいですか？」
1人じゃ少し心許ないな、と思い始めた時に、いい提案だった。
「分かった。一緒に行こうか」
「はい！」
すぐに聞こえた元気な返事に、思わず、頬が緩んだ。
初めての、姉妹共同戦線だ。

◇◆◇◆◇

村を出ると、さっそく見慣れたモンスターが居た。
「あれはスライムです！」
うん、知ってる。

「ぷるぷるひやひやで、抱っこすると気持ちいいんですよね～」
ユイナは、そう言うと、野生のスライムに近づき、
しゃがみ込んだ。
「おいで～怖くないですよ～」
そーっと、手を伸ばす。
おいおい野生だぞ、危ないぞ。
「……ひゃぁ！」
ほら、噛まれた。
「なんで怒るんですかぁ！」
ユイナは尻餅をつく。
オーガだから、なかなか豪快な音がしたけど、スライムは離さない。
「もう、なにやってんのよ」
あたしは、スライムの頭のとんがりを掴むと、強引に、ユイナから引きはがした。
「噛まれましたぁ……」
「スライム歯ないでしょ」
言いながら、放り投げる。
それから、一応、ユイナの手を取る。
「……ケガないね？」
「はい！」
気をつけなさい、と、手を離す。
振り返ると、さっきのスライムが、こちらを睨んでいた
「お、おこってますよぉ……」
ユイナは、さっ、と後ろに隠れてしまう。
スライムにビビるなよ。
「ユイナの手が不味かったんじゃない？」
「姉さんが投げたからです！」
なんて、やり取りをしていると、スライムは、長く伸びて……
ゴム飛ばしの要領で、体当たりをしてきた！
「ん。」
なかなかの勢いだけど直線的すぎる。

片足を突き出して、それを受け止める。
「よっ」
そのまま、蹴りをくらわせる。
スライムは、白目を剥いて、雪の上へ吹き飛んだ。
「さすが姉さんです！」
ユイナが手を叩いて喜んだ。
スライム1匹でこの喜びようだと、こっちが恥ずかしくなる。
それから、倒れたスライムを見て、こう呟いた。
「……スライムって、スープになるんですよ」
え？食うの？
無言で見ていると、黙ってスライムを持って帰ろうとしたので、慌てて止めた。
「ロンダ岬に急ごう」

◇◆◇◆◇

ロンダ氷穴は、その名の通り、氷の洞窟だ。
中の寒さは、外のとは、一線を画す。
「うぅここは寒いですね～……」
ユイナは、二の腕をさする。
2人して、裸同然の格好なのだから、当たり前だ。
「ロンダ岬は、この奥ですよ　寒いから急ぎましょう！」
寒さを凌ぐためか、ユイナは走り出してしまう。
「走ると危ないよ」
あたしが止めるのも聞かずに、ユイナは、1人で、少し広い空洞へと、入り込む。
すぐに悲鳴が聞こえた。
「きゃぁ！」
ユイナの元へ走る。
そこには、また、尻餅をついているユイナと、モンスターが1匹。
大きなトカゲ。

「め、メラリザードです！」
火をはく、小さなドラゴンだ。
けっこうカワイイけど、この辺りでは1番強敵だろう。
メラリザードは、大きく口をあけた。
そこに、小さいが、炎がまきあがる。
あたしは、ユイナと、メラリザードの間に、走り込み、
ユイナの代わりに炎をあびた。
「……っ」
「姉さん!!」
ユイナの悲鳴のような叫び。
けど、思ったより熱くない。
火をはいて、硬直しているメラリザードの顔を蹴りあげる。
渾身の力で蹴ったから、メラリザードの小さな身体は、壁に叩きつけられ、動かなくなった。
「大丈夫？」
それを確認してから、ユイナに振り返り、手を差しのべる。
「大丈夫ですか!?」
ユイナに、聞かれるのも同時だった。
「あんなんじゃ、ウィンナーも生焼けよ」
オーガは、火に対して強い耐性を持っている。
まったく、無傷とはいかないが、軽傷だ。
「動かないでください！」
ユイナは、あたしにそう言うと、傷のあたりに、手をかざした。
優しい光が、ユイナの手から放たれる。
「ホイミ！」
火傷をしていたのが、嘘みたいに、スーッと消えた。
ヒリヒリしていた痛みも、引いた。
「大丈夫ですか？」
すっかり治った腕を、さすってみる。
うん、痛くない
「大丈夫よ、ありがとう」

頭を撫でてあげると、気持ちよさそうに、目を細めた。
オーガのミュスナも、よくこうしてあげてたのかな。

◇◆◇◆◇

それから何度か戦闘したけど、大きなケガはなく、目的地であるロンダ岬につくことが出来た。
元々鍛えられてた身体だから、どのモンスターも、素手で、というか蹴りで倒せた。
「ここが、ロンダ岬です」
なかなかキレイな場所だ。
景色に見惚れていると、ユイナが、見つけてくれた。
「あ、あれじゃないですか？ルーラストーン」
ユイナが指さした方向を見ると、岬の中央に、青い石が落ちている。
それを拾い上げる
「これがルーラストーン？」
宝石のような石で、なにやら呪文印のようなものが刻まれてるから間違いないだろう。
「はい。大切なものですから、無くさないでくださいよ～」
あたしが無くしたんじゃないし～と、思いながらも、
「わかったわかった。」
無くさないように、しっかりと、腰に結びつける。
と、その時だった。
なにか、聞こえた。
低い、うなり声のような。
「いま、なにか聞こえなかった？」
ユイナに聞くと、あからさまに、嫌そうな顔をした。
「や、やめてくださいよ、そういうの苦手なんです」
心霊的な意味合いで言ったんじゃないんだけど。
「そうじゃなくて」
岬の奥へと、進む。

すると、何重もの、木の板と、鋼の錠で、封印された空間があるのに気づいた。
「なにこれ？」
こういうのを見ると、ちょっかい出したくなるのが、人の性。
「ダメですよ。触ったら。」
ユイナが、制止する。
「この向こうには、悪鬼ゾンガロンっていう、こわーい鬼が封印されてるんですっ」
ふーん、って相槌を打ちながら、ユイナと、封印の向こうを覗き込む。
「……誰かいるわね。」
背丈からして、オーガの男性だろうか。
剣を持った後ろ姿が、見える。
「……ジーガンフさん？」
ユイナに、見覚えのある人物のようだ。
ということは、村の人か。
「なんでジーガンフさんが、ゾンガロンの封印場所なんかに……」
妙に嫌な予感を覚えた。
見てはいけないものだったかもしれない。
「行こう、バレないように」
見つかったら襲われるかもしれない。
「……はい……。」
ユイナは、少し納得いかないようだったけど、ついてきてくれた。

◇◆◇◆◇

村に戻ってみると、慌ただしい雰囲気だった。
あたしは、戻るなり、村の女性に、声をかけられた。
「大変なんだよミュスナ！戦えるものは、すぐに格闘場にいっておくれ！」
あたしは、ユイナに格闘場の場所を確認して、向かった彼女には、こ

ここで待ってるように、すぐに戻る。
そう、伝えて。

第４話　狂鬼ジーガンフ

格闘場に駆け込む。
そこでは、すでに、２人の男が殴りあっていた。
１人は、先ほど、ゾンガロンの格闘場にいた、ジーガンフという青年。
いつのまに、先回りされていたのだろう……
もう一人は、知らない男だ。
痩せた頬に、バニラ色の長髪。
長髪の男が、ジーガンフに殴り飛ばされる。
「アロルド!!」
マイユの悲鳴。
アロルドと呼ばれた男は、立ち上がるが、なぜかやり返さない。
一方的な展開だった。
「なぜ、やられるままになっている……。」
ジーガンフが唸るように、言った。
「あくまで、戦いの神に、背き続けるつもりか……。」
憎悪に満ちた恐ろしい声だ。
それは、もうジーガンフのものではなかった。
「貴様ぁぁぁぁあっ!!!」
ジーガンフが叫ぶと、彼を紫色の、禍々しい気が包んだ
一瞬、強く光ると……
「はぁ……はぁ……。」
彼の、ジーガンフの姿は、異形の……魔物のような姿になっていた。
「なんとしても全力の貴様を叩き潰す!
でなきゃ、オレの怒りは、しずまらねえ!」
ジーガンフは、マイユへ向き直る。
「どうあっても本気を出さないというなら
これなら、どうだ!?アロルド!」
「きゃあああ!」
一瞬の出来事だった。

ジーガンフは、マイユを気絶させ、捉え、ひとっ跳びで高い岩盤の上へと、移動してみせた。
「アロルド！
マイユの命を、助けたければ
全力で、かかってこい！」
ジーガンフが吐き捨てる。
と、そのとき。
『ジーガンフよ……、我が元へ来い……。』
地の底から唸るような……魔物の声の特徴だ。
「今の声は、悪鬼ゾンガロンか……？」
ヒゲをたくわえたオーガの男性、確か村王クリフゲーン
「ジーガンフを追うぞ！
悪鬼ゾンガロンの所へ行ったに違いない！」
アロルドに、クリフゲーンが言った。
マイユは、オーガのミュスナの友人だ。
放っておくことは、できない。
「ミュスナ！おまえのチカラも貸してくれ！」
言われる前に、走り出していた。
格闘場を警備している、オーガの青年から、槍をひったくる。
それを背中にしまい、あたしは、ロンダ岬へ走った。

◇◆◇◆◇

ロンダ岬へ入ると、項垂れたマイユを抱えたジーガンフが待ち構えていた。
「アロルド……！貴様をたたきつぶし
勝負を汚した罪を、命で、つぐなわせてやる！」
その背中に、共に、駆け込んだ村王が叫んだ。
「ジーガンフ！マイユを離せ！」
そのとき、悪鬼の声が聞こえた。
『あがいても無駄だ、ジーガンフ』

ジーガンフが、苦しみ出す。
「そ、そういう……こと……か……
オレに、封印を解かせるつもりで……」
ゾンガロンのチカラを授かったジーガンフは、その支配下にあるはず。
しかし今それをはねのけようとしている。
「くそっ……意識が……！
アロルドを、たたきつぶすまで……」
しかし、封印されるような、魔物のチカラ。
そうそう抑え込めるものではない。
「オ、オレは……ウグ！……アアアッ!!」
苦しそうに呻き、マイユを海のほうへと、放り投げてしまう。
あたしも、動いたけど、それより早くアロルドが動いた
マイユをすんでのとこで、掴み、海に落ちそうになるも踏みとどまる。
「ミュスナ！
お前は、ジーガンフを食い止めてくれ！
わしは、マイユたちを助ける！」
「わかった！」
クリフゲーンが、マイユたちの所へ、走る。
ジーガンフが、それを阻止しようと、襲いかかる。
あたしは、２人の間に割って入り、その拳を槍の柄で、受けた。
「邪魔をするな！ミュスナァ！」
拳で、槍をぐいぐいと、押してくる。
なんて力だ。
「戦いの神だか、なんだか知らないけど……」
まともにやり合っても、埒が明かない。
あたしは、槍を引いた。
「ッ!!」
ジーガンフは、体勢を崩した。
無防備な横腹に、蹴りを叩き込む。

「ぐぅ……！」
飛び退くジーガンフ。
あたしは、槍を構え直す。
「そーやって、魔物に、チカラを借りるのも、反してるんじゃないの？」
より一層、額に血管を浮かばせ、ジーガンフが叫んだ。
「黙れェ!!」
チカラ任せに、拳を奮う。
「あら？図星？」
直線的すぎる、右の大振り。
かがんで避け、そのまま地面を蹴る。
勢いを乗せ、槍を突き出す。
腕を突いて、無力化を狙う。
「っ!?」
槍は、筋肉に弾かれる。
硬い……！まるで金属でも突いたかのようだ。
「フン」
ジーガンフが嘲笑した。
「お前、槍なんか使えたか？」
槍が突いた箇所を、蚊に刺されたかのように、指で掻いた。
「先っちょで刺せばいいんでしょ？」
腕がダメなら……
「楽勝よ。」
狙うは、額。
どんなに硬くても、頭に衝撃を与えれば、倒せる。
額に向かって、突き出した槍。
交差した腕に弾かれる。
さすがに読まれてたか。
「ガァッ!!」
ジーガンフは、交差した腕を解き、口を大きくあけた。
口から火球が吐き出される。
「くっ……」

横に跳んで、かわす。
その隙に、近づかれた。
……マズイ！
拳を、槍で受け止める。
槍が、みしみし、と悲鳴をあげる。
あたしは、後方へ、吹き飛ばされ、岩盤に背中を打つ。
「かはっ……！」
軽く咳き込む、けど、大事無い。
頼もしい、あたしが望んだ身体だ。
ゆっくりと立ち上がり、呼吸を整える。
それから……
「ゆるいパンチね？」
肩をすくめて、挑発する。
「貴様ァ!!」
乗った。
あの、火球攻撃。
狙うは、ここだ。
「……なにっ!?」
放たれる火球に、あたしは、正面から、つっこんだ。
オーガの強さを、信じて、賭ける。
火を、あびた。
メラリザードのとは、比べ物にならないくらい、熱い
……が。
「……ハァっ!!」
耐えた。
炎の中から、槍を突き出す。
槍は、ジーガンフの額を抉った。
「ぐぁっ!!」
鮮血が飛び散る。
「男前になったわね」
槍の先端についた血を払った

ジーガンフは、頭を抉られ、フラフラとしている。
さすがに、ダメージは、あったようだ。
「さすがだミュスナ……。
女でありながら……その度胸、チカラ、身長……」
「身長のことは言うな！」
気にしてるんだから。
さすがの魔物も、脳を突かれ、気分が優れないようだ。
フラフラとした足取りで、
「だが、弱点がある。」
それでもジーガンフは、ニヤリと笑った。
あたしは、振り返る。
そこには、岬の入り口に、ユイナがいた。
隠れるように、顔半分、覗かせて。
「弱い妹がいるってことだァ!!」
ユイナへ、向かって、走る。
あたしも、ジーガンフも。
まだあんなに動けたなんて……
「ユイナ！逃げろ！」
ジーガンフのほうが早い。
ユイナへ、拳を突き出す。
「きゃぁ！」
ユイナは、しゃがんで、それを、かわす。
ジーガンフの拳は、岩盤を砕いた。
もう1発、振りかぶった瞬間、、、
間に合った!!
槍の柄で、ジーガンフの拳を防いだ……が
槍は砕け、拳はミュスナの顔面へと、叩きつけられる。
ぐらっ……と、景色が歪む。
唇をかんで、意識をつないだ。
「どこ……みてんのよ」
声を絞り出す。

「あんたの相手は、あたしだ……！」
この子はユイナじゃない。
妹のユイナじゃない。
別人だ。
「ユイナに……!!」
この言い方は、正しくないのかもしれないけど
けど、不思議と、あたしを奮い立たせる。
「妹に……手を出すなァ……ッ!!!」
怒りは雷撃を呼ぶ。
大好きな絵本の一節を思い出した。
あたしの手は、雷撃を纏っていた。
折れた槍に伝わる雷撃。
それを、先ほど穿ったジーガンフの額に、叩きつけた。
「グァァァァ……!!」
あとに聞いた話によると、これは槍の奥義『雷鳴突き』と言うらしい。
ジーガンフは、頭に雷撃をあびて、うめき、倒れ伏した
「……どうやら頭は、あたしのが硬いみたいね」
動かなくなったジーガンフを見て、安堵する。
「……姉さん!!」
と、同時に視界が大きく歪んで、あたしは、折れた槍を落として倒れた。
泣いてるユイナが、ぼやけた視界に現れる。
「ごめんなさい……。わたしが来たから……ごめんなさい……ごめんなさい……。」
泣かないでよ。死にはしない。たぶん。
そう言う代わりに、ユイナの頬を撫でた。
「ケガない？」
ぽたぽた、と、ユイナの涙が、あたしの頬に落ちてくる。
「はい……ありません……。」
あたしは、たぶん、心の底から安心して、

微笑んで言った。
「良かった。」
ふっ、と意識が遠のいた。

第5話　姉妹の旅立ち

気がつくと、懐かしい場所にいた。
懐かしいと言うには、まだ早いかもしれないが、
それくらい愛おしい場所ということだ。
エテーネの村。
冥王に破壊し尽くされた、あたしの故郷だ。
自分の身体を見てみると、それは
「……あたし、だ」
人間の、エテーネのミュスナのものだった。
小さな手のひらを見つめる。
「どうしたんだい？やんちゃ娘」
呆然としていると、背中から、声をかけられた。
振り返ると、そこには……
アバがいた。
その後ろには、ほかの、村のみんながいた。
「寂しくて、こっちに来ちゃったのかい？」
めったに聞けない、優しい声音だった。
あたしは、寂しいわけないだろ。と言おうとした。
が、声が出なかった。
かすれた吐息すら、出ない。
「おねえちゃん？」
口をパクパクさせていると、また、背後から、声がかかる。
振り返らずとも、分かる。
おそるおそる、振り返る。そこにはやっぱり……
「どうしたの？おねえちゃん。」
エテーネの、ユイナが。
妹のユイナがいた。
名前も呼ぼうにも、声が出ない。
抱きしめようとも、身体が動かない。
「ないてるの？だいじょうぶ？」

それなのに、涙は、ぽろぽろと頬を流れる。
見上げてくる大きな瞳が、心配そうに細められる。
大丈夫。と伝えたいけど、声が出ない。
なんとか、頷くことは出来た。
「そっか。よかった！」
にんまりと、笑う。
「おねえちゃんなら、だいじょうぶだよね」
そう言うと、ユイナは、あたしの横を、通り過ぎた。
アバの隣まで、歩いていき、そこで振り返る。
「じゃあ……またね。」
手を振る、ユイナ。
あたしは、待って、行かないで。
言おうとしたけど、かすれた吐息すら出ない。
「だいじょうぶ。」
駆け寄ろうと、足を踏み出そうとしたが、鉛のように、動かない。
手を伸ばすことすら、出来なかった。
「きっとまた、あえるよ。」
村のみんなの姿が、ユイナの姿が、光となって、消えていく。
やっと、あたしの手が動いたのは、全て、消えてしまってからだっだ。

◇◆◇◆◇

目を覚ますと、見慣れない天井へ向かって手を伸ばしていた。
伸びた手は、見慣れない模様のついた、大きな手。
あたしの手ではなかった。
「目が覚めましたか？」
その手に、同じような模様のついた、柔らかそうな手が添えられた。
ユイナの手だ。
あたしは、上半身だけ、起こす。
「どのくらい寝ていたのかしら？」

「半日くらいです」
ユイナは、それと、と付け足した。
口元を指さす。
「喋り方、無理しなくていいですよ。」
オーガのミュスナのらしくいるために、慣れない女性口調を使っていたのが、バレたようだ。
「慣れないことするもんじゃないな。不自然だった？」
「……少し。」
ユイナは苦笑して、答えた。
それから、悲しげに目を伏せた。
「村王様から……聞きました。」
なにを聞いたのか、なんとなく、察しがついた。
「あなたの、本当の姿を……鏡で……。」
なんて声をかけるべきか。
「わたしの……姉さんは……もう……」
大きな瞳から、ぽろぽろ涙が、こぼれていた。
あたしは、気づいたら、ユイナを抱きしめていた。
「つらかったな……」
突然、姉死んで、その身体は、別人のモノとなってしまった。
そんなことを聞かされて、納得出来るわけがない。
「大丈夫……です」
それでも、ユイナは、気丈に振舞った。
「あなたのほうが……たくさん無くして……つらいはずです」
そして、あたしを気にかけてくれる。
優しい子だ。
「無くしたものに、大きいも、少ないも、ない。」
大切なものなら、尚更だ。
「つらいときは、泣けばいいんだ。」
「わたしは、もう充分泣きました。」
そう言って、ユイナは、あたしを見上げた。
「あなただって、つらいときは、泣いていいんですよ？」

あたしは、苦笑する。
「あたしが泣いたら、誰がユイナをなぐさめるんだ？」
ユイナは、ほんの少し、唇をとがらせた。
「……もうっ」
ユイナの涙を拭ったところで、あたしたちは、お互いのことを、話し合った。
「わたし、ずっと姉さんに守られて生きてきたんです」
ユイナが、語り始める。
「一番古い記憶は、姉さんの背中。その頃は、まだ小さくて、わたしのほうが、小さかったですけど」
なぜ、姉の背中なのか、尋ねてみると、
両親は、赤ん坊の頃に亡くしたようだ。
「パパとママの言いつけで、姉さんは、わたしを連れて、ランガーオ村へ向かっていたそうです」
子供の足で、ここまで、登るのは至難の業のだろう。
「この山の麓で、わたし、高熱を出してしまって、危ない状況だったみたいで……」
今も、よく体調崩してしまうんですよ、とユイナが弱々しく笑う。
「姉さん、少しも休まず、この山を、わたしをおぶって、登りきったんですよ」
あと少し遅かったら、危なかった。
と、村の医者は、語ったそうだ。
「この村に来てから、姉さんは修行を始めて、わたしも一緒にやろうとしたんですが……」
「すぐギブアップしたんでしょ？」
ユイナが頬をふくらませた。
「姉さんがスパルタすぎるんですぅ！」
しかし、ミュスナは、目的があって、修行していたようだ。
詳しいことは、知らないのだと言う。
「いつか、村を出るって言ってました。わたしは、その手伝いをしたくて、勉強したんです。」

「勉強？」
なるほど、方向転換か。
ユイナは、誇らしげに答えた。
「魔法と、魔物です！」
そして、真摯な表情で言った。
「姉さんの助けに、なりたかったんです」
だが、姉さんは、もう……
その事実に、ユイナは身を震わせた。
「あたしも、手伝うよ」
この身体を使う上で、出来る限りのことをしたい。
だから、そう申し出た。
「ありがとうございます！」
ユイナは、快く、協力を受けてくれた。
「さぁ、次は、あたしの話だ」
ユイナは、元気よく返事すると、真剣な顔で、あたしの話を聞いた。

◇◆◇◆◇

だいたいの身の上を語った上で、ユイナは、聞いてきた
「これから、どうするんですか？」
ミュスナは、腕を組んだ。
あの女神は、使命を果たせ、生まれ変わった意味を探せと言っていたけど
肝心の使命が、よく分からない。
ただ、1つ、確かなことは……
「旅に出る。」
ここに居ても、意味がないということだ。
「そう言うと、思っていました。」
ユイナは、そう言うと、おもむろに、何かを取り出した
それを、あたしに渡してくる。
「……これは？」

「1人前の証です」
なにそれ？と聞くと、やはり得意気になるユイナ。
「所持してると、国王の謁見まで許される、冒険者の必需品ですっ」
「じゃあ、無くさないようにしないとな。」
あたしは、懐に雑にしまい込む。
ユイナは、もう一つ、貴重品を渡してくれた。
「それと、これです。」
「ん？豪華な……チケット？」
1目で高級と、分かるそれを、慎重な手つきで受け取る
「大陸鉄道パスです。それがないと、このオーグリード大陸から出れないので……」
「無くさないように？」
「……ですっ」
ユイナは、にっこり笑った。
それから、全く同じものを、取り出した。
「そしてこれは、わたしの分です！」
何を言いたいのか、すぐ分かった。
ユイナは、真剣な表情で、言った。
「わたしも、旅に出ます。」
あたしは、少しきつめの口調を、作る。
「きついぞ？甘い考えでは……」
「覚悟の上です。」
ユイナの即答。
その目的は、分かっている。
「目的は、同じかな？」
ユイナは、頷く。
それから、それと、と付け足した。
「わたし、強くなりたいんです。」
真っ直ぐに、見つめてくる。
「姉さんが、安心して、眠れるように。」
ベットから立つユイナ。

キレイに、模範的に、あたしに頭を下げた。
「わたしも、連れていってください」
オーガのミュスナの言った言葉が、脳裏をよぎる。
『妹を頼む。』
この身体を使う上で、もっとも大切な役割だろう。
「支度してきな」
「ありがとうございます!!」
ユイナは、はじかれるように、部屋を飛び出した。
あたしは、誰にも聞こえない声で、
オーガのミュスナに言った。
「任せな。」

◇◆◇◆◇

支度をすぐに済ませたユイナと、玄関前で、落ち合う。
「お、早かったな。女は、準備に時間かかるものなのに」
「ここで置いていかれるのは、よく聞く話なので。
それに、ミュスナさんも女ですよ?」
「あんま言われないんだよ、それ。」
身体は、女性的だけどな。
背は高いけど。
「あ、ミュスナさん」
「んー?」
また、近衛のおっちゃんから槍を奪わなきゃな。
なんて考えてたら、呼ばれる。
「あの時、ジーガンフさんに、襲われた時の、ことですが」
「……あぁ。」
あの時、激情に駆られて、言ったことがあったな。
『妹に手を出すな』
あの状況で、打算的に言えるほど、頭は良くない。
「わたしを庇って、妹と呼んでくれました。」

「……嫌だった？」
ユイナは、首を横に、勢いよく、振った。
「あれは、心から、叫んだことですか？」
「当たり前でしょ」
あたしの即答に、ユイナは、にんまりと笑った。
それは、あたしの妹、エテーネのユイナと同じ笑い方。
「あなたも、わたしの姉さんですね。」
あたしは、そんなユイナの頭をぽんぽんする。
「あんたも、あたしのユイナよ。」
えへへ、とユイナが、はにかんだ。
たぶん、あたしも、はにかんでた。
「姉さんって、呼んでいいですか？」
あたしは、即答する。
「それ以外で呼んだら、怒る。」
歯を見せて、ニヒヒと笑う。
「はーい！……あ、それ姉さんの笑い方です！」
「どっちの？」
ユイナは、にんまり笑う。
「両方です♪」
ここに来て、大切なものを得た。
「ミュスナなんだから、当たり前でしょ。」
さあ、旅に出よう。
今度は、手放さない。
ユイナの手をとって、引いた。

第６話　グレン城下町

「まず、どこから、向かいます？」
　村の出入り口前、近衛のおっさんから、また槍をひったくってから、そこに向かう。
　と、ユイナが、先に行って、待っていた。
「なにをするにも、まず人が多いところに行かなきゃな」
　当面の目的は、３つ。
　１つは、妹のエテーネのユイナを探すこと。
　２つは、オーガのミュスナの生前の目的を果たすこと。
　そして、３つ目は、冥王を殺し、仇を討つこと。
　いずれにせよ、人に話を聞かなければならない。
「では、グレン城下町に、向かいましょう」
「グレン？」
　あたしが聞くと、ユイナは、人差し指を立てて胸を張った。
「グレン城下町。そこはオーグリード大陸の都、ガートラント王国に匹敵するもう一つの大きな王都で……」
「ほう。」
「大陸鉄道の中心として扱われる、冒険者たちの中心です。掲示板には、たくさんの仕事が、扱われています」
「稼げそうだな。」
「その歴史は、深く、時は５００年前までに、遡ります」
「待って。もういい。」
　ユイナの話は、長い。
　大した知識量だけど、いま、重要なのは、そこじゃない
「ここからが、面白いのに……」
　不満そうに、唇をとがらせる。
　続きは、寝る前にでも聞かせてくれ。
「こっから遠いの？」
「結構ありますね。まずは、獅子門に向かわないと」
「獅子門？」

……あ、と口元をおさえる。
遅かった。ユイナは、得意気な顔で、説明を始めた。

◇◆◇◆◇

村を出ても、ユイナの説明は、続いていた。
話は、獅子門の話から、そこを流れる光の河の話になっている。
聞き流そう。ユイナのいい声は耳に優しい詩となる。
そう、思うようにした。
……が、あたしは、ユイナを止めた。
「ユイナ、静かに。……魔物だ。」
強い、獣の臭いを感じた。
オーガは、鼻もいいのか。
「？　なにも居ませんけど……」
ユイナは、なにも、感じないようだった。
確かに、周りには、何も無い。
でも、まだ臭いは、していた。
こちらを狙ってるわけでは、無さそうだが。
「あ、ウサギさん」
ユイナが指さす。
かなり遠方に、いっかくウサギが跳ねた。
いっかくウサギが遠ざかると、臭いも、遠ざかった。
あんな距離から、分かっていたのか。
「すごいな、オーガの能力は」
「いえいえ、それは、姉さんの特徴ですよ」
ユイナは、興味深いことを言う。
「姉さんは、昔から五感に優れてまして、だから、大人に混じって仕事が出来たんですよ」
つまり、魔物の位置が、分かるのか。
これなら、幼いユイナをおぶって、この危険な山を子供だけで登りきったのも、頷ける。

「ただ、少しデリカシーに欠けますけどね」
「へぇ例えば？」
「『血のにおいがするぞ。あの日か？』とか……」
あたしも言いそうだ。危ない危ない。
ユイナは、また唇をとがらせる。
「そちらのユイナさんは？」
「んー、ワガママで、手のかかるやつだよ」
君とは、大違いだ、と言うと、ユイナは、少し誇らしげだ。
「手のかからないのだけが取得でしたからね！」
「えばれることなのか？それは」
スルーして、ユイナは、質問を重ねる。
「かわいいですか？ユイナさん」
「もちろん。絵本を読んでやると、静かになるんだ」
「まあ！かわいい！」
ユイナが微笑んだ。
話してると、山の中腹まで、きた。
「……ここから少し敵が変わったな。」
鼻を利かす。
なるほど、便利な身体だ。
「あそこと、あそこに、1匹。いや、2匹か。」
慣れる必要があるな。
ユイナがいるから、出来るだけ戦闘は避けたい。
「こっちから行こう。おいで、ユイナ」
「はぁい」
街道を外れる。ユイナは、反対一つなく、二つ返事で、ついてくる。
「そこ、段差だから気をつけて。」
「大丈夫ですよ～」
と、言いつつ、足取りは、何だか危ない。
獅子門まで行ったら、少し休ませないとな。
「心配しすぎですよ。」
そんな考えを見られたようなタイミングで、ユイナが言った。

「おんぶしてあげよーか？」
「大丈夫ですっ！」
「そかそか、獅子門は、もーすぐだ、頑張りな」
「はぁい」
獅子門までの道のりを急いだ。

◇◆◇◆◇

獅子門は光の河を挟んだ関所だ
その河は、美しいが、底が知れない。
そこには、何があるのか、議論になったことはあるらしいが。
「試した人は、居ないですからね。」
「それで、分からずじまいか。」
当然と言えば当然だ。
これからも、永遠の謎だろう。
「旅人バザーがありますね」
その光の河を挟んだ手前の看板、ユイナが指さした。
「旅人バザー？」
「いわゆる旅人のフリーマーケットです。」
「ふ、ふりま……？」
分からない単語が増える。
「つまり、ほかの冒険者が売りに出してるものを買える場所です」
なるほど、冒険者でも気軽に商人をやれるところ、というわけか。
「いろいろありそうだ。寄っていこう」
「この毛皮姿じゃ、嫌ですしね……」
と、いうことで。
あたし達は、バザーで、それぞれ装備を揃えた。
あたしは、青銅の鎧で、
ユイナは、絹のローブ。
「けっこう軽い鎧だな。もう少し重めなの選んでも良かったかな」
「姉さん、おへそ出てて、かわいい♪」

そう、鎧なのに、なぜか、ヘソが出る。
涼しくていいけどね。
「ユイナは……いかにも、すごい似合ってるな」
「絹の肌触り気持ちいいですねぇ♪」
ありがとう。
バザーの店員に一礼して、あたしたちは、獅子門を通過した。

◇◆◇◆◇

「グレン領に入ると、なんでこんなに暑いんでしょぉ～……」
そう言って、ユイナは、胸元をパタパタさせる。
ちらちら見える胸元を無防備だな、と思いながら見つめる。
「街中で、パタパタしないでよ？」
「……？　なんでですか？」
あたしは、頭を抱える。
悪い男に引っかからなきゃいいけど。
「わ、おっきいモンスター」
ユイナが指を指す方向をみると、黄色い巨体の、モンスターがいた。
強烈な臭気を放っていたのはコイツか。
「ぬぼーっと、してそーなヤツだなぁ」
「太古のぬし、ですね。人間が存在する前から存在したいにしえの魔獣で、不用意に近づいたものを吹き飛ばしちゃうらしいですよ？」
「へぇ。……じゃあ、これやばくないか？」
「……ヤバイですね。」
太古のぬし、が、こちらを睨む。
「逃げろーーーー!!!」
「はぃぃーーーー!!!」
全力失踪で、グレンを目指した。

◇◆◇◆◇

「やっと着きましたね……」
グレン城下町の前、肩で息をするユイナに、飲み水を渡す。
ユイナは、受け取ると勢いよく飲んだ。
「ここが、グレン城下町か～」
橋を渡れば、すぐに、街中に出れる。
街に入ると階段があって、その先には、王城が見える。
その階段の周辺、人が集まっていた。
確かに、剣をはいた青年や、杖にとんがり帽子の女性、
見るからに冒険者の人々で、溢れていた。
「す、すごい人混みですね……」
「はぐれないでよ」
人混みに流れていってしまいそうなユイナの手を取る。
さて、まずは、王に会うか、仕事を探すか。
「ここの王は、どんな奴なの？」
「バグド王ですか？」
それが王の名前か。あたしは、頷いた。
「厳正な賢王と聞きましたが、最近は、良い噂を聞きませんね。会うなら気をつけた方がいいかもです。」
「最近は？」
引っかかる言い方だ。
「うーん、なんて言うか……。」
ユイナが、腕を組んだ、その時だった。
鉄の兵団が歩いてくるような、重苦しい足音。
それも、大量の。
「……大量の鉄の匂い。穏やかじゃないな。」
戦争は、こういう匂いがするのだろう。
ユイナも、不安そうに、王城を見上げる。
いつのまに、集まっていた冒険者たちも、散って、それの道を作っていた。
「彼が、バグド王です。」
鎧の兵団の先頭、マントを羽織った半裸のオーガがいた頭には、王

冠が輝いている。腰には豪奢な剣。
まるで、戦場に向かうかのような、緊張した雰囲気だ。
「まさか、本当に戦争に……？」
ユイナが呟いた。
本当に、と言うと以前からそういう雰囲気だったのだろうか。
「戦争？どこと？」
あたしの質問には、別のものが、答えた。
「おやめくださいバグド王！」
鎧の兵団の先頭、バグド王の前に、兵士らしきオーガの男性が躍り出た。
ほかの兵士より、位が高いのか、豪華な鎧を着ている。
「ガートラントを攻めるなど！」
バグド王の前に、ひざまずき、その行く手を阻む。
「お考え直しください！」
王は、ゆっくりと、口を開いた。
「余に、意見するか。」
腰の剣を抜き放つ。
「王……!?」
兵士の男が、驚いて立ち上がる。
「余の言は絶対だ。それに反対することは」
「お、おやめください……!!」
後ずさる男。剣を手に、切迫する王。
「反逆と、見なす。」
剣を振り上げ
「反逆罪は、死罪だ。」
それを振り下した。
「バ……、バグド王……」
宿屋前の広場に鮮血が広がり、青年が倒れる。
「いやぁぁ!!」
ユイナが叫んだ。
まわりの冒険者も、叫んだ。

その中から、飛び出す影があった。
「あなたぁ！」
「パパぁ！」
斬られた男の、妻子だろうか。
血まみれで倒れる男に、駆け寄る。
「その男の家族か。」
バグド王が静かに言い、
再び剣を振り上げた。
「反逆の一家は、根絶やしにしなければな。」
振り下される剣。
そこに、もう一つの影が躍り出た。

第7話　魔法戦士アルベール

あたしは、狂王バグドと、母娘の間に割って入る。
なにも、考えない。
槍を無造作に突き出し、剣の攻撃を受けた。
周りが唖然とした。
突如、狂王を止める、女の戦士の登場に、文字通り、凍りついた。
あたしは、そんな沈黙を壊すように、怒りに拳を握った
「王が……、こんな簡単に……ッ！」
握った拳が、雷撃をまとう。
それを、ふりあげる。バグドの双眸が、見開かれる。
「こんな簡単に……ッ!!」
力の限り、殴りつける。
「人を……ッ!!殺すのかッ!!!」
雷撃と、重い拳を頬にもらい、バグドは膝をつく。
一瞬の、沈黙。
それを破ったのは、バグド王だった。
「その女を捉えよ!!!」
反射的に、兵士が2人、あたしを挟むように、取り囲む。
同時に飛びかかる。あたしが、しゃがむだけ。2人は、額を打ち合わせ、転倒した。
「今のうちに逃げな。」
母娘に言ってから、そのまま、駆ける。
階段を飛び降り、人混みに逃げ込んだ。
「あの女を捉えよ!!抵抗するなら殺して構わん!!」
人混みで、うまく動けない。
兵士たちが、すぐに迫ってくる。
くそ、こんなところで、死ぬわけには行かない。
「姉さん……!!」
ユイナが、駆け寄ってくる。
バカ、離れてろ。他人のふりしてるんだ。

「黒髪の女は、近親者のようです！」
「その娘も捉えよ!!」
言わんこっちゃない。
人混みから、手を伸ばし、ユイナの手を引いた。
背中に、隠れさせる。
そうこうしてるうちに、兵士に追いつかれた。
「ユイナ、あんたは逃げな。」
槍を構える。幸いにも、冒険者に、敵対する者は、居なかった。
だが、数が、多い。
ユイナだけは、逃がさなくては。
「いやですっ!!」
こういうときばっかり、言う事を聞かないんだから……
少しキツイことを言わないと……
兵士が剣を抜く。
そんなことをしてる暇は、なさそうだ。
仕方ない。腹を決めた、そのとき
「こっちだ!!」
青年の声。
冒険者の人混みの中から、腕が伸ばされていた。
冒険者たちが、波のように、左右に割れた。
青年は、細い路地から、手を伸ばしてい。
「ユイナ！」
あたしは、ユイナの手を取り、青年の手をとった。
青年は、あたしたちを引き寄せ、路地の中へと、引き込む。
青年と、対峙する兵士たち。
青年は、腰に下げていた剣を抜いた。
鷹の装飾だろうか。美しい紅い鞘の剣。
刀身は、輝く銀色。
その刀身に、空いている手、右手を、軽く這わせた。
すると、剣が、神々しい光を放つ。
「……！あれは……!!」

ユイナが、なにか言いたげだ。
青年は、それを遮り、剣を奮う。
「輝剣斬!!」
剣を素早くふると、輝きが強くなり、見てるだけで、目を灼かれそうになる。
目くらましか。
「こっちだ!」
あたしは、青年に手を取られるまま、路地の奥へとユイナを手を引いて、走って行った。

◇◆◇◆◇

なんとか、グレンから脱出できた。
命からがら、グレン領西へと、逃げ延びた、あたしたちまずは、礼を言わなければ。
「ありがとう、助かったよ」
あのまま戦闘していたら、捕らえられていただろう。
ユイナもろとも。
この青年には、感謝しきれない。
「いいんだ。無事で良かった。」
さわやかに笑う青年。
ユイナが、直角に頭を下げた。
「ありがとうございます……!
……でもわたしたちのせいで……」
そう、あたしたちの、いやあたしのせいで、この青年も追われる身となってしまった。
あたしの……責任だ。
「君たちは、正しい行動をした。そんなふうに自分を責めてはいけないよ。」
それから青年は、胸の金の輝くメダルを見せてくれた。
彼の全身を包む紅いコートによく映える、美しいメダルだ。

「俺も、この証にかけて、正しいと思う行動をしただけだ。」
まるで、中世の騎士だ。
青年は、言ってから、つば付きの紅い帽子を軽くあげて照れくさそうに笑った。
帽子から覗く少し長めの髪は、濃い蒼色で、サラサラしていそうだ。
「やっぱり、それは、魔法戦士の証ですね！」
メダルをみたユイナが、興奮気味に言った。
「そう、よく知ってるね」
青年が朗らかに笑うと、ユイナは得意げに、知識を披露する。
「魔法戦士といえば、ウェナ諸島の大国、ヴェリナードの専属で特殊部隊でエリート集団で！
魔法と卓越した剣技で戦う、容姿にも優れた、紳士の集団！
アストルティアの問題解決率も、トップクラスと聞きます!!」
「く、くわしいね」
青年が、笑みが引きつる。ユイナ、引き気味だぞ。
瞳を輝かせるユイナ、青年は、たじろぐ。
「わたし、大ファンなんですよっ!!!」
「ありがとう。嬉しいよ。」
が、まんざらでも無さそうだ。
さて、そろそろ名乗っておこうか。
「あたしは、ミュスナ。こっちは、妹のユイナ。
本当に助かったよ魔法戦士さん」
ユイナをいったん、さて、下がらせ、自己紹介をする。
青年は、襟を整えてから、胸に手を当て、仰々しく、一礼してから、名乗った。
「俺は、アルベール。こうなったのも、何かの縁。
以後、お見知りおきを。」
あ、あぁ。慣れない堅い挨拶に、変な返事をしてしまう
アルベールは、苦笑する。
「ごめん、堅かったかな。よろしく、ミュスナさん」
手を差し出してくる。

あたしは、その手を取る。
「ミュスナでいいよ。よろしくなアルベール」
と、向かい合ってみると、息を呑むほどの、美青年だ。
肌は、透けるように白いので、エルフだろうか。
だが、エルフは、小柄な種族だったはず。
アルベールの目線は、ミュスナと並ぶほどある。
その視線に気づいたのか、アルベールは、帽子を外した
「君たちと同じ、オーガだよ」
蒼い髪の間には、あたしと同じ角があった。
「父がオーガで、母がエルフなんだ。」
肌の色は、母親譲りなんだ。
ほかのオーガみたいな筋肉に憧れるなぁとアルベールは苦笑する。
「オーガのくせに、なまっちろくて、これで、角を隠しているんだ。かっこ悪いからね」
そんなことない、と言いかけるあたし。
「そんなことないです!」
ユイナに先を越される。
アルベールは、目を丸くしている。
「すっごく、かっこよかったです!えーっと、きけんざん??」
アルベールは、あぁ、と得心いってから、照れたように笑う。
「あれは、エルフの伝統なんだ。忘れて忘れて。」
技名を叫ぶ伝統があるのか。面白いな。
「それに、剣が光ったアレ!魔法戦士の奥義の『フォース』ですよね!」
「そうだよ。」
「大気中の精霊と仮契約を結んで、剣に属性を宿す!
中でも光属性の『ライトフォース』は、高位の魔法戦士でないと習得できないって……」
「くわしいね……」
ユイナは、胸をはって、言う。
「大ファンですから!」
アルベールは、照れ隠しに、帽子を深くかぶった。

これが、俗に言うオタクというやつか。
さっき、あんなことが、あったのに、ユイナは、だいぶ元気だ。
オタクパワーか、無理をしているだけか。
なんとなくだけど、後者なような気がする。
「1日置けば、変装すれば入れるようになると思う。
でも、箱舟は使えないかな
どうするかは、おいおい考えよう。」
そう言うと、アルベールは、バッグから、なにかを取り出した。
香ばしい、長方形の箱だ。
「ご飯でも食べて落ち着こう。
俺は、薪を集めてくるから、2人は食べてて」
アルベールは、あたしたちに、弁当箱を押し付けるように渡してから、自分は、さっさと、行ってしまった。
「……どうする?」
街には戻れないし、何かをやろうにも、街で聞かねば始まらない。
前途多難すぎる開幕だ。
悩んでると、ユイナの腹が鳴った。
「あぅ……」
「とりあえず、食うか」
悩んでいても仕方ない。
あたしは、正しいことをしたんだ。
アルベールの言葉が、自分でも意外なほどに、あたしを勇気づけていた。

◇◆◇◆◇

わたしは、焚き火の光にあたりながら、空になった、お弁当箱を見つめる。
すぐそばで、アルベールさんが、焚き火に薪をくべていて、わたしの傍らで、姉さんが眠っている。
アルベールさんは、何も食べていない。お弁当は、2つしか、なかっ

たのかな。
「眠らないのかい？ユイナさん。」
気まずい沈黙を、アルベールさんの優しい声が、破ってくれる。
「アルベールさんこそ。火は、わたしが見てますよ。」
「野宿は、けっこう慣れてるんだ。俺は大丈夫。」
眠らないんじゃない。
眠れないんだ。
一つのことが、胸にひっかかり、引っかき回し、
お腹が痛くなる。
「……眠れないの？」
「……はい。」
鋭い人だ。わたしは、素直に頷いた。
わたしの胸中を責めるのは、昼間の件。
「姉さんは、正しい行動をしました。……アルベールさんも。」
「うん」
２人は、正しい行動をして、生き延びた。
だけど、わたしは？
「あのオーガの方が斬られたとき、すぐに駆け寄って回復してあげてたら……」
そう、ここだ。
わたしが、してたら、助かったかもしれない。
そのことが、ひどく、わたしを責めていた。
「そうかもしれないね。けど、それをしたら、君は、殺されていた。」
反逆者を、王の目の前で、助けようとしたら。
そんなの、わかってる。
「自分を守る行動が、もっとも正しい行動だよ。」
「だけどッ!!」
わたしは、拳を握りしめる。
人を殴ったことなんか一度もない、弱い弱い拳を。
「姉さんは……動きました」
「彼女は、君を危険に晒した。」

それは、姉として、正しくない。
わたしが動いていたら、姉さんも、危険に晒されていた
なにが、正解だったのか、分からなくなる。
「本当は、正しいことなんて、ないのかもしれないね」
だったら、とアルベールさんが続けた。
「自分が正しいと、信じるしかない。信じたことを、するしかないよ。」
アルベールさんは、薪を火へ、投げ込む。
「そして、自分らしさを貫くには、強さが必要なんだと思う。」
俺は、そうした。
そうして、色々あったけど、後悔してない。
弱々しかったけど、笑っていった。
「悔しいこと。つらいこと。かなしいこと。胸にしまって、憧れの背中を追いかけるんだ」
俺は、そうしたよ。とアルベールさんが言った。
わたしの、憧れの背中。
ずっと、守ってきてくれた、姉さんの背中。
姉さんは、わたしを、置いて逝ってしまったけど、
今も側で守ってくれる。
守られてるだけは嫌です。
わたしが、守ってあげたいんです。
もう2度と、失いたくないんです。
わたしは、姉さんの横に寝転がった。
「お言葉に甘えて、寝ますね」
「うん、おやすみ」
わたしは、寝転がったまま、アルベールさんを見上げる
「ありがとうございます、アルベールさん。」
アルベールさんは、さわやかに笑った。
寝返りをうった、寝てるはずの姉さんが、頭をなでてくれた。
もう、聞いてたんですか
その言葉を、飲み込んで、わたしも、少し眠った。

第８話　妖剣士の塚へ

いつの間にか、眠っていたのか……。
暗かった空は、すっかり明るんでいた。
「目が覚めた？」
上体を起こすと、アルベールに声をかけられた。
ずっと、見張りをしてくれていたようだ。
「見張りありがとう……。君は寝たの？」
「少しね。」
と、言ってアルベールは、笑った。
目の下の隈を見ると、ウソだと分かる。
「……ウソは嫌いだ」
「う……、まあ、大丈夫だよ」
少しばつが悪そうなアルベールが、なんだか可笑しくてあたしは、少し笑った。
「あんま、無理するなよ」
「うん、ありがとう」
少し話すだけで、優しい人だと分かる。
お人好しで、巻き込まれ体質で。
「君みたいな人を勇者と言うんだろうな」
アルベールは、はにかんだ。
「たまに言われるけど、そんなんじゃないって」
よく笑う人だ。
皮肉屋で、ひねくれ者のあたしとは、正反対だな。
「さて、それより、これからどうするつもりなんだ？」
アルベールの質問に、あたしは、眉根を寄せた。
「それを困ってる。」
我ながら、取り返しのつかないことをしたもんだ。
嘆いても仕方ない。が、ため息が漏れる。
そこで、アルベールは、嬉しい提案をしてくれた。
「君さえ、良ければ一緒に行動しないか？」

向こうから、言ってくれるとは、意外だった。
願ったり叶ったりだ。
「喜んで。」
あたしの即答に、アルベールが微笑んだ。
それから、グレンに居た、理由を語ってくれた。
「俺がここに来たのは、魔法戦士の任務だからなんだ」
「まあ、バカンスをするには、少し物騒な街だしな」
だな。とアルベールが苦笑する。
「けど、げんこつアメとか、おいしいよ」
「へぇ」
好物なんだ、とアルベール。
生きてたら、ぜひ食べてみよう。
「さて、本題だけど。君たちには、俺の任務を手伝って欲しいんだ。」
「任務？」
アルベールが頷いた。
「バグド王の突然の乱心。そして、戦争。
俺が前にこの街に来た時は、こんなではなかった。」
神妙な顔で、アルベールが続けた。
「なにか、邪悪な思惑が、バグド王を操っている。」
「老害が蒙昧してるわけじゃないってことか……。」
君は、少し口が悪いな。とアルベールが苦笑する。
ほっとけ、とあたしは、唇をとがらせる。
「というのが、魔法戦士団の見解でね。
俺は、その調査、出来るなら解決を、しにきた。」
「なるほどな」
他国にまで話が伝わるほど、事態は深刻ということだ。このまま、放っておいたら、間違いなく戦争が起きる。
「戦争なんて、させるわけには、いかない。」
戦争が起きれば、もっとたくさんの人が、理不尽に死ぬ人が、簡単に、死ぬんだ。
あまりにも、あっけなく。あたしは、それをよく知ってる。

「出来る限り、協力する。」
アルベールが、微笑んだ。
「ありがとう。」
あたしたちは、対策を話し合うことになった。

◇◆◇◆◇

「魔法戦士団が見るに、首飾りが、怪しいらしい。」
確か、バグド王は、首に紫色の宝石の首飾りをつけていた。
「確かに、そんなの、つけてたな。
あたしには、そういうのは、分かんないけど」
この身体には、魔力が皆無なのかもしれない。
なんていうか、魔法を使えるようになる気がしない。
「わずかに、首飾りから邪悪な気配を感じたよ。
それが、なんなのかは、特定できないが……」
「ふむ……」
悪いが、専門外だ。魔物のニオイを辿って後を追うのとは、訳が違う。
「そのために、専門家と落ち合う予定だったんだけど、この有様ではな……」
それで、弁当が、２つあったのか。
あたしのせいで、解決が遅くなってしまうかもしれない
「ほとぼりが冷めたら、落ち合うさ。それまで、大人しくしてよう。」
手詰まりか……。
「……ごめんな。」
あたしは、また、謝ってしまう。
アルベールは、「君のせいじゃない。俺の責任だよ」と言ってくれたが……
なんとか、ならないものか
「あ、あの……」
途方に暮れた、そのとき、意外なところから、助け船が出された。

「おはよう、ユイナさん。ごめん、うるさかった？」
気遣いすぎる。さぞモテるんだろうな
ユイナは、ふるふると首を横に振る。
「わたし、けっこう呪いとかにも詳しくて、気になっていたんです」
「そんな方面にまで、オタクなんだな」
「オタクじゃないです！」
ユイナが、大きな瞳を精一杯つりあげて、睨んでくる。
「まあまあ。そのオタク知識が、活路になるかもしれないしさ。」
「ですからオタクじゃないです!!」
埒が明かない……。
ここは、いつもの、あれで行こう。
「ユイナ、詳しく聞かせてくれ。」
あたしが言うと、ユイナは、誇らしげに胸をはった。
なんとチョロい。

◇◆◇◆◇

「あれは、人の理性を狂わせる類の、呪物です。」
「ほう？」
ユイナが人差し指を立てて、説明体勢に入る。
アルベールが、興味深そうに、聞き入る。
「人は、誰しも、心に凶暴性を秘めているものです。
あれは、そういったものを、引き出すんです。」
そうして、引き出されたのが……
「闘争本能……。」
アルベールが、静かに言った。
ユイナが頷く。
戦闘民族オーガの、本能だ。
「理性を狂わせた人に罪を犯させ、汚れた魂を死後に、自分のモノとする。
悪魔の呪物です。」

悪魔は、汚れた魂を集めるほど、チカラを増すという。理にかなった、アイテムだな。
「つまりは……魔族のしわざと。」
ユイナが頷いた。
つまり呪いを解けば、王は正気になり、あたしも、無罪放免となるわけか。
と、そこで重要なのは……
「対策は？」
呪いの解き方だ。
ユイナは、人差し指を立てる。
「説明しましょう！」
生き生きしてるな。アルベールも、苦笑している。
「悪魔の呪いを解くには、限りなく清い水を聖なる器に注いで、振り掛ける。が有効ですね」
「面倒くさいな」
手っとり早く、悪魔を倒すんじゃだめなの？と聞く。
「姉さんが悪魔だったら、安全なとこにいて、魂がとれるのに、わざわざ戦闘しに、出てきますか？」
「なるほど、おびき出さなきゃいけないんだな」
「ですっ。方法が無いわけではないですが、いずれにせよ、王に近づかなければなりません。」
それはだめだ。
「近づいたら最後、首と胴体がサヨナラだ」
「それに、手がつけられないレベルの悪魔が、出てくるかもしれませんしね。」
それは、少しワクワクするのは、オーガの本能だろうか
「つまり、器と、水を探す。ということでいいね？」
アルベールが、あたしたちの話をうまくまとめた。
ユイナが頷く。
「それらの場所は、分かるのかい？」
ユイナは、胸をはった。

「もちろんです。」
それから、文献によると、とか語り出した。
あたしが、静止する。
「待てユイナ。要点だけでいい。」
ユイナは、少し不満げに、唇をとがらせたが、要点だけをかいつまんで、言った。
「器である、『レムルの聖杯』は、この先です。」
行き先を、指で、指し示す。かなり、かいつまんだな。
「そして、水は、雲上湖と呼ばれる場所にあります。
ここは、正反対の場所ですね。」
器から、取りに行くんで、良さそうだ。
「よし、案内してくれ。ユイナさん。」
アルベールが立ち上がる。
行き先が決まったようだ。
「はい！」
頼りにされて嬉しいのか、ユイナは、元気よく返事して誇らしげに、先頭を歩き始めた。

◇◆◇◆◇

「聖杯は、この先、ベコン渓谷の、妖剣士の塚と呼ばれる場所にあります。」
グレン領西を、ユイナを先頭に、歩く。
魔物がいない方へ、うまく先導しながら。
「確実なのか？」
あたしの疑問に、ユイナは、自信満々に頷いた。
「レムルの聖杯は、もともと、ガートラントの宝物で、ある将軍の失踪を堺に、紛失してしまったんですよ」
「あぁ。それは、聞いたことがある。」
話の腰を折ったのは、アルベール。
そのまま、彼が続ける。

「ベコン渓谷の奥には、骸骨の王がいて、聖杯を守っている、って話だよね？」
「ですです！」
「なんか御伽話っぽいなー」
胡散臭い、と、あたしが、言うと、アルベールが、補足する。
「将軍の失踪と、宝の紛失は、事実だし、レムルの聖杯の実物をみた、冒険者も、いるよ。」
頼もしい証言だが、１つ疑問が浮かぶ。
「なんで、そいつは盗らなかったんだ？」
ユイナが、納得の理由を述べた。
「骸骨剣士さんが強いってこと、ですかねぇ」
「一筋縄じゃ、いかないってことだね。」
それは、それでワクワクするな。
あたしは、すっかり、オーガ脳だ。

◇◆◇◆◇

ベコン渓谷は、さらに過酷な環境の、谷間だ。
モンスターたちも、それに合わせて強力なものとなっている。
少し歩くと、洞窟がある、とユイナが言った。
「そういえば、アルベールさん」
「ん？」
先頭を歩くユイナが、歩きながら、振り返る。
転ぶぞ。
「お弁当、ごちそうさまでした！」
「あぁ。お粗末さまでした。」
お口にあったかな？とアルベール。
「すごく美味しかったです!!」
「ユイナに見習って欲しいくらいだな」
ユイナの料理は、豪快すぎる。
あれを、料理と呼んでいいのだろうか。

あれは、焼いた。煮た。というやつだろう。
に、比べて、アルベールの弁当は、家庭の味、という感じだった。
アバの料理を思い出す。少し、切なくなる。
「姉さんうるさいー。
……どこのお弁当なんですか？」
「俺が手作りだよ」
趣味の範囲で、だけど、料理職人をしている。とアルベール。
「料理できるんですか!?」
「かじった程度だよ」
食いつきがいい。そういえば、ユイナは、よく腹を鳴らしているな。
「わたしも習ってみようかな～
……あっ」
ほら。鳴った。ユイナのお腹。
「舐めるかい？」
アルベールが、懐から、げんこつの形のアメを取り出した。
ユイナは、うつむきがちに、受け取る。
「……いただきます。」
それから、あたしに、向き直る。
「お姉さんも。」
げんこつアメをくれる。
「お、ありがとな」
ちょーど腹がすいてた。ありがたくいただこう。
妖剣士の塚まで、もうすぐだ。
それから、何度か戦闘があったけど、無事、あたしたちは、たどり着くことができた。

第9話　聖杯の守り手

ベコン渓谷の最奥、妖剣士の塚と呼ばれるそこは、冒険者も、寄り付かない場所だ。
そこに住み着く骸骨の王は、秘宝を守り、近づくものを無差別に攻撃するからだ。
しかし、あたしたちは、そこへ、やって来た。
ひんやりとした洞窟を、奥へ奥へと進み、ついに、最奥まで来た。
そこは、外の暑さがウソのように冷え切っていた。
アルベールを先頭に、歩を進める……。
「来るぞ……！」
アルベールが剣を抜いた。
あたしも槍を手に取り、ユイナを背中に庇う。
「ひっ！」
骸骨の兵隊たちが、一斉に現れ、それを見たユイナが、小さく悲鳴をあげる。
骸骨たちは、何かを手にしている。
ボロボロのマントや、骨だけの腕。
それを、人形を組み立てるかのように、繋ぎ合わせる。
「い、いまのうちに攻撃してしまったらどうです!?」
それを、ぼーっと眺めてて、ユイナに言われて、はっ、とする。
「……なんでか、こーいうの待っちゃうんだよな」
もう遅い。そうこう言ってる間に、身体が完成していた。
頭蓋骨を持った骸骨兵が、駆け寄る。彼は、盛大に、すっころんだ。
「あ。」
その場にいた全員が、息を飲んだ。
王の頭蓋骨は、宙を舞い、王自身に、ナイスキャッチされる。
「彼が、ガートラントの将軍、オーレンの成れの果てです……！」
身体と繋がれ、口が動いた。
「貴様ら……ガートラントの追っ手か……!!」
地面に刺さった2本の巨大な刀剣を手に取るオーレン。

話し合いで、どうにかなる相手ではなさそうだ。
「勇者御一行様だ」
骸骨兵たちも、連携を取る。
オーレンの部下だったのだろう。死してなお、その隊列は美しく、無駄がなかった。
５体の骸骨兵たち。
まずは、二人一組で、襲ってくる。
前に出たアルベールが、剣を光らせる。ライトフォースだ。
骸骨兵たちが、剣を奮うより先に、間合いに入り込む。
「輝剣斬!!」
剣の光は、刃となり、刀身を長くする。
輝く刃は、一瞬で、２体の骸骨兵を葬り去った。
「……!　その紅い男は相手にするな……!!」
有象無象では、歯が立たない。
そう判断したオーレンが指示を飛ばす。
「紅き剣士よ……お前の相手は私だ……!
お前たち、手を出すなよ……。」
それから、剣を、アルベールに向けた。
それに同調するかのように、骸骨兵たちは、道をあけた
「ミュスナ、手を出さないでくれ。彼は死してなお、誇り高き剣士だ。」
アルベールは、骸骨兵たちの間を、無防備に進んでいく
「と、すると、あたしは、雑魚担当かい」
アルベールを通した後、骸骨兵たちは、再び連携を取りあたしを睨む。
「ね、姉さん……」
動く骸骨が怖いのか、ユイナは、震えてしまっている。入り口で待たせておくんだったと思ったが、もう遅い。
「ユイナ、あたしより前に出るんじゃねーぞ」
槍に雷撃をまとわせる。かなり操れるようになったようだ。
３体を同時に相手するのは、面倒だ。
と、すると……

あたしは、槍を振りかぶる。
骸骨兵は、じりじりと、陣形を崩さす、迫る。
「ボサっと、してんなよッ!!」
力の限り、投げつける。
雷撃をまとった槍は、もはや落雷ように、光る筋を描きながら、骸骨兵を1体、粉砕した。
顔面を砕かれた骸骨兵は、動かなくなる。
いきなり武器を投げてくるとは思わなかったのか、骸骨兵たちは、わずかに動揺する。
「姉さん!・いきなり槍を投げたら!」
ユイナは、うるさいなぁ。
心配すんなって。
「オーガの本領は、こいつだろ?」
あたしは、拳を打ち付ける。
あたしに、細かい格闘術も、技も分からない。
けど、この身体は、知っている。
骸骨兵の武装は、剣。
拳大の石を拾って、それを投げつける。
案の定、骸骨兵は、それを剣で払って防ぐ。
そこで、すかさず、距離を詰める。
ほぼ密着。これで、剣は使えない。
襟首をつかみ、足を払い、
背負い、投げる!
柔術って、言うんだっけ。
仰向けに倒れる骸骨兵の腕を、踏みつけて砕いた。
これで、剣は、使えない。
「姉さん!・危ない!」
もう1体居るんだった。
斬りかかろうと、剣をふりあげる、骸骨兵B。
倒した骸骨兵の剣は、床に転がっている。
それの柄を、思い切り踏み付ける。

宙へ舞い上がる剣。あたしは、それをナイスキャッチしそのまま剣の攻撃を受けた。
「剣も悪くねぇな。」
つばぜり合いは、心躍る。
力の限り、押し込むと、せり勝てた。
体勢を崩したのを見逃さず、振りかぶって両手持ち。
渾身の力で、切り下ろす。
剣は、骸骨兵の頭を叩き割ったが、半分に折れてしまった。
あたしは、舌打ちして、それを放り投げた。
「姉さーん！助けてぇ！」
ユイナの声だ。まだ、居たのか……！
２体の骸骨兵が、ユイナを追い詰めていた。
もう、剣の間合いで、それを、振り上げていた。
「妹に手を出すなっっってんでしょうがァ!!」
自分でも驚くくらいのスピードで、両者の間に、割って入った。
剣を持つ手を、掴み、思い切り引く。
と、同時に掌打を、骸骨兵の肘に叩き込んだ。
乾いた音を立てて、骨の腕が砕ける。
折れた骨の腕を持ったまま、骸骨兵の頭を殴りつけた。
倒れる骸骨兵Ｃ。その奥には、突きの構えの骸骨兵Ｄがいた。
「……ちっ！」
頭を殴られた骸骨兵Ｃが倒れた途端、その向こうから骸骨兵Ｄが、鋭い突きを繰り出す。
腹を狙った突き。身を逸らして、かわすが、かすった。
わずかに、切られる。
が、怯むことなく、さらに距離を詰める。
「剣の突きを外したら、……詰みだ。」
掌を、骸骨兵の顔に、つけ、地面に叩きつけた。
頭蓋は、粉々に砕け散った。
「よく、狙わないとな。」
決め顔で言ってから、一息ついて、両手を打ち鳴らす。

脇腹をかすめたけど、軽傷だ。
「姉さん！斬られたように見えましたが……」
「ん、かすり傷よ、かすり傷」
それより、アルベールは……
あたしより、傷を負ってるが、いずれも軽傷だ。
それに、決着も、つきそうだ。
アルベールの剣は、巨大な火炎をまとっている。
オーレンの怒涛の双剣攻撃を避け切り、剣がもっとも威力を発揮する間合いへと、入り込み、
燃え盛る剣を、両手持ちに、持った。
剣を腰にすえ、強烈な切り上げを放った。
「紅覇斬ッ!!」
強烈な一撃と、火炎が、オーレンを同時に襲った。
「グオォオオォ!!」
オーレンは、双剣を落とし、しばし、火炎にもがいて…
「見事なり……」
最期に、そう言い、わずかな魔障を遺して、消えた。

◇◆◇◆◇

「ホイミ！」
聖杯を手に入れた一行は、安全なとこまで、待避し、そこで、焚き火を囲んでいた。
軽いが裂傷が多かったアルベールに、ユイナが何度も、回復呪文をかけている。
「ありがとう、もう大丈夫だよ」
呪文は、かなり精神力を使うのだろう。ユイナにも、疲労が見える。
「ダメです！ちゃんと治しておかないと、バイ菌が入ったりしちゃいますから！」
まるでお母さんだ。微笑ましいな。
上着を脱がせようとしてるのをのぞけば。

「ちょっ…そこまでしなくていいよ！
……お姉さん！助けてくれー！」
無理矢理、脱がそうとするユイナに、抵抗するアルベール。
見てて面白いがアルベールは怪我人だ。
「こらユイナ、逆☆※△は、やめろ」
「逆☆※△なんてしません!!」
「こらこら女の子がそういうことを大声で言うんじゃないよ」
あたしに、向き直るユイナ。助かったアルベールは、穏やかに言った。
それから、ユイナは、あたしの脇腹を見やる。
「…姉さん、お腹大丈夫ですか？」
「ん？かっこいいだろ？」
うっすら跡がついてるだけで、痛くはない。
「キレイに治せなくて……ごめんなさい……」
「気にすんな。傷は勲章だ」
項垂れるユイナの頭をなでてやる。
髪をすくように、なでてやると、うとうとし始めた。
「呪文使って疲れたろ？寝ていいぞ」
「うぅ」
目をこするユイナ。寝ろ寝ろと催促するみたいに、がしがしと、髪をなでる。
「じゃあ、お言葉に甘えて……」
「あいよ」
ユイナは、何故か、あたしの膝に頭を預けた。
「おいおい……」
まあ、いいか……。寝つくまで、なでてやるとしよう。
「姉さん……」
「んー？」
今にも眠りそうな力の抜けた声で言う。
「守ってくれて、ありがとう。」
ケツがかゆくならぁ。たぶん、あたしは、はにかんでた

と思う。
「当たり前だろ」
ユイナは、うん、と頷くと、そのまま、眠りについた。
「……大丈夫かい？お姉さん」
アルベールが、小声で、聞いてきた。
その指は、自分の脇腹を指している。
「お前のがボロボロだろ」
「もうすっかり良くなったよ」
アルベールが、両手を広げる。
「んじゃあ、脱いで見せてみな」
「え……？」
固まるアルベール。その反応に満足したあたしは、ニヤリと笑った。
「冗談だ。ほんとに脱いだら通報するぞ。」
アルベールは、ほっ、と胸をなでおろし、苦笑する。
「全く……お姉さんのほうは、けっこうキツいんだね」
「ユイナみたいに可愛くなくて悪かったな。」
「力も男より強いし……投げた槍、刺さって、ぜんぜん抜けなかったね、うらやましいよ」
「ふつーの女にそれ言ったらぶっとばされっからな」
自分でも性格変わったんじゃないかというほど、つんけんしてしまう。
まあ、昔から妹以外には厳しかったけど。
「でも、妹さんをなでている時の顔は、優しいんだな。」
意表をつくようなことを言う……。
「こいつを見てると、落ち着くからな……。」
うつむくと、眠るユイナが視界に入る。
口を猫みたいにして、むにゃむにゃしてる。
ふふっ、可愛いヤツめ
「そうしてるキミは、なんだかキレイだ」
アルベールの言葉に耳を疑う。

キレイ？あたしが？
「あ、あたしがか？」
そんなこと、エテーネでもランガーオでも言われたことがない。
確かにオーガのミュスナは、美人ではあると思うが……
「うん。ミュスナが、キレイだ」
バカ正直に、わかりやすく言ってくれた。
突然のことで、うるせえ！黙れ！と悪態をつきそうになる、が、ぐっと、堪える。
「あ、ありがと……っ？」
悪態をつかれたら、皮肉で返せるのに。
せめて、皮肉っぽく言ってくれれば悪態つけるのに！
こんな心から言ってくれるのが分かったら、さすがの、あたしも嬉しいじゃねぇか！
「もう寝ろよ、あたしが見張りしててやるから！」
ニヤける顔を見られたくなくて、そう提案する。
「あ、見張りは、俺が……」
「いいよ、アルベール寝てないだろ」
「そーだけど、レディファーストは紳士の美徳で…」
「うるせえ。寝ろ」
「はい」
アルベールが横になる。
キレイなんて言われたこと、元の身体でも、なかったな
……ていうか、女扱いすら、されなかったような……
レディファーストか……
ちょっと、嬉しい、かな？
うん、ちょっと、な。
あたしは、なんとも言えない慣れない気持ちで、オーグリードの夜空を眺めた。

第１０話　雲上湖の怪物

なにやら、顔にあたる、くすぐったい感触で、わたしは目を覚ました。
確か昨日は、妖剣士の塚に行って、ガイコツさんと戦って、それでレムルの聖杯を手に入れたんだっけ？
それで、グレン城下町から、少し離れたところに、焚き火をしたんだった。
そこで、姉さんの膝枕で、寝たんでした。
「ん、やっと起きたな」
目を開けると、すぐに、姉さんと目が合う。
頭の下には姉さんの膝。
1晩、この体勢だったんだ。
「おはよーございまふ……」
まだ寝足りないような感じだけど、こんなところで、眠りこけてたら迷惑をかけちゃう。
「おはよーさん」
姉さんは、金色の瞳をイタズラっぽく細めて、笑う。
まるで狼みたいな鋭い瞳だけど、わたしは、この目が好きだった。
わたしを見る目は、すごい優しいから。
でも今はまるでイタズラした子供みたいに笑ってる。
わたしは、上半身を起こす。
「おはようございます、アルベールさん」
アルベールさんと目が合う。
「あ、あぁ。おはよう…」
少し様子が変。肩を震わせて、笑いを堪えてるみたいな……
「どうしました？」
わたしの寝起きの顔、そんなに面白いのかな……
「ほれ、化粧しといてやったぞ」
姉さんが、手鏡で、わたしの顔を見せてくれた。
そこに映ったわたしの顔は……

「な、なんですかぁ!?これぇ!!」
かなり落書きされてたんです!!
繋がった眉毛書かれたり！頬にぐるぐるナルトかかれたり！
姉さんは、ケタケタ笑ってる。
「姉さんですか!?」
「わりぃわりぃ　暇だったもんで」
こんな子供みたいなマネするなんて！
姉さんのバカー！
「ごめんね、一応、止めたんだけど……」
なんだか、自分も同罪と言い出しそうなアルベールさん
わたしは、彼に向き直り、首を横にふる。
「いえ、アルベールさんは、悪くないですよ」
「そ、そうか、ありが……」
アルベールさんがうつむいた。
この顔で、微笑んだのがツボだったのかな？（泣）
「ほれユイナ、これで顔洗いな。目も覚めるぞ」
姉さんが、飲み水で持ってきた水を器にうつす。
ちょっと待って、その器って……
「レムルの聖杯じゃないですか！」
「宝物で顔洗うなんてセレブじゃねーか」
にひひ♪と姉さんは、歯を見せて独特な笑い方をする。
「そのままでいいなら、飲んじまうぞ」
「あぁ！洗います！洗わせてください！」
うぅ、ごめんなさい、ガートラントの皆さん……。
聖杯の中の飲み水で顔を洗うわたしを、姉さんは楽しそうに見ていた。
こんな楽しそうな姉さん、初めて見たなぁ
本来は、イタズラ好きなのかな
だとしたら、身体を張った甲斐があったというものです

◇◆◇◆◇

ユイナが、あたしの傑作を水で洗い流してから、すぐに出発した。
「せっかく美人にしてやったのになー」
「姉さんなんか知らない！」
ユイナは、ぷいっ、と顔を背けてしまう。
そんな怒ることかー？
「悪かったって」
ユイナは、こっちを向いてくれない
ウソだろ？おい……
「ユイナ？おーい？ユイナちゃーん？」
ぷいっ。
そ、そんな……お前に嫌われたら……あたしは……
「な、なんでも好きなもん買ってやるから！な！」
「お洋服がいいです！」
その言葉を待ってましたと言わんばかりにユイナが振り返る。
あ、してやられたな。これは。
「お、おう……。」
仕方ない……。あたしに二言はない。
「姉さんだーいすき♪」
もう何着でも買ってあげちゃう
サイフと相談だな。
「……仲直りしたかい？」
そんな姉妹のやり取りを、微笑ましげに見ていたアルベールが、言った。
「ケンカなんかしてねーよ」
仲良し姉妹だからな。あたしは、胸を張って言う。
ユイナも、こくこく頷いてる。
「雲上湖に行くにはグレンを通らなきゃいけないからね。これを。」
そう言って、アルベールは、ボロ布を渡してきた。
「なんですか？これ」
「フードつきの、マントだよ。砂漠とか渡るのに使うんだ。」

なるほど、顔を隠すのにも使えるな。
「ありがたく借りるぞ、ユイナうーってしな。」
「うー」
冗談だったのに、うーってしたので、つけてやった。

◇◆◇◆◇

「手配書が出回ってるな。」
グレン領西から東へ渡るのに、グレンの往来を通らなければならない。
3人は顔を隠して、グレン城下町へ入った。
アルベールが、視線で示した先には、あたしと、ユイナそれとアルベールのがあった。
「へぇ、うまいな」
よくかけている。あたしの特徴をよく捉えて、あれだけの時間で、よく観察できたものだ。
銀髪の長髪で金色の狼のような瞳。
背が高く、けっこう美人。
ちょっと照れるなこれ。
「じ、地味……」
となりでユイナが呟いた。
ユイナの手配書まで出てるのか。
……どれどれ
容疑者の妹と思われる。同じ金色の瞳。
背が低く、地味。地味かわいい。
一言多い手配書だな。
地味は、地味に傷つく。
「わたし、地味なんでしょうか……」
「大人しそう……かな?」
アルベールのフォローの、あまり効いていないようだった。
「髪とか、染めてみようかな……」

「!?」
ユイナがギャルっぽく!?
想像してみる……
『姉さん～ちょべりば～』
「だ、ダメだ！お前は、それが可愛いんだ！」
黒だって、いいじゃねーか！清楚じゃねーか！
ユイナをギャルなんかにしない絶対にだ。
「姉さん……！声……！」
あ、しまった……。
周りを見ると、視線が集まっている。
「行こう」
アルベールが言う。
彼のあとを追い、目立たないよう、かつ迅速に、その場を離れた。

◇◆◇◆◇

なんとか、グレンを東側に出れた。
好奇な目で見られたが、声をかけてくる者は、いなかった。
このまま、無事に脱出できれば……
「良かったんだけどな」
グレンの東口、橋の上を歩く足音が２人分。
金属の、鎧を来た人間の足音だ。
「どうしたんだ？」
アルベールが振り向いて、それに気付いた。
「……なるほど、キミの耳は、すごいな」
「鼻もな。あと目もいい。」
オーガの男が二人、鎧に帯剣している。
そのうちの１人が、あたしを指さした。
「間違いない、あのデカイ女だぜ」
「ご挨拶だな」
指を差されるのは嫌いだ。あたしは敵意をむき出しに言った。

「見逃してくれないか？人は斬りたくない」
アルベールは、比較的、温厚な口調で言う。
が、少しも隙を見せない。
「優男も後ろの地味女も違いないようだな」
もう1人のオーガの兵士が言った。
ユイナが、背中で、「じ、地味女……」と、密かに傷ついたようだ。
「仕事熱心な兵隊さんだな」
「まあな。お前らをとっつかまえて、王に渡せば、出世出来るんでな」
そこで、もう一人の兵士が下卑た笑みをうかべた。
「それもいいけどよ！……けっこー上玉じゃね？！」
「ん……、それもそうだな」
あー、そういう感じか。よくあるやつだ。
「王に渡す前に俺らで楽しんじゃおうぜ？的なあれか？」
言われるのも癪なので、先に言ってやる。
「分かってんじゃねぇか姉ちゃん」
「おまえは優男をやれ、俺は、あのおっぱいを……」
あたしは、荒々しく舌打ちする。
「誰がおっぱいだ。おいアルベール、あいつは、あたしに任せろ」
「あぁ。無理するなよ。」
「あいよ。ユイナ、離れてろ」
アルベールが剣を抜き、あたしが指を鳴らす。
オーガの兵士たちも、剣を抜いた。
「姉ちゃん、槍は使わなくていいのか？」
「こいつで充分だ。」
拳を突き出す。
「来いよ赤ゴリラ。素手の女に負ける武勇伝を作ってやるよ」
「口の減らねぇ女だ……」
こういう女を舐めくさった輩にな、相応の成敗をしなくてはな。
あたしは、鎧の上を脱いだ。
「剣で切って脱がしてみろよ」
オーガの兵士は、乗った

「おもしれぇ」
オーガ兵は突きの構えをとる。本当に脱がす気なら、突きでは殺してしまうだろうに……
まあいい。この身体の動体視力は極めて良い。
オーガ兵が、鋭い突きを繰り出す。
この程度の突きなら……
かわせる。大道芸のように。
胸をそらして、腰を曲げる。いわゆる、マトリックスだ
剣は、あたしのシャツだけを切り裂き、胸の谷間を通過する。
マトリックスの体勢のまま、両手を地面につく。
分かりやすく言えば、ブリッジの体勢だ。
そのまま地面を蹴り、オーガ兵のアゴに蹴りをかます。
これは、バク転の要領だ。
「が……ッ！」
オーガ兵は、アゴを抑えて仰け反る。
「ほう……、いい腕だな」
あたしは、切れたシャツの切れ目から、谷間をちらつかせた。
オーガ兵の視線が、そこに投げ込まれる。
「せっかくだ、もうちょっと近くで見てみるか？
自分で、はだけさせてみるか？」
手で招いて、誘惑する。
オーガ兵は……
「お、おう……！」
乗った。
目と鼻の先の距離まで来る。
「バーカ」
「え？」
目を大きくしたオーガ兵の間抜けヅラに、頭突きをかましてやる。
オマケにツノの部分を当ててやった。
「はがッ!!」
頭から鮮血を出して、オーガ兵は、倒れ伏す。

あたしは、自分のツノについた相手の血を拭う。
「男ってバカだな……
アルベール、そっちは終わったか？」
アルベールのほうを見やる。
ちょうど、終わったようだ。剣をはらって、しまうところだった。
血をついてないところを見るに、殺してないのだろう
「ミュスナ……その格好……」
「あぁ。作戦のうちだ。」
アルベールは、上着を脱ぐと、それをあたしに着せてくれた。
気持ちは、ありがたいが……
「気持ちは、ありがたいけど、鎧があるんだ」
「あ、そうか」
アルベールは、そう言うと、あたしが脱ぎ捨てた、せいどうの鎧を拾って、渡してくれた。
「向こう向いてるから、着替え終えたら、それは、そのへんに投げててくれ。」
アルベールの上着のことだろう。
着てみて分かったが、相当上等なモノだろう。
着替えたら、ちゃんと返そう。
「ありがとうなアルベール」
当然のことだよ、と背中から聞こえた。
「着替えたら、雲上湖へ急ごう」
とんだアクシデントがあったが、あたしたちは、雲上湖を目指した。
恐るべき怪物がいるという、そこに。

第11話　激闘、ギルギッシュ

雲上湖へ向かうには、ゲルト海峡を通過し、ランドン山脈を登る必要があるようだ。
「ランドン山脈の気候は厳しい。オーガだから大丈夫だと思うけど」
「あたしは、たぶん大丈夫」
本当に、この身体は、あまり寒さを感じない。
ユイナは、ランガーオで震えていたから、少し不安だが……
「わたしも、大丈夫です！」
ユイナは、頼しげに、胸を叩いた。
ゲルト海峡までに至る道、お喋りをしながら歩いた。
「そういえばユイナさんは僧侶なんだよね？」
「はい」
回復魔法を得意とするユイナは、僧侶のはずだ。
ダーマ神官とやらに、聞かないと詳しいことは分からないらしいが。
「どうしてスティックを持たないんだい？」
アルベールの質問に、ユイナは、眉尻を、下げた。
「装備出来ないんです何故か……」
ユイナは、旅に出てからというもの、ずっと丸腰だ。
冒険者の職業は、神に許された武器のみ使うことが出来るということらしいが。
「ふむ、槍や棍は？」
「それがだめなんです。スカラとか、覚えられないし」
呪文にも、制約がかかっている。
その職業に適応しない術は、覚えられないようになっているようだ。
「……もしかしたら、僧侶じゃないのかもしれないね」
「え？でもホイミとか、使えるんですよ？」
ホイミを使える職業は、ほかにもある。
もしかしたら、それなのかもしれないな。

「うーん、とりあえず弓でも持ってみる？
丸腰だと、危ないからさ」
「弓ですかぁ……」
難しそう、とユイナに、アルベールは優しい口調で言う。
「俺も練習中の身だけど、良かったら教えようか？」
その提案に、ユイナの瞳が輝く。
「ほんとですか!?じゃあ、やりたいです！」
ユイナも、いつまでも丸腰で居させるわけには行かない
武器は、持ってるだけで抑止力になる。
「あたしがモンスターでも、明らかに弱そうで丸腰のかわいいユイナが居たら、そっち狙うしな」
「か、かわいいだなんてそんな……♪」
都合のいいとこだけ聞き取りやがったな。
「じゃあゲルト海峡で、一旦休憩して、そのときにでも。」
「はぁい♪」
アルベールは、ちょうど弓を持ち合わせているようだ。
二人の軽い弓講義に耳を傾けてると、地面の微細な隆起に気付く。
集中して、見てみると……
「あ、そこ、何か、いるから気をつけな」
「え？」
遅かった。ユイナが、そこを、ジャストに踏み付ける。
その足を、土で出来た手のようなモノが掴んだ。
「こ、これは……！マドハンドです！こうやって、隠れて近づいた獲物を……きゃぁ！」
その獲物は、まさに今のお前だな
でも、害は少なそうだ。
もう少し見ていよう。
「あっ…、やっ…、スカートの中に！ふ、ふとももに!?いやぁくすぐったい～……！」
ふ、ふとももにだと!?許せん
「おいこらクソハンド、粉々にしてやるから、そこ動くんじゃねぇ」

ユイナのスカートの中に手を突っ込む。
「あぁ！姉さんの手なの!?マドハンドなのー!?」
「落ち着け、いま取ってやるから」
暴れるユイナを抑え、スカートの中を這いずるマドハンドを掴んだ。
引きずり出し、地面に叩きつける。
そして、踏みつけた。
「大丈夫か？」
ユイナは、涙をためた瞳で、こう言った
「マドハンドがトラウマになりそうです……」
アルベールは、ずっと困ったように笑っていた。

◇◆◇◆◇

ゲルト海峡、打ち付ける波が崖を削り、天然と橋となった。
そこで営業してる宿屋からは、鬼の顔のような岩が見える。
なにやら、ご壮大な謂れがあると、ユイナが長々と語っていたような気がするが、ほぼ聞き流したっけな。
今は、そこ、ゲルト海峡の宿屋の二階、『ご休憩』してる。
あたしは、ベッドに寝転がって静かにしてるが、連れの二人は海の見えるベランダで、ロマンチック中だ。
「矢の指は、こう」
「……こうですか？」
「ちょっと違うな、いいかい？」
「あ、はい…」
アルベールが、ユイナの手を取る。
指を動かして、矢にあてがってやっている。
ユイナは、ぽーっ、とした表情で、アルベールの横顔を眺めている。
「で、弓のほうは、こう……」

「はっ、はい！」
弓を持たせて、矢をつがえさせる。
そして、弓を引かせてみせる。
「う～～～ん……！」
力いっぱい引くが、弓は、わずかにしなるだけ。
アルベールが苦笑した。
「初心者用の弓なんだけどなぁ
ちょっと貸してごらん」
アルベールはユイナから弓を受け取ると、器用にも弦を解き始めた。
それから、結び直す。手際が良いものだ
「ほら、引いてごらん」
ユイナが弓を引く。指の形は、しっかりしていた。
「！　軽いです！」
「慣れたら、重くしよう。無理すると、指が傷ついてしまうからね」
その弓は、あげるよ。とアルベール
ユイナは、飛び跳ねて喜んだ。
「おー、良かったな。姉さんにも貸してみ」
「はーい♪　壊さないでくださいね？」
ユイナから弓を受け取る。引いてみると驚くほど軽い。
まるで羽毛だ。
「これじゃ矢は飛ばないんじゃ……」
言いかけて、やめた。アルベールが、口元に指を当てたからな。
少しずつ鳴らさないと、大事な妹の指が傷物になってしまう。
「姉さんには軽すぎました？」
「お姉さんなら攻城用の重弓まで引けそうだ」
「なるほど、バリスタか」
攻城兵器で備え付けの巨大なボウガンだ。槍のような矢を飛ばす。
滑車を使って弦を引くらしいが
「誰が滑車だ」
女の子に失礼な。

あたしは、女扱いは嫌いだが男扱いされたいわけじゃあない。
ましては、化け物扱いなんて、冗談じゃない。
「攻城任務があったら、キミに頼むとしよう」
「やった！姉さん仕事が出来ましたよ！」
アルベールめ、こんな冗談が言えるのか。
黙らないと噛み付くぞと、一喝し、あたしは、少し目を閉じた。

◇◆◇◆◇

……いつのまにか寝てしまったようだ
確か、みんなにバリスタの滑車扱いされ、ふて寝したんだったか……。
目をこすりながら、上体を起こす。
「お、目が覚めたかい？」
ユイナに弓の手ほどきをしていたようだ。
「どれくらい寝てた？」
「1時間くらいだよ」
昨日から寝てなかったから、足りないくらいだな
「悪いな、寝ちゃって」
「無理もない。すぐに出る？」
あたしは、頷いた。
弓の練習中のユイナの名前を呼ぶ。
「あ、おはよう姉さん！もういいんですか？」
「ん、大丈夫～」
立ち上がって、伸びをする。
さあ、怪物退治にいこう。

◇◆◇◆◇

ランドン山脈を登ると、すぐにそこに出た。
凍りついているが、巨大な湖なのだろう。

その名前の通り、雲より高い位置にある湖。
まだ昼時だと言うのに、太陽がまるで地平線に沈むようだ。
その光を反射して、氷の湖は、キラキラを光り、まるで宝石の上を歩いてるようだ。
そして宝石の湖の中央には、水晶の木がある。
「あれが、目的の水がとれる木です。」
「早くとって帰ろうぜ」
怪物は、まだいない。
戦ってみたい気がするが、そんな悠長にできる状況ではない。
居ないなら居ないで、さっさと終わらせたかった。
……が
「ミュスナ、武器を。」
「……あぁ。」
アルベールも剣を抜く。
木の向こう。地平線から太陽が登るように、竜が姿を現したのだ。
水色の身体に、赤い眼光。翼は、ついてない。その代わりに魚のヒレ。
そして尾も、魚のそれだ。
「ヤツが水竜か」
「そのようだな」
水竜が咆哮する。甲高い声だ。
アルベールが身構え、あたしは、耳を塞いだ。
ユイナは、怯えて、すくんでしまう。
「……うるせえ。」
あたしは、氷の地面を蹴った。
水竜に切迫し、その腹を槍で突こうと、振りかぶる。
「……っち!」
水竜の動きは想像以上に機敏だ。
宙を舞うように、槍をかわされてしまう。
ヤツの口が、青色の光を放つ。
「呪文かよ……!」

尾や、ヒレによる、攻撃を警戒したから、反応に遅れた
ダメージを覚悟したあたしの前に、アルベールが躍り出る。
「紅覇斬!!」
おそらく攻撃の上級魔法、マヒャドを、正面から切り伏せた。
「ミュスナ!氷の地面で、踏ん張りが効かないんだ!
無理をするな!」
「あぁ!」
いつもよりスピードが出ないと思ったら、そういうことか。
なら、まだ考えはある。
「もう1度近づく!擁護しろアルベール!」
「了解だ!」
アルベールは、剣に風と雷をまとわせる。
あたしは、槍に雷撃をまとわせた。
水竜は、口から、氷塊を飛ばした。
あたしたちは、それぞれ左右に走り、それをかわす。
呪文の詠唱がなかったから、あれはブレスの類か。
着弾した氷は、砕けちり、榴弾のように、飛び散る。
「そうくるかい……!」
回避距離が足りなかった。
鋭いナイフのような氷の破片が身体をかすめていく。
「ミュスナ……!」
アルベールが、こっちを見る。そこに、ヤツの尾がせまる。
「アルベール!前!」
「なにっ!?　……ぐっ!」
剣の腹で受けるが、彼は吹き飛ばされ、氷上を転がった
「アルベールさん!……ホイミ!」
ユイナのホイミが、アルベールを癒す。
立ち上がったアルベールは、姿勢を低く走る。
よし、そのまま走れ……!
さらに接近した、あたしに、水竜は、尾での攻撃を繰り出す。
しゃがんで、くぐり抜ける。

そして、氷上に、槍を突き立てる。
さっきの弓のしなりをみて、思いついた。
槍を引いて、しならせ……
離す！
あたしの身体は、矢のように、跳躍とともに、宙に放たれる！
「雷鳴突きィ!!」
アルベールのが、うつったか、叫んだ。
人間が腕で、防ぐように、ヒレで、弾き飛ばそうと、奮う。
「ここにもいるぞ!!」
そうこうしてる間にアルベールは、剣の間合いへと、入り込む。
上下同時攻撃だ。
あたしは、ヒレの一撃を受けるが、それを穿った。
水竜のヒレは、風穴をあけられ、鮮血を散らす。
空中でもろにくらい、あたしは、氷上に叩きつけられる
が、叫んだ。
「いけ！アルベール！」
アルベールは、突きの姿勢に入っていた……！
あのオーガ兵とは比べ物にならない、鋭い突きを繰り出す！
「……風雷神剣ッ!!」
水竜の胸を穿ち、風が身を裂き、そこを雷が焼いた。
たまらず水竜は悲鳴をあげる。
水竜の巨大が大きく揺らぐ。
「……やりましたか……?!」
あたしにホイミをかけるユイナが言った。
……いや、まだだ。
赤い眼光は、まだまだ死んでない。
「逃げろアルベール!!」
水竜は、宙を、くるくると、回りながら上昇
あたしは、アルベールへ向って、駆けた。
倒したと思って、油断していたか、反応が僅かに遅れている。
水竜が氷上に腹を打ち付ける寸前、彼を突き飛ばす。

「ミュスナぁ!!」
アルベールは、氷上をすべるように転がった。
逃れられたようだ。
「大丈夫だ……!」
ブレス自体は外れた。……が
氷上から飛び出すトゲのような氷塊たちが、あたしを襲った！
「くそっ！」
わずかに腕をかすめる。それでも、傷は浅くなかった。
なんて威力だ……！
だが、それよりも、不運なことが、あたしを襲った。
「なっ……ウソだろ!?」
足元の氷上に、ヒビが入り……
割れた。
水竜が、待ってましたと言わんばかりに、割れた氷から湖の中へ。
あたしも、その中へ、ヤツの独壇場へと、引きずり込まれてしまった。

第12話　家族

視線が一気に下がり、歪む。
身体を刺すような冷たさが全身を襲う。
ここは、……水中か。
（ヤツは水竜……、水中戦こそ、真価を発揮するはず！）
これは非常にマズイ。ヤツの独壇場というわけだ。
それに、視界も、悪い。
オーガは、ほかの種族より水中が苦手なのかもしれない
（ヤツも水中にいるはず……。どこだ、どこにいる……）
可能な限り、目を凝らす。
……水中に、赤い線が、あとを引いたのを見た。
速い……。水竜の目だ。
こっちを、見つけたようだ。
（……来る！水面に逃れないと……！）
だが鎧が、仇になった。素早く泳ぐことが出来ない。
水面に逃れようとしたのを読まれて、先回りされてしまう。
（水面は、ヤツの背後……）
これでは水面へ出ることは出来ない。
（ここで、やり合わないと……！）
あたしは、腹を決める。
泳いで突いてもダメージは、期待できない。
（それなら……）
待つ。呼吸が続く限り。
一番の不安要素は、相手が、窒息を待つ選択をした場合だったが、それは杞憂だった。
水竜は、ヒレを舞わせ、尾ヒレを動かす。
突進攻撃だ。
（体当たりか……、持ってくれよ身体！）
体当たりに合わせて……槍を構える。
赤い光、それは、ヤツの目だ。

狙いを定め……
（今だ……!!）
身体に強い衝撃、と同時に手に手応えを感じた。
赤い光、水竜の目へ、槍を突き立てた。
（……ぐっ……!）
水竜は、目を抉られているにも関わらず、さらに勢いを強めて、泳いだ。
あたしは、押し出される形になる。
（早く死ね!この魚野郎!）
力の限り、槍で、目を抉る。
ダメージは低くないはずだが、水竜は、泳ぐ手を一切、緩めなかった。
そうこうしてる間に、あたしは、湖の壁へと、叩きつけられた。
口いっぱいに、鉄の味が広がって、溢れ出した。
赤が、視界を染める。
（呼吸が……）
衝突の衝撃で、肺の空気を、出してしまった。
一気に、呼吸が苦しくなる。
（くそ、息が続くうちに……!）
槍をさらに動かす。あたしの血か、水竜の血か、分からないが、視界が真っ赤に染まる。
それに呼応するように、水竜は、あたしを壁に強く押しつけやがった。
また、口から空気が漏れた。
（だめだ、あたしのほうが、もたねぇ……!!）
こうなったら、あの手しかない。
あたしは、槍を握る手に、力を込めた。

◇◆◇◆◇

その頃、氷上では……

「離してください！姉さんが……!!」
「だめだ！死にに行くようなものだ!!」
アルベールさんとが揉めていた。
水中に引きずり込まれた姉さんを、わたしが助けに行こうとしたけど、アルベールさんが止める。
「姉さん！姉さん!!」
こうしてる間にも、姉さんは、あの恐ろしい竜に、食べられてしまうかもしれない。
「離してください！離して!!」
もう姉さんを失うのは嫌だ。
たった1人の家族なんです。
わたしを妹と呼んでくれる、守ってくれる、わたしの、姉さんなんです！
「ユイナ、落ち着くんだ！」
姉さんは、姉さんの代わりなんかじゃない。
もう、わたしの家族なんです。
助けに行かなきゃ……、いけないんです！
「分かった、俺が行くから、キミは待っているんだ！」
アルベールさんに、そんな無理は、させられない。
わたしが、行かなきゃ、だめなんです…！
アルベールさんの制止を、振り切れそうな、その時、
氷の下、水中が、雲上湖が、光ったんです。
最初、なにが起きたのか、分かりませんでした。
光は、消えず、しばらく、わたしたちを照らしました。その光の正体に気づいたのは、アルベールさんが、先でした。
「……あのバカ…！」
わたしにも、分かりました。
あれは……雷光です。
姉さんの特技の、雷撃でした。
「まさか……水の中で……!?」
効果は抜群です。水竜とて、たまらないでしょう。

ですが、そこには……
「姉さん……!!!」
姉さんもいるんです。
氷に、ヒビが入る。
耐えきれず、水竜が水面に逃れようとしてる。
アルベールさんが、わたしを離して、収めた剣の柄に手を添えた。
鞘の上から、フォースをかけます。
黒い黒い、怖いフォースを。
「飛び出す一瞬を切り伏せる。」
離れてて、と、アルベールさん。
ヒビは、いよいよ深くなり……、
水中から、水竜が飛び出しました。
「ピギャァァァアッッッ!!!」
威嚇のような、悲鳴のような雄叫びとともに、姿を現した水竜。
そこで、ようやく湖は、放電をやめたようです。
放電が……、終わった、ということは……
水竜が飛び出した、氷の穴。そこに、ぐったりとした、姉さんが浮かんでました。
「……許せない……!!!」
わたしは、今まで生きてきだ中で、もっとも激しい怒りを覚えました。
それと、同時に、頭をよぎったのです。
それは、僧侶にあるはずない呪文でした。
「……ちっ!」
アルベールさんが、舌打ちをする。
抜刀術、っていうのかな。
その構えをしているアルベールさんに、水竜は、氷塊を口から放ちました。
わたしは、その氷塊に向け、指を向けた。
「……イオラ!!!」
キィン、という甲高い音がしたと思うと……

空中で、光の塊が、輝き、
それが弾けました。
それは、魔法使いの、閃光爆発呪文でした。
閃光は、氷塊を粉々に砕き、水竜の目をくらました。
水竜の目には、槍が刺さってました。姉さんの槍です。
「助かったよ、ユイナ」
アルベールさんが、剣に力を込める。
暗くて黒い、闇の力です。
「あとは、任せて。」
刀身が、鞘の中を走る。
抜き放たれると、黒い霧が、視界いっぱいに広がる。
アルベールさんが、それの名称を、口にする。
……時にはもう、剣は、鞘の中でした。
「無明一閃」
ほとんど、見えませんでした。
チンッ、という甲高い音がして、水竜の胸には、黒い傷跡が、刻まれ、そこから闇が溢れ出した。
水竜は、喉が焼き切れるような断末魔をあげ、倒れ込み
「……やったか」
やがて、動かなくなりました。

◇◆◇◆◇

水竜の活動停止を確認するより先に、わたしは、姉さんへ駆けよります。
「姉さん！姉さん!!」
水面に、ぐったりと、浮かぶ姉さんに反応は、ありません。
水に飛び込もうとする、わたしをアルベールさんが止めました。
「俺がいく。」
アルベールさんが、水に飛び込みます。
姉さんを、かつぎ、氷上に上げました。

「ユイナ、引っ張りあげてくれ」
「はい！姉さん、しっかりして！」
反応は、やはりありません。
氷上に寝かし、急いで脈を確認します。
「……ウソ…」
絶望が、わたしの口を、ついて出ます。
手が震える。思考が止まる。
「……！　おい！ミュスナ！ミュスナ!!」
アルベールさんの呼ぶ声が、遠のくのを感じました。
姉さんにすでに、脈は、ありませんでした。

◇◆◇◆◇

目を覚ますと、あたしは、見覚えのある空間にいた。
そこは確か、あたしが初めて死んだ時、転生するために訪れた場所。

ここに来たということは……
「……また死んだのか」
死ぬ前のことは、なんとなく覚えてる。
他に手がないと思い、水中で放電したのだ。
けっこう、長く放電してたような気がする。
「まあ、あれは死ぬよな」
今頃、現世では大騒ぎだろう。
ユイナは、泣いているだろうな。
『ミュスナ』
だが、安心していい。
この声の主、女神様が、復活してくださるだろう。
あたしには、使命があるらしいからな。
「早く戻してくれ、心配されちまう。」
我ながら復活させてもらう人間の態度とは思えないが、
あたしは、急いでいるんだ。

『いいでしょう。ですが、その前に……』
女神の声は、悲しみに沈んでいた。
お小言かな
『私の力で甦れる回数には、限度があります。』
残機があるということか……。
それに……と女神が続けた。
『貴女のために、涙を流す人がいるのです。
もう決して、このような無茶をしないように』
涙を流す、ね。
ユイナのことだろうけど、どうせ復活するんだしな……
別にいいだろう。
『さあ、お生きなさい……。行って、貴女の使命を
果たすのです。』
最後に、そう聞こえて、あたしの視界は、光に包まれた

◇◆◇◆◇

現世で、目を覚ます。
視界いっぱいに、ユイナの顔があった。
目が合うなり、胸に抱きついてきた。
「姉さん……!」
い、痛い痛い……
あの突撃で、骨が折れてたか……
あの女神め、怪我は、治してくれないのか。
「ゆ、ユイナ、痛い痛い……」
「あ、ごめんなさい!」
ユイナが、パッと離れる。
アルベールが、心配そうにのぞき込む。
「大丈夫なのか? 脈が止まってたのに」
「身体中が痛いくらいだ」
「鎧、脱がしますね」

鎧が重くて、痛むのか。ユイナが、慎重に脱がしてくれた。
「まるで生き返ったみたいでしたねー」
「そうだな」
アルベールが、上着を脱いで、かぶせてくれる。
彼は、この強烈な寒さの中、シャツ1枚になってしまったが。
「ルーラストーンで戻ろう。ミュスナの腰に確かついてたよね」
「見てみますね」
ユイナが、あたしの腰をあさる。くすぐったいな。
「……あれ？ありませんよ？」
ユイナが、怪訝な声をあげた。
おかしいな、確かに、あったはずなんだが。
思い当たる節はある。
「水中で突進されたときに落としたか……」
参ったな……、今頃、暗い水の底だ。
取りに行くには、危険すぎる。湖の深さが、分からない
相当深かったかもしれない。
それに自分では行けないしな。
「……よし、歩いて下山しよう」
そう言って、アルベールは、腰を降ろしてあたしに背中を向けた。
「ん？」
「おんぶ、だよ。早くしないと、傷口から冷えてしまう」
……世話になるしか、なさそうだ。
あたしは、痛みに耐えながら、上体を起こす。
ユイナが、手伝ってくれた。
アルベールの背中に、体重を預ける。
白くて華奢だと思ってたけど……
「よし、立つから、揺れるよ」
「お、おう」
背中は、意外と大きく、そして暖かった。
アルベールは、しっかりとした足取りで、歩いた。
見た目よりずっと力があるんだな…

「魔物に気をつけて、行こう」
「はい！わたしが、やっつけちゃいますよ！」
ユイナが頼もしいことを言うが、不安しかない。
「変に力むと、身体に良くない。楽にしててミュスナ」
「お、おうっ」
胸が彼に当たるのが恥ずかしくて、微妙に浮かせてた。
アルベールに下心なんてないと思うが……
ていうか、あたしにそんな女みたいな感情があったとはな……
言われたとおりにしたら、アルベールの心音が早くなった気がした。
あたしは、耳がいいから、間違いないだろう
「……ごめんな、重いだろ」
なんだか照れくさくて、自分から言ってみた。
「あぁ、重いよ。」
「お前なぁ……」
正直すぎるのも、考えものだ。
「けど、生きてる重さだ」
アルベールが静かな声で言った。
「死んでたら嫌だったけど、生きてるから、
……この重さが嬉しいんだ」
生きてて、嬉しい。
当たり前のことだが、だからこそ、嬉しかった。
「ユイナが泣いてた。もう無理は、いけないよ」
優しいが、ハッキリとした、口調だ。反論を許さない、そんな強さを感じた。
「……うん」
あたしは、素直に、了承した。
なぜ、おう、ではなく、
うん、と言ったのか
そんな女らしい返事をしたのか、分からなかった。
けど、そうしないと、行けない気がした。

◇◆◇◆◇

橋上の宿に、ついた。
途中、モコモコした三つ目の化け物の集団に襲われたが、ユイナが呪文で一掃したのは驚いた。
大して危機に陥ることなく、宿についた。
宿屋の主人は、あたしを見るなり、「うちは病院じゃないからほかを当たれ」と言った。
死人が出るような面倒ごとを避けたいからだろうな。
けど、アルベールが、懐から取り出した大量のゴールドを主人に押し付けた。
「全部やるから黙って部屋を貸せ。」
穏やかなアルベールだが、初めて強い口調で言った。
主人は、金を受け取ると、快く部屋を貸してくれた。
あたしは、ベッドの上で、大人しくしてるように言われた。
また「うん」と返事をすると彼は満足そうに頷いた。
そして部屋を出ていった。
「アルベールさんには、ずいぶん素直なんですね～」
暇そうなユイナが絡んでくる。
「うるせぇ」
苦手な絡み方だ。普段なら、頬のひとつでも、ぶにぶにして黙らせるが
「いまの姉さんは、怖くないで～す」
いい度胸だ。覚えてろよ。
まだ、ユイナは、アルベールの話を仕切りに振ってくる
それが、なんだか照れくさくて、不自然に話題を変えた
「それより、怒ってるだろ？」
「うん？」
ユイナが、聞き返す。
「『姉さんの身体』を、傷物にして」

「あぁ……。」
ユイナの表情が、陰る。
それから、眉をつりあげて。
「そうですね、怒ってます。」
こんなにハッキリ、ユイナが言うとは。
あたしには、立つ瀬がなかった。
「……ごめんな」
謝ることしか、できなかった。
ユイナが、首を横に振る。
「そうじゃないです…
わたしが怒ったのは……」
ユイナは、あたしの手を握った。
「わたしが、まるで、身体だけを心配してるみたいに、言うからですよ」
「違うのか？」
ユイナが唇をとがらせた。
「当たり前じゃないですか！」
あたしの手を握るユイナの手に、力がこもる。
「わたしは、『姉さんの身体』じゃなくて『姉さん』の心配をしてるんです」
いたわるように、手をなでられる。
その優しさは、『あたしの身体』ではなく、『あたし』に、向けられるのが、分かった。
「わたしたちは、もう、家族なんですから」
優しい、本当に優しい、いい子だ。
「心配させてごめんな」
もう無理は、できない。
優しい妹を、泣かせるなんてことは出来ない。
「そして、ありがとうな。」
生まれ変わって、あたしは、本当に大切なものを手に入れたのだった。
再び、家族を。

第13話　グレンの救世主

橋上の宿から出立し、無事、グレン東領を抜ける一行。
やがて、グレンへと、到達する。
「さて、問題は、どうやって王に謁見するか、だね」
グレンの入口になる、吊り橋の前で、アルベールが難しい顔をしている。
そんな彼を、ユイナが急かした。
「アルベールさん、早く姉さんを休ませないと…」
「そうだったね、グレンの宿屋なら顔が聞くから、休ませてくれるはずだよ」
ユイナが、あたしとアルベールにフードをかぶせる。
自分も深くかぶってから、グレンへと入っていった。

◇◆◇◆◇

多少、怪しまれましたが、特に呼び止められることなく宿屋に到着できた、わたしたち。
姉さんは、宿屋の部屋につくなり、すぐに寝てしまった
アルベールさんをみるなり、
「あらアルベールちゃん！久しぶり！大変なことになったわねぇ……」
と、快く出迎えてくれた宿屋の女将さんには、感謝しないと、いけませんね。
姉さんを借りた部屋で休めたあと、
わたしとアルベールさんは、どうにかして、王に近づく方法を話し合った。
「いったん、、わざと捕まるのはどうでしょう??」
「荷物は、取り上げられるから、無理かな」
「では、お城に潜入して、ご飯に混ぜるとか……」
「城に潜入するのが、危険すぎる」

わたしの案は、ことごとく、却下されてしまった。
「やっぱり広場に出てきたところを奇襲するのが最善手だろうな」
「どんなとき、出てくるのですか？」
アルベールさんが、答えようとした瞬間、外の喧騒が聞こえてきました。
宿屋のお客さんたちも、ざわつきます。
「またか……」
「これで何人目だ……」
「この国もおしまいだな」
そんな会話が漏れ聞こえてきます。
周囲の喧騒は、わたしの不安をかきたてました。
「一体、何事でしょうか…？」
アルベールさんが、答えてくれました。
「王が人前に姿を現す時は……」
神妙な声音で、続けます。
「人を殺すときだ。」
わたしは、宿屋の扉をあけました。
すぐ前の広場、人が円を描くように、集まっています。
「ユイナ！」
その光景に既視感を覚えた、わたしは、アルベールさんの制止を振り切り、人混みへと、駆け寄りました。
そこで、人と人の間から、円の中心を見ました。
円の中心、そこには……
「…ッ！」
そこには、バグド王自身と、いつか見た、オーガの兵隊さん。
確か、グレン東領を出るとき、追ってきた、2人の兵隊さんでした。
兵隊さんのうち1人、その額の傷は、見覚えが……
そうだ。姉さんの頭突きでつけられたものでした。
「彼ら、一体どうしたんですか？」
手近な人に聞いてみます。
丸々ふとったオーガの男性に。

「反逆者を追って、負けたんだと
それで、『敗者に生きる資格はない』って王が」
「ひ、ひどい……」
古の時代、オーガは、もっと優れた戦闘民族でした。
敗者は、生きることを許されないくらい厳しい掟で、鍛えられていたそうです。
しかし、掟の緩和ともに、今のような平和で温厚な種族になったそうですが……。
「もうこの国は、おしまいだ」
教えてくれた男性が、冷めた声で言いました。
まるで、古代のグレンにいるような……
この恐ろしい本能が、わたし達の中に、まだ残ってるというのでしょうか……
あの方々が切られたら、取り返しのつかない方向に、
この国は、加速していくでしょう。
そうなれば、男性の言う通り、この国は、おしまいです
「お嬢ちゃんも、早くこの国から出た方が……」
「お気遣い、ありがとうございます」
フードをとり、男性に向き合い、お礼を言う。
わたしは、人混みをかきわけ、中央へと、向かいます。
「あれお嬢ちゃん、どこかで、見たような……
……お嬢ちゃん?どこに行くんだ!?」
男性の制止する声を振り切り、わたしは、広場の中央へと、向かう。
不思議と、震えは、ありませんでした。
王が剣を抜く。
それに合わせて、わたしは、声を張り上げた。
「……反逆者は、ここに居ます!」
王の動きが、ピタリと止まり、その場にいた全員の視線が一気に集まりました。
周囲のざわめきが、大きくなる中、バグド王は、静かに言いました。
「反逆者の、……妹か」

王が、こちらを振り向き、初めて足が震えました。
けど、注意は、こちらに逸れたようです。
彼らは、しばらく大丈夫そうです。
「余の顔を殴った……姉は、どこにいる？」
「お答え出来かねます。」
王がニヤリと笑う。
「貴様をいたぶれば、姿を現すだろう。」
そのとおり、姉さんは、必ず来てくれます。
あの身体でも、来てしまいます。
……だから
「それも、出来かねます」
わたしの持てる全力で、抵抗します。
わたしは、指を王に向けた。
躊躇は、するな。死にはしません……！
「イオラ!!」
爆発が、王を吹き飛ばしました。
わたしは、捉えられた、兵士さんの元へ走ります。
まずは、回復してあげないと
「き、君……、俺たちは、君を捕らえようと……」
「お仕事だったんでしょう？」
それなら、仕方ない。
どちらも、軽傷だから、すぐに回復が終わる。
わたしは、縄を外しにかかる。
「なんて礼を言ったらいいか……」
「きっと、この国は、いい国になります。
そしたら、立派な兵隊さんとして、守ってください」
それだけで、充分です。
……なかなか縄が外れない。
力がなさすぎるんです……。
「お、お嬢ちゃん……！」
兵士さんが、怯えた声をあげました。

「小娘……」
王が、もう起き上がってきたのです。
手加減は、しなかったのに。
攻撃呪文は、確実に、わたしの自信となりました。
この力なら、姉さんの足を引っ張らない。
誰かを、守ることが出来る。
「この人たちは、殺させません」
「そんな奴らは、どうでもいい……！」
王は、左頬の、火傷と、先ほどの爆発の火傷を、指さします。
「姉妹そろって、舐めた真似を……！許さんぞ！」
恐ろしい剣幕に、一瞬怯んでしまう。
その一瞬で、王は、一気に切迫してきます。
「イ、イオ！」
あわてて、初級呪文を、打ち込む。
当たったけど、吹き飛ばすには、及ばない。
王の拳が、わたしのお腹に入ります。
胃液が逆流して、わたしは、お腹をおさえて、うずくまりました。
だめだ、殺される。せめて……
「に、にげてくださ……っ」
顔を蹴られる。
わたしは、地面を転がります。
苦しい、痛い、怖い
姉さんは、いつも、こんな思いを……
でも姉さんは、少し怒りながら、わたしに言うんです
『バカ！早く逃げろ！』
いつも、かっこいい。
だから、わたしも、言うんです。
「は、やく……にげて……」
誰かが、この混乱に乗じて、兵士さんの戒めを解いてくれたみたいです。
優しい、いい国です。

魔族なんかに、好きにさせてはいけません。
「このまま、じわじわと、なぶり殺してやろう……！」
その言葉に、わたしは、震えた。
あんな痛いのを、何度も……？
逃げたい、隠れたい。
けど、逃げたら、あの人たちが……
「それも……出来かねます……！」
精一杯、虚栄をはって、自分を保つしか、ありませんでした。
指を、王に向ける。
だめだ。蹴りを腹に入れられる。
また、お腹から、なにかを吐いた。
「立たせろ」
王が、連れてる兵士さんに、言いつけます。
「しかし……もう……」
とまどう兵士さん。
「貴様から死にたいのか……」
それで、2人の兵士さんは、わたしの両脇を持って、無理に立たせました。
「……すまない……」
振り絞ったような小声で、聞こえた。
姉さんなら、振りほどいて、全員、ぶん殴ってしまうんだろうなぁ
「まだ、負けません」
気持ちで負けたら、終わりです。
どうせなら、最期まで、睨んでやる。
「まずは、顔から壊してやろう……」
王が、拳をふりかぶり……
わたしが、目を閉じ、
かわいた音がなった。
その拳が、わたしに、届くことは、ありませんでした。
目を、開けると。
「姉さん……？」

では、ありません。
紅い、背中。この背中は……
「アルベールさん……？」
王の拳を止めたアルベールさん。
王を思い切り殴りつけます。
地面に転がる王、アルベールさんは、振り返り
「彼女を離せ」
普段の穏やかさ、からは、想像出来ない、剣幕で言いました。
わたしの拘束は、ゆっくりと解かれます。
アルベールさんは、わたしの蹴られた顔を、そっ、と撫でてくれました。
痛みが引いていくような、不思議な感覚。
ずっと、こうして欲しいくらいでした。
ですが、わたしは、声を張り上げます。
「後ろッ!!」
剣を抜いた王が、アルベールさんを襲います。
アルベールさんは、振り向かず、それを、かわし
また、同じところを殴りつけます。
「女の顔を傷つけたんだ」
自分の剣を抜く、アルベールさん。
手で招いて、挑発します。
「この程度で、済むと思うな」
剣に、風の力が高まるのを感じました。
アルベールさんは、それを逆手に持ち……
「貴様ァーッ!!」
起き上がった王に向かって、振り抜きました。
剣の間合いの外だったのに、
鋭い風が、王の剣を両断しました。
「真空斬り」
王の折れた刃が、音を立てて、地面に落ちます。
王は、風に当てられ、転倒しています。

そこに、すかさず、マウントをとる形に、のしかかり、その首筋のすぐ横に剣を突き立てました。
「王よ、魔族の手により、暴虐の限りを尽くすのは、貴方の本意ではないでしょう」
アルベールさんは、そのままの体勢で、懐から、レムルの聖杯を取り出します。
それを見た、王の表情が、変わります。
「やめろ！それを近づけるな！」
暴れる王。剣が、地面をギャリッ！と引っかきます。
王は、仕方なしに、大人しくなりました。
アルベールさんは、それをふりかけるように、王の顔のとこで、振りました。
「やめろおおおおおお!!!」
断末魔のような王の悲鳴。
それは、王のものだったのか、悪魔のものだったのか。
とにかく、王は、眠るように、瞳を閉じました。
全てが終わったあと、わたしは、アルベールさんの胸で泣きました。
アルベールさんは、髪を撫でてくれました。
「怖かった……怖かったです……」
アルベールさんは、何も言わずに、ただ、撫で続けてくれました。
そうこうしてると、王が、起き上がりました。
思わず、身構えてしまいます。
「余は……一体……？」
なんだか、間の抜けたセリフに、一気に肩の荷が、降りた気分です。
彼の側近が、事の顛末を、説明します。
「なんと……それは真か……!?」
「はい、こちらの魔法戦士と、こちらの地味な女性が、王を戻すのに、力を貸してくれました。」
地味って言わないでください。
「魔法戦士殿、世話をかけたようだな
そこの君も……ひどい怪我ではないか」

「王がやったんですよ」
側近の言葉に、王は、地面に額を打ち付けました。
地面が割れ、血が吹き出すので、びっくりです。
「……すまない!!
操られていたとは言え……」
なんだか、恐縮です。
「い、いえ、大丈夫ですよ」
まだいろいろ痛いけど。
アルベールさんに抱っこしてもらったので……
フフフ♪
わたしは、王の額に、ホイミをかけます。
「より良い政治を、行ってくださいね」
王は、真摯な目で答えてくれました。
「約束する」

◇◆◇◆◇

あたしは、目を覚まして、見慣れない天井を見た。
どこだ、ここは……橋上の宿じゃなさそーだけど。
だいぶ、良くなってきた。
どれくらい寝てたか分からないが、素晴らしい回復力だ
なにか、こう、仕掛けたいな無性に。
部屋を見渡す。
……ん、バケツがあるな。
たぶん、ユイナが入ってくるかな、……よーし。
あたしは、扉を少しあけ、そこに、バケツを設置する。
入ったらバケツをかぶるという、悪魔の罠だ。
この手で、何度ババアをはめたことか……
ククク、あたしも、悪よのぅ
「そろそろお姉さんも、回復する頃合だろう……
って、うわっ!」

しかし、かかったのは、違う相手だった。
バケツをかぶったユイナが尻餅をつくのを期待したのにかかったのは、アルベールだ。
彼は、ちょっと、動揺したが、それを外さず、言った。
「……元気そうだな」
「おかげさまで」
バケツの向こう側で、呆れ顔をしていることだろう。
バケツマンの向こうから、愛しい妹が、顔を出した。
「姉さん！大丈夫ですか？」
「あたしは、無敵だ」
胸を張って言う。ユイナに近づき、ニオイをかぐ。
香ばしい我が妹よ。
しかし、そのニオイに、異変があるのを、見逃さない。
「……血、吐瀉物、涙のニオイがする。」
「え……？」
パッと見、無傷だ。自分で回復したのだろう。
「誰にやられたの？言え。姉ちゃんが殺してやる」
「ね、姉さん、落ち着いて……」
あたしの、こんな可愛い妹をよくも……
絶対殺す。１００回殺す。
「落ち着けミュスナ。……ユイナは、しっかり強くなってるぞ」
「ほう？」
興味深い話だけど、詳しく聞かないようにしよう。
聞いたら最後、殺しに行きそう。
アルベールは、バケツをとって、あたしに渡す。
その中をよく、見てみると……
「……！　ルーラストーン！」
無くしたと思ったのに。
「アルベールさんが、雲上湖を泳いで、とってきてくれたんですよ！」
「湖が凍る前に行けて良かったよ」
またそんな危険なことを……

「キミが、俺を庇って、落としたようなものだからね
キミたちが居なければ、俺は死んでいただろう」
キミ『たち』の言葉にユイナが嬉しそうに笑う。
わざわざ、あたしのために、あの寒い湖を泳いでくれたのか
それが、ただただ嬉しかった。
「ありがとう」
言ってと、ルーラストーンの袋を手に取ると、もう一つ何かが入ってるのが分かる。
開けてみると……
「なにこれ？」
豪華な鍵型の勲章のようなもの。
「キーエンブレム?!」
ユイナが、すっとんきょうな声をあげた。
あたしは、それを手に取る。
「その国の、英雄の証です！」
「へー、英雄ねぇ」
だとすれば、トドメをさしたアルベールが、相応しそうなものだが。
「いや、殴られた狂王が、怒りで出兵を遅らせていたからね」
「姉さんのおかげで、戦争にならなくて、すんだのですよ！」
これを、受け取った、ということは……
「この国は、もう、平和です！」
「……そっか」
良かった。
戦争にならなくて。
あの母娘のように、もう悲しむ人が、出てこなくて。
そのことが、思い浮かんだのか、少し空気が沈む。
「そろそろ、俺は、ヴェリナードに報告にいかないと」
その空気を変えるように、アルベールが言った。
ユイナが、寂しそうに、眉尻を下げた。
「もう、行っちゃうんですか？」
アルベールが、申し訳なさそうに、頷いた。

「あぁ。任務をしながら、やりたいことがあってね」
それから、思いついたように、教えてくれた。
「妹を探しているんだ。背の高い、桃色の髪のエルフの、女の子」
珍しい、1度みたら、忘れなさそうな外見だ。
妹を探す境遇まで、同じとは
「あたしもだ。もう一人の妹を探してる。」
「へぇ、2人いたのか」
あたしが、頷くと、ユイナが嬉しそうに、はにかんだ。
「じゃあ、キミの旅の無事と、成功を祈ってるよ」
そう言って、帽子を外して、一礼。
あたしたちも、真似て、一礼する。
「うまいうまい。」
笑って、褒めてくれた。
「ふふっ」
「えへへ♪」
あたしたちは、そろって、はにかんだ。
「じゃあ、また会おう」
アルベールが、手を振る。
「おう!」
「はい!」
彼の背中を見送ってから、あたしたちも、出立した。

◇◆◇◆◇

「次は、どこに行きますか?」
ユイナは、いつも、あたしに決めさせてくるなー。
別にいいけど。
「んー涼しいとこがいいな」
「じゃあ、エルトナ大陸ですかね~」
ここは、とにかく暑かったり寒かったり。
散々な目にあったし。

「駅は、こっちです！いきましょー！」
「走るとあぶねーぞー」
ユイナの中で、もう決定したらしい。
駅に向かって、階段を降りていくと……
あの母娘をみかけた。
そして、切られたあの男も。
「あれ？あの方は……」
ユイナも、気づいたようだ。
あっちも、こちらに気づく。
「あぁ！探しましたよ、英雄さん！」
母親が、声をかけてくれた。
英雄なんて言われたら、こそばゆい。
「よぉ。旦那さん、生きてたのな」
「こんにちわ、旦那さま、ご無事で何よりです！」
同時に似たような挨拶をして、苦笑される。
「えぇ。もうだめかと思ったんですが……」
「まじょさまにたすけてもらったの！」
母親の言葉を、娘が続けた。
「魔女さま？」
「うんっ！ぴんくの、かみのけでぇ、せがたかいの！」
これは、驚いた。
先ほど言ってた、アルベールの探し人と一致した。
「さっきの魔法戦士さんにも話したら、すっとんでいってしまって……」
「なんと名乗っていたんだ？」
母親が、口に手を当てる。
「魔女ルティアナ様、だったかしら」
「気になることを言い残してたらしいけどなぁ」
と、旦那。
詳しく聞いてみると。
『命が芽生えし最初の満月の夜に宝を頂戴しに行く』とか。なんのこ

とでしょう？」
「あとで金を払えばいいんじゃないか？」
なんか楽観的な気がするが、とにかく無事でよかった。
「あのね！」
娘が、あたしに、声をかけてくる。
「なんだ？」
1枚の紙切れを見せてくれた。
それは、あたしの指名手配書。
「あたしね！おねーさんみたいに、つよくなりたいの！」
キラキラと光る瞳に、既視感を覚えた。
その姿は、エテーネのユイナと、重なった。
「そうか！」
しゃがんで、頭をなでてやる。
「でも、こっちの、おねーちゃんみたいな、優しさも、忘れちゃだめだぞ？」
「そーなの？」
首をかしげる娘。
あたしは、指を立てて、持論を展開した。
「優しさが、本当の強さなんだ」
「ふぅん？」
よく、わからなそうだ。
まあ、今は分からなくていい。
「次は、どこに向かうのですか？」
父親の質問。答えたのはユイナだ。
「エルトナ大陸です」
あっちにも、邪悪な気配は、あるそうだ。
「気をつけて、旅の無事と成功を祈っています」
あたしたちは、息ぴったりに、礼を言う。
「ありがと」
「ありがとです！」
さあ、新天地へ。

新たな大地で、あたしたちは、新しい出会いを果たす。

第１４話　風の町アズラン

グレンの東口のすぐ近く、そこに、グレン駅がある。
地下に作られた駅には、今日も冒険者たちにより、溢れかえっている。
グレンは、冒険者たちの中心の都市なのだ。
あたしは、ユイナが人混みに流されないよう注意しながら、グレン駅を歩いた。
「わ！姉さん！げんこつアメが売ってますよ！」
なのにコイツと来たら、ホイホイと、離れていってしまう。
「ユイナ、あんま離れっと迷子になるぞー」
「大丈夫ですよ～子供じゃないんですし」
子供じゃなくてもお前は、心配なんだ。
「あ！駅弁食べたいです駅弁！
すいませんー、一つください～」
「おい、まだ買っていいっってないだろ」
もう遅い。
店員が「４００Ｇです」と、にこやかに弁当を差し出している。
……まあ弁当くらい、いいか。
「……すいません、２つ下さい」
あたしも腹が減った。
方舟に乗りながら、食べるとしよう。

◇◆◇◆◇

「まさか２５Ｇで乗れるとはなー」
「このパスのおかげですね！」
駅員に、まさにドヤ顔で、大陸鉄道パスを見せつけた、ユイナが面白かったな。
駅員は、苦笑いだった。
「座れるといいですね～」

方舟内部は、なかなか豪華だ。
そして運良く、座席に座ることが出来た。
「やったー♪」
ユイナは、座るなり、弁当箱を開け始めた。
ユイナの向かいに座る。
「お腹ぺこぺこです～」
「こぼすんじゃないぞー」
ユイナは、返事もそこそこに、弁当を食べ始めた。
リスのように口いっぱいに頬張る変わった食べ方をする
「ほれユイナ、食うか？」
「食べゆ！」
箸につまんだウィンナーをユイナに差し出すと、餌を差し出された犬のように食らいついた。
「ねーひゃん、もーいりゃにゃいんでふか？」
「いらなくは、ないけど」
口に食べ物を含みながら話すな全く。
そんな幸せそうな顔をされたら、あげないわけにはいかないじゃないか。
「ほら、食っていいぞ」
「いただきまふ！」
弁当箱ごと渡すと、勢いよく食べ始めた。
よく食べるんだなー、やっぱオーガなんだなユイナも。
ちょっと物足りないけど、アズランで、なんか食えばいいか。
手持ち無沙汰になって、景色を見る。
景色が白くなったり、赤くなったり
暑かったり寒かったりするグレンの気候が、よく分かる
おかげで、飽きない、が、なんだか眠くなるなー
「う？ねーひゃん、ねむいんでふか？」
「飲み込んでから喋れ、飲み込んでから。」
呆れ顔で言うと、ユイナは、勢いよく、口の中のものを飲み込む。
「おいおい、そんな一気に……」

「ンーっ!!」
案の定、苦しそうに胸をたたき出した。
あたしは、飲み水のキャップを外し、飲み口をユイナに差し出す。
「んっ、んんっ」
くぴっ、くぴっ、と、喉が鳴る。
「落ち着いて食え、落ち着いて」
呆れて言うが、内心、なんだか満たされるものがある。
エテーネにいた頃から、こんなことをしていたからかな
「……ふぅ、姉さん、眠いんですか?」
飲み口から、離れ、一息。改めて聞いてきた。
「んー、少しな」
「まだアズランまで、かかるので寝たほうがいいですよ」
わたしが起こしますから!と自信満々なユイナ。
自分も寝てて一緒に乗り過ごす……そんな不安を覚えるが。
「じゃあ、頼んでいいか?」
「もちろんですっ!」
じゃあここは、頼もしい妹に任せて、少し眠ろうかな。
あたしは、静かに目を閉じた。
眠気は、すぐにやってきた。

◇◆◇◆◇

すぐに目を覚ました。
正確には、覚ましたような気がした。
「……あれ?」
あたしは、独りでに、疑問を投げかけた。
そう、1人なのだ。ユイナも、ほかの乗客も、消えた。
「……夢か。」
周りを見渡す。
奇妙な静けさは、夢であることを自信つけた。
視線も戻す。と、そこには人がいた。

「おねえちゃん」
小さい方の、ユイナだ。
エテーネの、あたしの妹の。
またか……、と嘆息する。
「ユイナ……」
「なんで、ためいきつくのー？」
夢でしか会えないのが、虚しいからだ。
そう言っても、ユイナには、通じないだろう。
「静かに寝てたいのに、邪魔するからだ。」
「えぇー！」
ユイナは、唇をとがらせた。
「ためいきすると、しあわせにげるよ？」
「じゃあ、させんな」
いつもいつも、面倒かけやがって。
早く、現実で、抱きしめさせてほしいもんだ。
「ユイナのせい？」
「……いや」
けど、これは、ユイナのせいじゃない。
「あたしのせい、かな」
あたしが、弱かったせいだろう。
「おねーちゃん……」
ユイナの眉尻が、悲しそうに下がる。
「夢以外で、わたしに会いたい？」
あたしは、頷いた。
「当たり前だろ。会いたいよ。」
じゃあ、とユイナが続けた。
「きれいなカギのオモチャ、それがほしいな」
カギのオモチャ？なんのことか、分からないが、心当たりがあった。
英雄の証キーエンブレムだ。
「それがねー、１０こ、ほしいな！」
つまり１０国救え、と……

なんでだよ、と文句を言いたくなるが。
「集めれば、会えるのか？」
重要なのは、そこだ。
「うん、会えるよ」
ユイナは、真剣な表情で、言った。
「なら、集めるよ」
ユイナは、にんまりと笑った。
「うん……。」
そこで、あたしは、現実に引き戻される。

◇◆◇◆◇

「ねえーさーんー？つきましたよー？」
周りの喧騒と、夢と同じ声に、目を覚ます。
同じ声だが、違う姿。
大きい方のユイナだ。
「ん…」
「早く降りないと、出発してしまいますよ」
ユイナに手を引かれ、立ち上がる。
引かれるまま、方舟を降りて、あたしは、アズラン駅へと、降り立った。
「さあ！ここが次の冒険の舞台です！」
ユイナが、アズラン駅の扉を開け放つ。
突然、舞い込んだ日光に、あたしは、瞳を細めた。
「ん……」
瞬間、突風のような、強い風が、吹き抜けた。
だが、吹き飛ばされるような、強い風じゃない。
同じ風に吹かれるユイナが、揺れる黒髪を抑えながら、言った。
「ここが、風の町アズラン。
いい風でしょう？」
あたしも、揺れる銀髪を抑えた。

「ん、悪くない」
強くないが、弱くない、気持ちのいい風。
それに乗る、鼻腔をくすぐる木の香り。
良い国だ。
「ユイナ」
ユイナは、「はい？」と返事をした。
「キーエンブレム、集めよう」
ユイナは、一瞬の迷いすらなく、
ただひとつ、質問せずに
「はいさ！」
敬礼の真似事をして、元気よく返事した。
さぁ、風の中へと、踏み出そうか。

◇◆◇◆◇

「で、まず、どこ行くんですか？」
「メシ屋」
勢いよく出てきて、からのあたしの即答に、ユイナは、大きな瞳を丸くした。
「腹へってんだよー」
「まあ、わたしが食べてしまいましたからね！」
りょーかいですっ！とユイナ。最近、こういう感じがマイブームなのかな？
まあ、つまりアルベールの真似か。
「確か酒場は、宿屋の前をまっすぐ行って」
「宿屋ってあれか？」
あたしが、駅から見える、立派な和風建築を指さす。
木の匂いに混じって、嗅ぎなれないニオイが、あそこから漂ってくる。
「そうです！わたしたちの当分の宿ですね～」
宿屋の前までくると、高級な旅館と言った感じか。

とは言え、商売相手は、冒険者なので、格安のようだ。
すんごい助かる。
「ここ、温泉があるんですよー」
「おー、そりゃいいな」
なるほど、そのニオイは、温泉のニオイか。
今日泊まるのが楽しみだ。
旅館を見上げていると、ふともも辺りに、何かが当たった。
人にぶつかったか。
そっちの方を見る。
「悪い、大丈夫か？」
小さな女の子が、倒れていた。
フリルをまんべんなく使った黒い……喪服のような？
それでいて、ふわふわっとしている。
髪は、瞳の上でキレイに切りそろえられてて……ユイナのような前髪だ。が、腰まで、スラッと流れる長髪だ。色は黒、少し紫混じりで、とても艶やかだ。
ユイナのそれとは、一味違う。
そこにドンッと乗せてある大きめの紫のリボンが、とても目を惹く。
だが、それ以上に、目を引くのは……
肌の圧倒的、白さ。そして、長く大きな耳。
何より、背中にある透明の、妖精のような羽だ。
……なんだ、この守りたくなる生き物は
その生き物は、紫色の、ユイナより大きく丸々とした瞳を、あたしに向け、そして睨んだ。
「……キサマ！急に立ち止まるな！
でくの坊めが！」
眼帯をしていない、右の瞳を、キリキリと釣り上げる、白いヤツ。
「おかげで、私の、『いっちょーら』が埃まみれじゃないか！
どうしてくれるんだ!!」
小さいのが、すごい怒ってくる。

「あぁ、だから悪いって……」
「謝罪をしろ！謝罪を!!」
なんだコイツは。うぜーな。
いくら、かわいい女の子だからと言って、
あたしは、女の子の、襟首を掴んで持ち上げた。
ちょうど、子猫を運ぶ、母猫のような、感じに。
「謝ってるだろ。けど、前見て歩けよ、おじょーちゃん」
「な、何をするか！ヤバンな戦闘民族め！」
手足をばたつかせる女の子。
そんな、短い手足じゃ届かないぞー
「はなせー！はーなーせー！」
「あ！姉さん！エルフさんをいじめたらダメですよ！」
ユイナが、騒ぎに気づいて、口を出す。
失礼な小娘に礼儀を叩き込んでいるところだ。
「おい！そこの地味なやつ！コイツをなんとかするんだ！早くしろ！」
「じっ、地味っ!?」
またしても、地味と言われるユイナ。
この白くて小さくて軽いヤツが、エルフなのか。
確認に、ユイナに聞いてみる。
「これがエルフか？」
「キサマ、エルフも知らんのか！
博識で！慎みやかで！もっとも優れた種である、私たちエルフを！」
少なくとも、慎みやかでは、ないな。
コイツに限った話かもしれないが。
「私たちは、大雑把で雑なキサマらオーガと違って、繊細なんだ！こんな雑に扱うな！
分かったら、さっさt……ふぎゅっ！」
うるさいから、離してやる。
すると、小娘は、顔から、地面に落下した。羽根ついてんのに。

「あぁ！姉さんなんてことを！エルフは、すぐに骨が折れたりするんですよ!?」
「え？そーなの？」
そりゃ、悪いことしたな。
小娘は、地面に、倒れふしたまま、震えている。
「大丈夫ですか？エルフさん……」
「いたい……」
顔をあげる小娘。その、瞳には、たくさん涙がたまっていた。
「バカ！オーガなんかキライだ！」
駆け寄ったユイナをポカポカ殴る。
ポカポカって音、ほんとに鳴るんだな。
「あぁ、顔を打ったんですね、ホイミ。」
ユイナは、ポカポカと殴られながらも、小娘を回復してやる。
赤かった顔は、すぐに元の白に戻った。
「う？」
「ほーら、痛いの痛いの飛んでいきましたかー？」
小娘は、うん、と頷き、ユイナの、後ろに隠れ、あたしを睨んだ。
「ダメですよ！姉さん！」
「ダメだぞ！オーガ！」
お前ら並ぶと似てるな。
仕方ない、謝って、場を収めよう。
と、仕方なしに謝ろうとした、その時。
「何をしてるんだ？セリア」
今度は、男の、声だ。また新しいエルフか……。
あたしは、エルフってこんなんばっかなんかと、思い込み、ためいきをついた。
「ハル！どこに行ってんだ！」
「郵便局に寄ると行っただろう。
その方々は、誰だ？」
ハル、と呼ばれたエルフの、少年だろうか。
短く、キレイにまとまった、この少年も、黒髪だ。

緑色の瞳は切れ長で、なかなかの美少年だ。
服は執事が着るような燕尾服を着ている。色は、小娘と、同じ、黒と紫。
２人揃うと、まるで人形細工のようだ。
「アイツが私をいじめて、コイツが私を助けたんだ！」
交互に、あたしとユイナを指さす。
ハルと呼ばれた少年は、「ふむ」と、アゴに手を当て、それから、あたしに一礼した。
「……セリアが失礼なことを言ったのでしょう
代わりにお詫び申し上げます。」
深く、一礼した。
あたしは、拍子抜けする。
「あ、いや、あたしも、ひでーことしたしな……」
なんだか、すごい悪いことをした気分になった。
ユイナの影に隠れる、小娘を見る。
小娘は、びくっ、と身を震わせた。
「ごめんな、えーっと……セリア？」
小娘は、ぷいっ、と視線を逸らしたが、
「……私こそ、すまなかった。
あと、我が名は、オルセリアだ」
意外、素直に謝った。
やはり大切なのは、大人の対応だな。
「僕は、ハルカと申します
これも、何かの縁でしょう、お茶でも飲みませんか？」
ハルカ、と名乗ったエルフの少年の提案に、ユイナが手を叩いて、賛成した。
「いいですね！姉さんが、おごるそうです！」
「おい、まだなんも言ってねーよ」
「そうだ！ハル！こんなヤバン人と食卓を共にしたら、ディナーは我々だぞ！」
反対２賛成２だ。

「アズランの団子は、おいしいですよ
価格もリーズナブルです。」
「団子!?団子食べたいです!」
お前さっき吐くほど食ってたじゃねーか。
「だ、団子……!?」
オルセリアまで、食いついた。
「姉さんのおごりで、お団子食べましょ?
オルセリアちゃん」
ユイナが、しゃがみこんで、聞く。
「……んむ、まあ付き合ってやろう。」
ディナーにすんぞ、餅みてぇな顔しやがって。
「決まりですね、酒場は、こっちです」
ハルカが、先導して、歩き出す。
まさか、暴行のツケが、４人分の食事代とはな……
「お前ら、名前は、なんだ?」
オルセリアが、聞いてくる。
「わたしは、ユイナです。
そして、こっちの大きいのが……」
「ミュスナだ」
子供じゃあるまいし、自分で名乗る。
「ふむ、ユイナと、キングレオか」
「誰がキングレオだ、餅娘」
「誰が餅だ、アームライオン」
あたしは、オルセリアを睨む。オルセリアも、果敢に睨み返す。
牙を見せて、ガァ!と言ったら少し怯んだ。
「ほ、ほら!獣じゃないか!」
「もう、姉さん!エルフは、ビックリすると心臓が止まったりするんですから!」
エルフ弱すぎないか?
「ユイナ、お前は、イイヤツだな。
よし、我が使い魔にしてやろう」

「使い魔？」
何言ってんだこの餅は。
あたしたちの疑問に答えたのはハルカだ。
「つまり、友達、です。」
「あぁ！はい、お友達になりましょー♪」
オルセリアは、見るからに、嬉しそうだ。
使い魔と言い張るのはやめないが。
「私が呼んだらすぐに来るのだぞ！使い魔なんだからな！」
「つまり寂しいから構ってくれって、ことです。」
「はぁい♪ご主人様♪」
ユイナは、すっかりノリノリだ。
オルセリアも、ユイナのノリが嬉しいのか、その手をとって、ぶんぶんと振っている。
かなり、なつかれたな。ユイナ。良かったじゃんか。
そうこうしてる間に、目的地についたようだ。
「ここが、酒場です。」
ついてしまったか……、あぁ、あたしのG……
「団子～♪」
「団子…♪」
どっちが、喋ってるんだか、分からん。
「ご馳走になります、ミュスナさん」
ハルカ、こいつも何気にちゃっかりしてやがる。
「あー、はいはい……もう、どうにでもなれや」
まったく、素晴らしいスタートだよ。

第15話　風泣き峠にて

アズランの酒場は、宿屋の向こう、橋を越えた先にある
酒場内には、座席が1つもなく、困惑していると、ハルカが、奥へと案内してくれた。
「ベランダみたいになってるんですねぇ！」
そこには、ちゃんと、座席があった。
すぐ近くには木々があり、風が運ぶ、そのニオイは、心を落ち着けた。
「イス低いな」
「座布団ですよ姉さん、こうして、足をたたんで」
ユイナが、背筋を伸ばして、キレイに座る。
なんとも窮屈そうだ。
「座布団も知らないのかヤバン人め」
ユイナと同じように、キレイに正座したオルセリアが、嘲笑する。
カチンときた。
「その国の文化は、行って見なければ分からないものだ。笑ったら失礼だぞセリア」
ハルカも、同じく正座。
真似をしてみたが、早くも足がしびれる気がする。
すぐに根負けして、あぐらをかいた。
「いらっしゃいませ、ご注文は？」
そうこうしてると、店員が、注文を取りに来た。
「団子を4つ。ひとつは、とびきり辛口にしてくれ」
「それはキサマが食うんだぞ！私は食わないからな！」
察しのいいヤツだな。
「申し訳ありません、辛口は扱っていないのです」
「じゃあ、団子3つで」
「キサマァ!!」
おごられる立場のくせに、態度でかいな。
4つに、頼み直し、団子を待った。

◇◆◇◆◇

「ほう、姉妹で旅を」
　団子を食べながら、他にする話もないので、お互いの、他愛のない身の上話をすることになった。
「コイツ、体力ないわ、どんくさいわ、で、大変なんだよなー」
　あたしは、そう言いながらユイナを指さした。
　ユイナは、頬をふくらませる。
「そーですけど……むぅ……」
　むくれてしまった。
　でも、大丈夫。こうやって……
「ほれ、ユイナ」
　団子を差し出せば……
「！」
　ほら、食いついた。
　思ったより食われたけど。
　幸せそうに咀嚼している。さきほど、むくれていたことなど、もう忘れてるだろう。
「ふふ、楽しそうでいいですね」
　そんなユイナと、あたしを見比べて、ハルカが言った。
　いったん、区切れる話。
「よひ！つひは、わたひたひのはなひだな！」
　オルセリアが、団子を口に含んだまま言った。
「ちゃんと飲み込んでから喋りなさい」
　ハルカが呆れた声で言う。
　オルセリアが、喉を鳴らした。
「私たちは、幼なじみだ！」
　なぜか、誇らしげに言うオルセリア。
「へえ、意外だ。兄妹かと思った」
「うんうん」

あたしの感想に、ユイナが頷いた。
姉妹の反応に、幼なじみたちは、不満そうだ。
「そんなに似てないだろう」
「そうですよ、心外です」
それから、お互いを指さす。
「私は、こんなに、ひねくれてなどいない。」
「僕は、こんなに、ひねくれていませんよ。」
見事に、はもっていた。
ユイナと、並んで笑った。
「そういう2人は、あまり似ていませんね」
「うむ、姉妹に見えないな」
ユイナが、「そうですか？」と聞く。
「うむ。利口な妹と傲慢で乱暴な姉だな」
口が減らないやつだ。
あたしは、団子を1つ取り、オルセリアに差し出す。
「ほう？己の愚かさを恥じ、自分より賢きものに献上し尽くすことで、教えをこうという訳か
そういうことなら、喜んでもらって……」
長い口上を終えて、団子を食べようとするオルセリア。
団子をくわえる、その瞬間、手元を引いた。
「う？」
目を丸くして、あたしの団子を目で追うオルセリア。
あたしは、見せつけるように、それを、口に運んだ。
「ハル、ペットは、ちゃんとこうやって躾しないとだぞ」
「誰がペットだ！この牛女！」
あたしは、なんとも思わないが、ユイナが「うっ、牛!?」とショックを受けたようだ。
「牛……」
「ユイナは、あたしよりは、牛っぽいかもなぁ」
と、あたしは、ユイナの腹をつまんだ。
「あぁ！何するんですかぁー！」

「ちょーっと、もちもちしてきたな～」
ユイナが、握った手で、ポカポカと殴ってくる。
あたしは、謝りながら、おとなしく殴られてやる。
「まあ、躾不足は、分かっているんですがね」
「ハル……！お前まで……！」
オルセリアが、まさに、キーキーと言った感じで、ハルカに、食ってかかる。
ハルカは、耳を塞いで、苦笑している。
「うちのモーちゃんも運動させねーとなぁ」
「誰がモーちゃんですかぁ！もう姉さんキライー！」
叩く力が、少し強くなった。
叩かれるのも、疲れたので、そろそろ「ほれ」と団子を差し出す。
ユイナは、一瞬逡巡して、やはり食べた。
「……ここの団子おいしいですねぇ♪」
よし、機嫌がなおったようだ。
団子に舌鼓を打つ、ユイナにハルカは、満足げだ。
「アズランの団子はアストルティア1ですよ
……そういえば」
ハルカが、改めて、言い直す。
「お2人は、このアズランに、何をしに来たのですか？」
まあ方舟で来れるとは言え、外国だからな。
その疑問は、もっともだ。
目的は、妹を探すことだが、ややこしい。
かいつまんで、当面の目的を言う。
「キーエンブレムを貰いに来たんさ」
「ほう、英雄の証を？」
頷く。ハルカは、アゴに手を当てて、「ふむ……」と、なにかを考えているようだ
「奇遇ですね。僕たちも、同じ目的です。」
「へぇ、つまりは、ライバルか？」
挑戦的な、あたしに対して、ハルカは、静かに首を横に振った。

「いえ、協力をお願いしたいのです」
「ほう？」
土地勘のある者の協力は、ありがたい。
「それは助かるな。こちらとしても、ぜひお願いしたい」
断る手は、ないだろう。
「契約成立ですね。細かい取り決めは、後ほど、するとして……」
ハルカは、切れ長な瞳をつりあげた。
「頼みごとがあるのです」
あたしは、嘆息する。
「やっぱりか……」
そうそう、ただで、うまい話は転がっていない。
「何して欲しいんだ？」
「人探しを手伝って欲しいんです」
物事は、単直に聞くに限る。ハルカも、すぐに、本題を話してくれた。
「どんなヤツだ？」
「僕たちと同じエルフで、小柄で、あぁ、あなた方から見れば、僕らも小柄ですが……」
話が逸れましたね、とハルカは咳払いをし、オルセリアの方を見やる。
「僕らの、正確には、彼女、オルセリアの友人の少女です」
あたしも、オルセリアを見る。
こんな気難しそうなヤツに、ハルカ以外の友人が居たんだな。
「お腹……出てますかね……」
「き、気にするな！このくらいのほうが男は、好きだと本で読んだことがあるぞ！」
今は、新しい友人のフォローに必死なようだ。
「名前をフウラと言います
ここの領主の娘で」
領主の娘か。うまくいけば、それだけで、キーエンブレムをくれるだろうな。

「そうだ！早くフウラを探しに行かないと……！」
思い出したように、突然、オルセリアが叫んだ。
「団子に夢中で、忘れられるとは……。フウラとやらは、いい友人に恵まれたみてぇだな。」
嫌みを聞いたオルセリアは、あたしを睨む。
「安心してください！姉さんは人探し得意なんです！」
ユイナが自分のことのように誇らしげに言った。
人探しは得意だ。この身体のおかげで。
足跡を辿るか、ニオイを追うか。
「なにか、その…フウラ？の持ち物は、あるか？」
「ないですね。たぶん屋敷を訪ねても、彼女の部屋は、施錠されているでしょう」
オルセリアに聞いても、なにもないようだ。
「なんだ？持ち物なんか、何に使うのだ？」
「ニオイを覚えて追うんだよ」
あたしの答えに、オルセリアは嘲笑した。
「犬か！」
腹を抱えて笑ってる。なんとでも言え、この……
「うるせー餅娘。食うぞ。」
牙を見せると、静かになった。
ニオイがないとすると、足跡を追うしかないな
「なにか情報は、ねーのか？」
「この町を歩いて出ていく姿を見たとしたか……」
町には、居ないのか。
と、すると、目撃情報は、期待出来ないな。
「急いで探そう。魔物に襲われてるかもしれない。」
あたしは、３人を連れて、勘定を済まし、アズランを出た。

◇◆◇◆◇

アズラン地方は、木々に囲まれた美しい森だ。

鉄道をかけられた以外は、残してある、そのままの自然が、心を落ち着ける。
「ミュスナさん、なにか、分かりましたか？」
っと、落ち着いてる場合じゃないな。
あたしは、意識を集中しながら、地面を凝視する。
そうすると、なにか、薄く見えてくる。
しゃがみ込んで、さらに、集中する。
「……あった。」
小さな、足跡だ。人の子供か、小柄なエルフの。
「本当ですか？なにも見えませんが……」
「浅く、小さい足跡。たぶん、フウラのだ。」
少し進んで、僅かな異変を、感じ取る。
「極めて視力がいいのか…？それだと動体視力も、ずば抜けてるはずだが…興味深いな」
「ハル、うるさい」
気が散る。
ハルカを黙らせてから、よく見る。
「足跡が深くなった。強く地面を蹴ったということだな。んで、不規則。何かに追われていたのか、慌てようを感じる」
「お、追われて……!?すぐに追いかけないと……!!」
オルセリアが焦り出す。友人の安否が、心配になったのだろう。
「急ぎましょう！オルセリアさん！」
ユイナが、どたどたと走り出す。それに、オルセリアが続いた。
「おいこら、足跡を乱すな！」
せっかくの証拠が荒らされてしまう。
あたしは、声を張り上げて、叱責し、２人を追った。

◇◆◇◆◇

風泣き峠、と呼ばれる絶壁の崖に、足跡は続いていた。
追い詰められた、と見ていいだろう。

手遅れになってないことを祈りつつ、
あたしたちは、急いで、そこに駆け込んだ。
「あ、あれを！」
ユイナが指さした。その先には……
崖を背に、追い詰められた少女がいた。
巨大なナスのモンスターたちに。あれは、確か……
「ナスビナーラです！」
「そこを動くなよ！いま助ける！」
あたしは、声を張り上げて、背中の槍に手をかけた、
その時！
森の中から、影が飛び出した！
新手だと思い、そいつに槍を向けた。
「待ってください、ミュスナさん！」
ハルカに呼び止められる。
森の中から、飛び出したのは……
「ありゃあ確か町の入口にいた……」
「カムシカです！」
巨大なシカ。モンスターではない。
カムシカは、ナスビナーラに瞬く間に近づくと、立派な角で、弾き飛ばした。
ナスビナーラたちは、宙へと舞い上がり、そのまま海へと落下していった。
「頼もしいナイトがついてたみてーだな。」
ほっ、と一息。あたしは、背中に槍を納めた。
しかし、ナイトの働きは、報われなかった。
「なんで余計なことをするの!?」
エルフの、少女、フウラは、助けてくれたはずのカムシカを怒鳴りつけたのだ。
「大ッキライ！」
あろうことか、手にした、変なぬいぐるみを投げつけた
「あ……っ」

ぬいぐるみは、カムシカに当たり、跳ね返り、海へと、落ちる……
寸前を、見事な動きで、カムシカが、道無き道を飛び跳ね、落ちるぬいぐるみをキャッチし
「う……」
フウラの前に、持ってきて、頭をたれた。
フウラは、目の前に置かれたぬいぐるみを拾い上げ、そっぽを向いてしまう。
カムシカは、少し寂しげに俯いてから、その場を離れた
「あ……オルセリアに、ハルカさま！」
それから、こちらに気づいた。
「大丈夫か!?フウラ!!怪我はないか!?」
駆け寄るオルセリア。そのあとを、落ち着いた足取りでハルカが続く。
「無事でなによりです、フウラさん」
お前は、どんくさいんだから！とオルセリア。
オルセリアほどじゃないもん！とフウラ。
蚊帳の外のあたしたち姉妹だが……
「あの、そちらの方は？」
気づいてもらえたようだ。
「ランガーオのミュスナだ」
「同じく、ユイナです」
自分の腿くらいの身長しかない、フウラを見下ろす。
フウラは、なんだか、居づらそうと言うか、気まずそうだ。
「……助けてくれたカムシカに、あんな態度をとって、ひどいヤツって思ったでしょう？」
なるほどな。
ユイナは、あわてて、両手をふった。
「いあいあ！そんなことないですよ!?」
「恩知らずは、お前のためにあるような言葉だな」
全く正反対なことを言う姉妹に、フウラは、複雑そうな表情を浮かべた。

「正直なんですね、えっとランガーオのミュスナさん？」
「オーガは気を使えるほど繊細な種族じゃないからな」
「もう！姉さん！」
気に入らないと悪態をつく悪癖を、ユイナが、たしなめる。
「ごめんなさいね、悪気はないんですよ……たぶん…」
最後の、消え入りそうなたぶん、が、なんとも頼りなくしている。
「大丈夫です、事実ですから」
フウラは、影のある表情で、うつむく。
これは、何かあるな……。
だとしたら、少し悪いことをしちゃったな。
「さあ、町に戻りましょう、フウラさん」
気まずい空気を、ハルカがうまくまとめた。
オルセリアは、フウラのとなりに並び、なにやら説教をはじめた。
風泣き峠にある、墓石が気になった。
わざわざここまで来たんだ、墓参りしたかったのかもしれない。
「……せっかくここまで来たんだ、墓参り、していこーぜ」
あたしが、提案すると、フウラが、嬉しそうに了承した
あたしたちは、それぞれ、墓の前で、手を合わせてから風泣き峠を後にした。

第16話　秀才と天才

「さすが領主サン、金出しがいいなー」
アズラン領主、タケトラ。その屋敷の帰り道、
あたしは、ニヤケ顔が抑えられなかった。
手には、ずっしりと、金色の素敵なご褒美があったからだ。
「もう、最近、姉さん、がめついんじゃないですか？」
ユイナは、少し呆れ顔だ。まあその気持ちは分かる。
「領主相手にあそこまで食い下がって報酬を釣り上げるとは、全くみっともない。」
オルセリアが言った。まあ、確かに少し無理に釣り上げた感は、あるが……
「貰えるもんは、貰わないともったいねーだろーが」
団子で使った金は、倍以上になって戻ってきた。
団子のおかげで、ありつけた依頼だ。いいことは、するものだ。
「よしユイナ、服買ってやるよ」
「！　ほんとですか!?」
ユイナの表情が弾けるように輝いた。
できるだけ良いものを買って、彼女の安全を確保しなければ。
「バザー行きましょう！バザー！」
「引っ張るなよ。ハルーちょっと行ってくるなー」
あたしは、ハルカにそう言い残す。
「では、酒場で待ってます。そこで領主に言われた追加の依頼について話し合いましょう」
「……あぁ。そんな話してたっけか。」
そういえば、そんなことを言われていた。
キーエンブレムの授与も、考えていいと。
「金のことで、頭がいっぱいになって忘れてたな」
ハルカは、頭を抱えて、小さくため息をつく。
「妹想いなんですね」
いまの会話の流れからなんでそーなるんだよ。

まあ確かに、ユイナに買ってやりたいから、釣り上げたんだが……
「そんなんじゃねーーーよっ」
こういう反応をすると、かえって、そう見える。
分かっては、いるけど、つい口を出るんだよなぁ
「早く行きましょうよ～、姉さん～」
「ほいほい、んじゃ、あとでな」
自分でも分かるほど、ニヤついてたが、見られないように、あわてて、ユイナについていった。

◇◆◇◆◇

買い物を終えて、酒場に行ってみると、なにやら揉めるような声が聞こえた。
ユイナには、まだそれが聞こえてないようだ。
「みてくださーい！みかわしの服だそうです！
帽子が、かわいいでしょー♪
姉さんの新兵支給の鎧もぴしっ！としてて……」
新しいローブに、はしゃぐユイナが、２人が待つ客席へと、駆け寄る。
だが、彼女を迎えたのは、殺伐とした雰囲気だった。
「落ちこぼれのオルセリア！もうメラは使えるようになったのかなー？」
客席にいたのは、オルセリアとハルカ。そして、その２人を取り囲むように、３人のエルフたち。
あたしたちは、思っていたのと違う歓迎に、しばし、立ち尽くす。
「……っ」
オルセリアの性格なら、２倍の毒舌で言い返してきそうなものだが……
うつむいて、沈黙してしまっている。
「ねーえ？　ハルカくーん？　オルセリアは、メラくらいできるようになったのー？」

語尾を必要以上に高くした、癪に障る言い方だ。
ハルカは、冷静な声で、答えた。
「まだだ。安定には、程遠い。」
オルセリアは、魔法使い、それも卵なのか。
メラといえば、初歩中の初歩のはずだが……
「聞いたぁ!? まだメラも出ないんだってぇ!!」
3人の少女の甲高い笑い声が、響き渡る。
オルセリアは、拳を震わせて、うつむいている。
「だが、今は、の話だ。」
そんな中、ハルカは、相変わらず静かな、なのに、よく通る声で言った。
「この僕が教えているんだ。必ず、出来るようになる。セリアの潜在能力は、僕が認めている。」
オルセリアの震えが、止まった。
「君ら程度は足元にも及ばない大魔導師になるだろう、今のうちに、いじめておくといい。」
いじめておくといい、って……
助けてるんだか助けてないんだか……
「ちっ……行くわよ」
が、効果は、あったようだ。
いじめっ子たちは、舌打ちして、去っていった。
ヤツらを追い払ったところで、ハルカが、あたしたちに気づいた。
「……ミュスナさん、お見苦しいとこを見せてしまいましたね」
微妙な空気が流れる。
オルセリアは、うつむき、ハルカは、困ったように、微笑んでいる。
「い、いえ！いま来たところですよ!?なにも見てません！なにも！」
ユイナの言葉に、場は余計凍りつく。
ユイナの、優しさは、時として裏目に出るな。
こういう時は、うまく流すか……
あたしは、オルセリアのとなりに座る。
「お前、えらそーにしてるくせに、いじめられてんのか？」

茶化してやるのが、1番だろう。
しかし、効果は、薄いようだ。
「……黙れ」
オルセリアは、うつむいたまま、言った。
普段なら、それはヤツらに言ってやれと、言いたいが、少しかわいそうだ。
あたしは、オルセリアの二の腕をつかむ。
「しゃべれねーなら殴ってやりゃあいい。
こんな細い腕じゃ、難しいけどな」
むにむに、と揉む。
「離せ！」
オルセリアは、あたしを睨んで、ふりほどいた。
軽い力だったが、離してやり、「おー怖っ」と、大げさに言ってから、頭に、ぽんっ、と手を置いた。
「その意気だ。」
オルセリアは、慰められたのが、分かったのか。
それが悔しかったのか、頬を、赤く染めて……
「黙れ！」
と、力強く、目を合わせて言った。
怒らせたが、いい気付けになったようだ。
「もういい！ハル！仕事の話をするぞ！この話は禁止だ！」
「はいはい」
強引にまとめられ、ハルカも、苦笑している。
ユイナが、あたしの袖を引いた。
「姉さん姉さん」
「ん？」
抱きしめたくなる優しい微笑みで、こう続けた。
「優しいですね」
あたしは、指先で、頬をかいた。
「湿気たツラが嫌いなだけだ」
ユイナは、「はいはい♪」と分かってますよ、と言いたげだ。

頬をぶにぶにしてやろうと思ったが、仕事前だ。許してやろう。
あたしは、オルセリアに目をやる。
「フウラのためだ！ぜったい！やりきるぞ！」
「当然だ。」
気分は、変えられたようで、何よりだ。

◇◆◇◆◇

領主、タケトラの追加の依頼は、あたしにとって、都合のいいものだった。
風乗りになる領主の娘、フウラ。その手伝いをしてほしいとのことだった。
風乗りというのは、この町の守護者のようなもので、
この町に良い風を吹かせる者らしい。
風乗り不在の現在のままでは、悪い風が、吹き続け、
町をあっという間に、衰退させてしまうらしい。
エルフというのは、つくづく、難儀な種族だな。
「フウラは、やっと、風乗りになる決意をしたんだ！
友人の、この私が、その背中を押してやらねば！」
オルセリアは、かなり燃えているようだ。
「友人、ですか？　使い魔、じゃなくて？　」
ユイナが、茶化す。オルセリアは「うっ！」と言葉に、詰まる。いや、いいじゃん友人で。
「報酬にキーエンブレムを頂けるとは、幸先いいですね」
ハルカも、満足そうだ。
キーエンブレムなんて、役に立たなそうなもの、どうするんだろうな。
「ハルカさん、キーエンブレムなんてもの、どうするんですか？」
あたしの疑問を代わりに聞いてくれたのはユイナ。
ユイナは、こういったことを、ずかずか聞いてしまう。
時として嫌がられるのだが、ハルカは、快く教えてくれた。

「僕は、この町、いえ、国を出るんです」
それとキーエンブレムと、どう関係するんだ？
あたしの疑問とは、裏腹に、ユイナは、得心いったようだ。
「なるほど！大陸鉄道パスをもらうためですね！」
確かに。英雄の証なんて持っていたら、少し貴重なパスくらい、発行したくなるだろうな。
「物欲的な英雄も、居たもんだな」
「いつの時代も、英雄とは欲深いものですよ」
あたしの皮肉も、ハルカは、うまくかわす。
皮肉に気持ちいい反応をしてくれるオルセリアは……
「そうだな…、早く、キーエンブレム、もらわないと…だな。」
ハルカが、この国を、出る、と言ってから、目に見えて落ち込んでしまっている。
今知った、というより、思い出した、と言った感じだ。
「……私、ちょっと外の空気、吸ってくる」
オルセリアは、落ち込んだまま、席を立ってしまう。
ハルカは、眉根を寄せる。
「……？　彼女、僕がこの話をすると、あんな感じなんですよ。いつも。なんででしょう？」
「え？お前それマジで言ってんの？」
ハルカは、きょとん、とした表情で、「おかしいところでも？」と聞き返してくる。
「姉さん、これって、もしかして……!?」
ユイナが、耳打ちしてくる。もしかしなくても、そーだろ。
「まあ、だろーな」
「きゃー！」
なにアゲアゲになってんだ。
あたしは、〉〈な顔になってるユイナに軽くデコピンする。
「余計なことすんなよ、ガキの惚れた腫れたに付き合ってるほど、暇じゃないんだからな」
「えぇー」

他人の色恋に首突っ込むほど、愚かで無駄なことはない
決して自分に縁がないから、ひがんでるわけじゃないぞ
「では、仕事の話の続きですが……」
「あ、はい！」
ハルカが、話を戻し、ユイナが聞き入る。
あたしは、オルセリアが気になった。
たぶん、まだ、いじめっ子が、そのへんにいるはずだ。
何もなきゃいいが……
一応、あたしは、そっと、酒場を出て、オルセリアのニオイを追った。

◇◆◇◆◇

私は、魔法が大の苦手だ。
勘違いするなよ？使うことは出来る。
メラでもイオでもヒャドでも、すぐ出来た。
普通は、呪文書を読み込み、真理を理解し、初めて使うことが出来るようになるという。
しかし私が、すぐに出来た。本当に、すぐにだ。
昔、家で、親の真似をしたんだ
呪文書を読むまでもなく、見様見真似で、言った。
「メラ」
私が、２歳のときだ。
そうすると、どうだろう。驚くべきことが起きた。
私の初めて放ったメラは、私の家を焼き尽くした。
巨大すぎたのだ。
今も廃墟だ。
ヒャドは、周りを真冬みたいにした。
イオは、友達すべてを吹き飛ばした。
大人たちは、私を神童と呼んだ。
そして、友達は、私を化け物と呼んだ。

子供にはありえない魔力量なんだそうだ。
生まれていきなり戦闘力1万とか、そんな感じ。
今も、増え続けている。大人たちも、次第に化け物と、呼ぶようになった。
寂しかった。化け物と呼ばれ、いじめられた。
私は、化け物なんだから、周りは全部、使い魔。
使い魔は、友達には、できない。
それでいい。私は、悪魔の姫だ。
そんな私に、本物の神童が、声をかけたのだ。
「キミの魔力量に興味があります。研究させてください」
そいつは、学び舎1番の秀才だった。
私は、そいつに、こう言った
「近づくな、殺すぞ」
すると、そいつは、こう言った。
「キミごときに、やられません。」
だから、私は、こう言った。
「化け物だぞ、私は」
そいつは、こう言った。
「僕は天才です」
自分で言うかそれを。
私は、久しぶりに、笑った。
すると、そいつは、言ったんだ。
「笑った顔は、化け物じゃないんですね」
この時、微笑んだ顔は、忘れられない。
「かわいらしい、ただの問題児だ」
そいつは、それから、ハルカと名乗った。
女みたいな名前だ、と言うと、こう怒ったけど。
「ハルカが男の名前で何で悪いんですか、僕は男ですよ」
けっこう、本気で、怒っていたので、禁句になった。
私は、初めて、自分から名乗った。
「オルセリア」

ハルカは、最初から、こう呼ぶんだ。
「長いですね。セリアと呼びます。」
私をセリアと呼ぶのはハルだけだ。
それが、なんとなく嬉しいんだ。
「ハルって、呼んでください。よろしくセリア」
差し出された手は、華奢すぎて、私のそれと、あまり、変わらない。
「う、うむ。よきにはらかえ」
覚えたての言葉を、適当に言った。
ハルは、苦笑して、訂正した。
「良きにはからえ、ですよ」
私が、彼に依存するようになるまで、そう時間は、かからなかった。
……だが、ハルは、もうすぐ旅に出る。
そうなれば、滅多に会えない。
フウラは、風乗りの仕事があるし、ユイナだって、あのいけすかない姉と、旅に戻るだろう。
この旅が、終われば、また1人になってしまう。
だから、強くならなきゃいけない。
1人でも大丈夫って、ハルを送り出したい。
こんな、いじめなんかに、屈してる場合じゃない。

◇◆◇◆◇

オルセリアを見つけた。案の定、絡まれている。
「ほら!・メラやってみなよ!・落ちこぼれ!」
囲まれて、肩を押されたり、蹴られたり、
けど、オルセリアは、膝を折っていない。
「なんかいいなよー?・ねえねえ?」
本当に、危険になるまで、見守ろう。
彼女にだって、プライドがある。
「ハルカくんも、バカだよねー、こんなのに付き合って、人生無駄にしてさー」

それが、地雷だったようだ。
オルセリアの周りに、緊迫した空気が、はりつめた。
あたしに、魔力は、分からない。
「私が、ハルの、無駄……？」
そんなあたしにすら、分かるほど、強大だった。
強大な力が、オルセリアの周りで、渦巻いている。
「そうだ、わかってる、私は、ハルの無駄で、邪魔なんだ」
すべて、吹き飛ばす。
はりつめた空気が、はじけ飛びそうな、その刹那。
オルセリアの眼帯が、光った。
眼帯に浮かび上がった紋章は、あとで、ユイナに聞いたら『マホトーン』呪文を封じる印らしい。
彼女の魔力が暴発しないように、誰かが、つけた呪具なのだろう。
強引に、力を押さえ込まれたオルセリアは、たちまち、膝から崩れ落ちる。
それで、さっきまで、怯えていたいじめっ子は、逆上した。
「びびらせやがって……！おい！」
友人たちに指示し、オルセリアの脇を持ち強引に立たせる。
「メラを教えてあげる。身体に直接ね！」
加減すれば死にはしない！いじめっ子は、そう叫んで、呪文を唱えた。
「メラ！」
あたしは、オルセリアの前に、躍り出て、
その小さな火球を、素手で、捉え、
握りつぶした。
「あちちっ」
手をぶんぶん振る。場の空気が、凍りつく。
突然、現れたデカイ鎧のオーガの女。
立ち尽くすエルフたち。
「誰よ……あんた……？」
あたしは、後ろにいるオルセリアを、振り向かず、親指で指さす。

「こいつの使い魔。」
それから、指を鳴らす。
「……失せろ羽虫ども。」
いじめっ子たちは、蜘蛛の子を散らすように、逃げていった。

◇◆◇◆◇

こいつ、なんで、私を助けたんだ？
「おい、餅娘」
しゃがんで、目線があう。
ひぃ、顔こわい
「た、たすけ、なんか……」
額に、軽い衝撃が走った。
「びゃぁ！」
こ、こいつ！デコピンしやがった！
「めそめそしてんなよ、ったく……。あーいてぇな」
手を軽く火傷している。こいつ、いつも、こんな助け方をしているのか……。
「1つ借りな。今度団子奢れよ、餅」
今度……、あんな近くにいた、ということは、私のあの力を見ただろうに……
「お前は、私が怖くないのか？」
その問に、ミュスナは、にひひ、と笑った。
「餅が怖い鬼がいるかよ」
あたしのが、つえーしな。と付け足す。
「強い弱いの基準しかないのか？ヤバン人め」
「ないねー、頭ワリーから」
私は、思ってることと、逆のことが口に出る。
気持ちだけは、思っておこう
……ありがとう、ミュスナ。

第17話　すれ違い

ハルカさんが、キーエンブレムをもらったあとの、目的を語ると、
オルセリアさんは、逃げるように、酒場を出ていってしまい……。
姉さんも、追いかけるように、フラリと酒場を出ていった。
「……この話をすると、いつも、どこかに行ってしまうのですよね」
ハルカさんが、複雑そうな表情で言った。
なぜ、逃げてしまうのか、分かってるようだった。
「オルセリアさんも連れて行って差し上げればいいのでは？」
それこそ、わたしのような、行きあった人間が、口を出していい話ではないけど、
２人の表情を見ると、口を出さずにはいられない。
そして、ハルカさんは意外にも、即答した。
「僕は、そのつもりなんです」
驚きを隠せないまま、「だったら！」と続ける、わたしを静かに遮り、ハルカさんが続けた。
「ですが……、こうも思うのです」
それから、ハルカさんは、自分の気持ちを整理するように、１つ１つ、語り出した。
「僕が、あの子に興味を持ったのは、あの魔力量。
エルフの範疇すを超えた、あのチカラに興味を持ちました」
つまり、知的好奇心。
それは、わたしも、旺盛だから、わかる。
「僕は、所詮……、自分で言うのは何ですが、秀才というやつです。
呪文の理解がいいだけ。」
魔力量は、至って平凡。
ですが、とハルカさんが続けた。
「あの子は、生まれついての天才です」
天才。
それは、優秀な人間ほど、わかる、才能の差。
決して埋められない、高い高い壁であり、溝だ。

「あのチカラを使いこなせれば、歴代最強の魔法使いも夢じゃない」
ハルカさんの表情は、輝いていて、言葉は、熱かった。
興味をそそるものや、自分の得意分野の知識だと、わたしたちは、こうなる。
けど……、それは、あくまで……。
「そう、僕の目的なんです」
オルセリアさんがチカラを使いこなし、自分は、それを研究し、学会に提出する。
それは、ハルカさんの、目的であり、幸せ。
「セリアのとっての、幸せが、そこにあるのでしょうか……」
やっぱり、悩ましいのは、そこなんだ。
「きっと、ありますよ」
ただの研究対象に、こんな想いはしない。
オルセリアさんの幸せは、きっと、ハルカさんのそばにいること。
「だと、いいのですが……、
ときどき、思うのです」
きっと、オルセリアさんの、幸せが、ハルカさんのそばにいる。
ただそれだけでいい、というのが、彼には分からないのかな。
「魔法など、関わらず、平穏に、あの眼帯をつけていれば、何事もなく幸せになれるのではないか、と」
あの眼帯には、魔力を感じる。
きっと、ハルカさん特製の、魔法具なんだろう。
「僕が、あの子の幸せを、邪魔しているのではないか……ってね。」
ハルカさんが誘えば、オルセリアさんは、喜んでついていくだろうけど、
ハルカさんには、それが無理をさせてるように、見える
「だから、言い出せないのですね」
ハルカさんは、小さく頷く。
きっと、ハルカさんも、オルセリアさんにたいして、知的好奇心以上の感情を持っている。
でなきゃ、その幸せを願ったりしない。

「哀しい、すれ違いですね……」
オルセリアさんも、きっと同じ気持ち。
けど、彼女は絶対素直にならない。
それは、ハルカさんも、同じ。
似てないようで、とても似ている2人。
わたしには、うまく気持ちが伝わることを祈ることしかできなかった。

◇◆◇◆◇

「ふーーん」
オルセリアの長話を、腕を組んで、そう、相槌を打った
オルセリアは、それが不服だったようだ。
「ふーーん……って、それだけか？」
唇を尖らせ、眉根を寄せる。
そんな顔するなよ、他になんと言えと言うんだ。
「悲劇的な恋！ミュージカルみたいです！
とか言えばいいのか？」
ユイナの声真似をして、言ってみた。
それをオルセリアは、鼻で笑う。
「今の、もしかしてユイナか？
だとしたら女優は絶望的だな。
朝のニワトリのほうがマシな演技をする。」
オルセリアの毒に、うるせぇ、と毒づく。
「いじめっ子の前じゃ、冬のナマズみたいに大人しいのに、
あたしには、それか？大女優め」
オルセリアは、いじめっ子のくだりを見事、スルーする。
「私に不可能は、ないのだ。」
と言って、オルセリアは、腕を組んだ。
それから、神妙な声で、聞いた。
「あまりヒトに話したことないのだが……、どう思う？」

「どうって？」
オルセリアは、深くため息をついた。
「演技力だけでなく記憶力も残念なのか？
ハルの話だ」
まあ、それは分かってる。
困ったことに、あたしは、こういうのに対して、答えを持ち合わせていないのだ。
「あたしに、色恋沙汰は、わかんねーよ」
色恋沙汰、と聞いたオルセリアは、過剰に反応する。
「そんなのじゃあない！」
顔を真っ赤にするオルセリア。ハルカが聞いてるわけでもないのに、なぜそこまで
「もし聞かれたら、どうするんだっ」
あぁ、なるほど。オルセリアは、声をひそめる。
「……まあ、仮に……！恋愛感情とするだろ!?」
「仮にじゃないだろ」
「うるさい！黙って聞け！鬼女！」
オルセリアは、1つの設定を提示した。
「もし、お前の好きな人が、旅に出るとする！
お前は、ついていきたいとする！」
「好きな人、ユイナでいい？」
「なんか違う気がするな」
親愛と恋愛は、大差ないんじゃないか？
よくわからんけど。
「まあ想像しやすいほうが、いいしな…
ユイナが旅に出るとしたら、どうする？」
「問答無用で、ついていく」
即答に、オルセリアは、目を丸くした。
「だ、だめと言われたら……？」
「問答無用って言ったろ？」
オルセリアは、ため息をつく。

それから、なぜだ？と聞く。
「好きだから。心配だから。」
もう、と言いかけて、抑え込む。
詮索されるようなことは、言うもんじゃない。
「失いたくないから、だな」
もう、失いたくない。
行って、戻って、居ないのは、悲しすぎる。
「……それだけか？」
あたしは、肩を竦める。
心からの疑問だ。
「それ以外、必要か？」
オルセリアの息を呑む音が聞こえる。
それから、かすむ声で、続けた。
「自分の存在が……、その人の邪魔になるとしたら……」
それでも、ついていくか？と聞かれる。
「行きたいなら、行くべきだろう」
足手まといになりますが、ついていきたいです。
強くなりたいんです。
ユイナは、あの日、そう言った。
あの子は言えた。あたしは、答えた。
だから……
「せめて、気持ちは、ちゃんと伝えるべきだ」
言わなきゃ分からない。
簡単だけど、難しいことだ。
「そんな簡単な話じゃないっ」
特に、オルセリアにとっては。

◇◆◇◆◇

酒場に戻るなり、オルセリアは、大丈夫だったか？と心配してくれたハルカに突っかかった。

「ハルがイチャイチャしてる間に、絡まれたが、なんの問題もないぞ」
下手な嫌味だったが、ハルカは、眉根を寄せた。
「仕事の話をしていただけだ」
「そーですよ！イチャイチャなんかしてないから、ハルカさんを睨まないで姉さん！」
睨んでないよ、なんだとコラって思っただけだよ。
オルセリアは、腕を組んだまま、そっぽを向く。
「ふん、どーだかな」
「……」
2人の間に、微妙な空気が、流れる。
オルセリアが、何をしているのか、わかった気がした。
「2人とも、どうしたんですか！
本当に、なにもないですから！ね!?ハルカさん！」
ユイナは、必死に下手なフォローを入れる。
そう言うと、なんかあったように聞こえるぞ。
「なにを怒っているんだ？」
ハルカが、オルセリアに尋ねる。
オルセリアは、そっぽを向いたまま、言った。
「別に。」
冷めきった声から、小さな悲鳴を感じた気がした。
……わかった。こいつ、ハルカに嫌われようとしている。
それは、もっとも愚かで、悲しい選択だ。
「早く仕事を終わらせて、旅に出たいのだろう？」
その言葉の裏には、「1人で。」と潜んでいるのだろう。
ハルカは、頷いた。
「あぁ。急ごう。」
微妙な空気のまま、あたしたちは、アズランを出た。

◇◆◇◆◇

「どーしちゃったんでしょお……？」

まず、歩いてイナミノ街道の山間の関所に向かう、あたしたち一行。
その道中、ユイナが、小声で訪ねてきた。
「子供の痴話喧嘩だろ、口出さないほうがいい」
あれは、オルセリアが考えて、決めた、自分の意志だ。
どんなに愚かな選択でも、尊重するべきだろう。
「ユイナさんは、呪術や霊関係に詳しいそうですね？」
ハルカは、さっきからユイナに話しかけている。
「はい！専門家！です！」
「僕も興味がありまして、少し教授、願えますか？」
「……！　はい！専門家！ですからね！教授します！」
専門家、を、やたら言い張る。オタク呼ばわりを、まだ気にしていたようだ。
お互いの知識で、盛り上がる２人。
なかなか気が合うようだ。
「……ふん」
その様子を見て、オルセリアが不機嫌そうに言った。
さっきのは、演技だったが、今回のは、本音っぽいな。
「どーした？嫉妬か？」
ニヤニヤしながら、小声で聞いてやる。
オルセリアは、そっぽを向くが、小さく頷いた。
「我ながら、めんどうくさい女だと思う」
「それ、めんどうくさい女の常套句だな」
オルセリアが睨んでくる。
まあ度を過ぎなければ多少の嫉妬は必要だ。
「仕方ないだろ。……言葉と違って、気持ちはウソをつけないのだから……」
オルセリアは、寂しげに、言った。
「……それに、好都合だ。」
そう、静かに続けた。
無理をしているのが、手に取るように分かった。
「ユイナさんは、本当に物覚えが、いいですね」

「オーガが全員、姉さんタイプだと思わないでください♪」
少し話すだけで、ハルカの魔法理論をすっかり覚えてしまったユイナ。
……って、誰が姉さんタイプだ。
「物覚えが悪くて、悪かったな。」
会話に割り込むように、オルセリアが言う。これは、なかなかウザイ。
「……そんなこと、言ってないだろう」
水を差されたハルカが、不機嫌そうに言う。
ユイナは、少しオロオロしてから、あたしのところに、逃げてくる。
「ど、どど、どうしましょう姉さん……」
「さあな、あたしタイプのオーガには、難しい問題だ」
う、聞こえてたんですか……と、ユイナ。
あたしは、物理的に数理先の悪口をも聞き取る。結構、つらい。
オルセリアとハルカは、にらみ合い、互いに、そっぽを向いてしまう。
「さ、さあ！もうすぐイナミノ街道ですよぉ！」
ユイナが無理に盛り上げる。その努力は、虚しく効果なく終わるが、あたしだけは、頭をなでてやった。

◇◆◇◆◇

今日は、山間の関所で、泊まることに。
小さなテント張りの宿屋で、もうハルカさんと姉さんは、眠ったみたい。
あとで気付いた、姉さんの手の怪我には驚いたけど。
また無理して……。
「アツアツのバカップルをムカついて、ぶん殴ったら
本当に熱かったんだ」
とか、訳の分からないことを聞きながら、治療してあげる。
キレイに治って、良かった。

「ありがとな」
姉さんは、そう言って、頭をなでてくれる。
わたしは、それが昔から大好きで……
「……おや？」
なんて思案にくれながら、テントの宿屋を夜空を見に出ると、
明かりがついていた。
テントのすぐそばにある、机。
そこのランプが、ついていた。
そこに、居たのは……
「オルセリアさん！」
背後から、突然名を呼ばれたオルセリアは、ビクンっと跳ね上がる。
おそるおそる、振り返る。
「……ユイナか。」
安堵したように、一息つく。
手には、羽ペンを持っている。
「何してるんですか？」
「ん、午後の授業の復習だ」
オルセリアさんが、なにかを書き込んでいるノートを見てみると、
そこには……
「これは、わたしが、ハルカさんとのおしゃべりの時に聞いた、魔法理論ですね」
「うん、一応、メモ取ったから」
それを、まとめてるみたい。
どうして、こんなことをしてるのだろう？
「こうして、自習して、覚えると、褒めてくれるんだ」
なんとも幸せそうな表情で、わたしの疑問を満たしたくれた。
「それが、嬉しくて、こうしてメモと、まとめ、が、クセになったのさ」
「なるほど～」
よくよくみると、少し間違いに気づく。
そこを指差し、訂正する。
「……聞いただけで私より理解してるとは……」

複雑そうなオルセリアさん。
わたしは、弱々しく笑う。
「まあ、いい。せっかくだから、教えてくれ」
「喜んで♪」
寝るの、遅くなったけど、星空の勉強会は、わたしの、大切な思い出です。

第18話　伝わらない

スイの塔は、山間の関所から、西に行ったところ、
スイゼン湿原に、そびえ立っている。
木造の塔で、エルトナ特有の風情を感じる。
見上げているだけで、深い歴史を感じて、感傷に浸りたくなる。
……こんな空気で、なければ。
「……」
「……」
まさに、むっつり、と言った感じのエルフの2人組、
ハルカとオルセリア。
そのあとを続く、あたしと、ユイナ。
ユイナは、おろおろ、と心配そうに見守っている。
「き、気まずいですねぇ……」
ユイナは、なんとか、この空気を変えたいようだが、
さっきから、空回りを続けている。
「まあ、ほっとくしか、ないだろ」
この空気も、曲者だが……、
この湿原の空気も、なかなか気が抜けない。
虫も多いし、沼からの奇襲も油断できない。
辺りを警戒する、あたしの耳に、それは聞こえた。
「羽音だ。近いぞ」
虫の羽のような音、それもかなり大きい。
槍を取ろうとする、あたしを、ユイナが止める。
「ここは、わたしに任せてください！」
胸をはって、言い放った。
呪文が増えてからというもの、すっかり自信をつけたようだ。
「分かった、けど、使いすぎないようにな
このあとも、なにが出てくるか、分からないぞ」
「安心してください！」
ユイナは、背中に持った、弓を手に取る。

確か、前持った時は、ろくに弦を引けなかったはずだが
……
「姉さんが怪我で寝てる間に猛練習した成果を、見せますよ！」
自信満々なユイナの手には、アルベールが調整した練習用のものではなく、通常の製品の、弓。
「へぇ、楽しみだな」
おとなしく、見守る。
矢を手際よく、つがえるユイナ。
そうしてると、巨大な虫の、紫色の体色の、蜂のような、
怪物が、姿を見せた。
オルセリアめがけて、針を向ける蜂。ハルカが、オルセリアを自分の背中に隠れさせる。
「むっ、虫……っ」
オルセリアが、初めて見る巨大な虫に怯える。
威嚇するように羽を強く動かした、ソレの額を、矢が射抜いた。
「ひゅー♪」
あたしは、思わず、口笛を鳴らした。
感心したのだ。
弓を背中に戻し、ユイナは、まさにドヤ顔を決めた。
「えっへん」
「やるじゃないか。……けど」
あたしは、ユイナの腕を引いて、抱き寄せる。
突然、腕を引かれ、体勢を崩したユイナを、しっかりと受け止め、そのまま沼に向かって、足を突き出す。
「武器をしまうには、少し早いな」
その足に、黄色い体色の怪物の頭が当たる。
こっちは巨大なトカゲようだ。まるまる太っているが
そのまま、頭を踏み抜き、沼のなかへと、強引に押し込める。
「ぽ、ポイズンリザードですね……」
黄色い太ったトカゲの怪物の名前だろうか。
よく見ると、けっこーかわいいマヌケ面をしていたな

「さっきのでっけー虫は？」
「あれは、ハンターフライです」
ポイズンリザードは、適わないと察したのか、沼から出てくることはなかった。
「もうすぐ、スイの塔ですね
御二方のおかげで、安全に進めていますよ」
手際よく、２体の怪物を始末した、あたしたちに、ハルカが感謝を述べた。
「それにしても、ユイナさん。弓の扱いにまで、長けているとは……才能豊かな女性ですね」
「え！いやいやぁ！天才だなんて！」
そこまで言ってない。ユイナは、褒められると、素直に受け止めて、全力で喜ぶ。
そして、それが、顔に出る。
「褒めすぎると調子に乗るから、ほどほどにな
まだまだ、上達の余地はあるぞユイナ」
確かに才能を感じる上達ぶりだが、それでも、まだまだ褒めてやるわけには行かない。
あたしは、厳しいお姉ちゃんなのだ。
「そうですよね……、トカゲさんにも、気づきませんでしたし……」
もちろん、苦言も素直に受け取る。
すばらしいことだが、そんなに落ち込まなくても……
「まあ、それにしても、いい上達ぶりだと思うけどな
才能は、あるのかもな」
「！　本当ですか!?」
まさに一喜一憂、落ちたり上がったり、忙しいやつだ。
そういうところが、なんだか可愛らしい。
「なんでも素直に受け止めて、一喜一憂。
可愛らしいですねユイナさんは」
ハルカは、すっかり、ユイナが気に入ったようだ。
あたしと違って、きちんと褒めるハルカに、ユイナも、なついてい

る。
一瞬、ほんわかした空気になるが……
「悪かったな、素直じゃなくて。」
オルセリアの一言で、空気が一変する。
ハルカは、ムッ、と眉根を寄せた。
「そんなこと、言ってないだろう」
「そうだったか?そう聞こえたんでな」
ユイナは、おろおろし出す。
あたしを、すがるような目で見るが、知るかと、視線で伝える。
「なんだ?　昨日からユイナさんを褒めるたびに突っかかってきて……」
「……気のせいだろう。」
オルセリアは、これでもか、と素っ気ない態度をとる。
ハルカも、何かに気付いたように、はっ、とする。
「まさか、妬いてるのか?」
オルセリアは、弾けるように、声を荒らげた。
「はあ!?そんなわけあるか!」
すでに、見慣れた反応。きっと、これは、本心なんだろう。
「だったら、なんで、そんな態度をとるんだ?」
「別に、いつも通りだろう」
あわてて、素っ気ない態度に戻るオルセリア。
ハルカも、負けじと食いつく。
「普段と、明らかに違う」
「いつも通りだ」
「いや、違う」
「違わない」
なんだか見ててイライラしてくるな……
そんな、あたしの苛立ちが、ユイナに伝わるのか、小声で、まあまあと言ってくる。
「やっぱり、妬いてるんじゃないか」
「妬いてなんか……!」

オルセリアの言葉を切って、ハルカが、言った。
「僕とキミは交際関係ではないのだから、妬かれるような筋合いはない！
……迷惑だ…！」
言ってしまった。
それが、地雷だったようだ。
オルセリアは、一瞬、固まった。
……が、すぐに、静かな、震えた声を、出した。
「ああそうだよ、私とハルは、そんな関係じゃない…」
オルセリアさん…！言いかけたユイナを止める。
口を出すべきじゃない。
「私の、気持ちですら、ハルの邪魔に、なる……」
様子が、変わった。
ハルカも、それを察したようだ。
「私の、この気持ちは、邪魔で、間違っているんだな…!?」
ハルカは、オルセリアを呼ぶ。
だが、呼ぶだけで、なにも、言えない。
オルセリアは、眼帯をとって、地面に叩きつけた。
「セリアっ！」
走り出した、オルセリア。
だが、沼に足を取られ、転んでしまう。
ハルカは、駆け寄ろうとしたが……
「来るな！」
オルセリアが、拒んだ。
ハルカは、足を止める。
「私は、大丈夫だから……、」
オルセリアは、よろよろと立ち上がり、
ゆっくりとした足取りで、1人、スイの塔へと、向かっていった。
「ユイナ、ハルと居ろ。」
そう、言い残し、あたしは、オルセリアを追った。

◇◆◇◆◇

「1人でいいって言ったはずだ、ミュスナ」
とぼとぼと歩くオルセリア。
後ろを少し離れて、ついていくあたしに言った。
「たまたま行き先が同じなんだよ」
まあ、事実、そうだ。
オルセリアは、ふん、と鼻を鳴らす。
「勝手にしろ」
あたしは、小さな背中を守りながら、スイの塔を目指した。

◇◆◇◆◇

「姉さんたちは、もう入っていったみたいですね」
ようやく、たどり着いたスイの塔。
道は、実際のそれより、長かった気がするなぁ。
「そのようですね」
ハルカさんは、短く答えて、スイの塔の扉をあけた。
その手には、オルセリアさんの、眼帯。
中には、怪物の死骸が、たくさん転がっていた。
姉さん、またずいぶん、暴れたなぁ。
「全部、急所を力任せに切り裂いている
いい腕ですね、お姉さん」
死体を見ながら、ハルカさんが言う。
どれも、一撃だったみたい。
「おかげで、楽できますね。
ゆっくり、登りましょう」
わたしは、姉さんが切り開いてくれた道を登りながら、
ハルカさんと話した。

◇◆◇◆◇

小柄な、人型の怪物。手には、刺叉のような武器を持っている。
突き出されたそれを、かわし、槍を突き出す。
胸を刺されて、なお抵抗する、ソイツを、力任せに持ち上げ、壁に叩きつけた。
「ら、乱暴に戦うんだな……」
槍についた怪物の血を払うあたしをみて、びくびくしたオルセリアが言った。
「おかげで、槍は、すぐ壊れるけどな
ちなみに、こいつ、なんて名だ？」
壁にべっとり血をつけ、息絶えた、それを指さした。
「確か……あおたけ童子だったか」
「ふーん、食えんのかな？」
「あまり食おうとは思えない形だぞ……」
なんて軽口を叩きながら、階段を上がる。
もうだいぶ、高いところまできた。
階段を登りきる。のぼってすぐ、橋が見える。そこを超えた先に、また階段があった。
次で最上階だろう。
「……橋の上に何かいるな。」
いる。というより、ある。だな
でも、動いてるそれは、いる。という表現であっているだろう。
「よろいのきし、だな」
「ちゃんと名前つけてやれよ」
見たまんま、あたしより、少し大きめの、動く鎧の怪物だ。
「私がつけたんじゃない。私がつけるとするなら……
リビングアーマーとか？」
「ん、悪くないな」
だが、覚えやすさでなら、よろいのきし、のほうが、利がある。
「まあ名前なんてどうでもいいか。」
よろいのきし、は、あたしに拳を向ける。

あたしは、槍を構えた。
「どうせすぐ、鉄クズになるんだしな」
跳ぶように、走る。
カムシカをみて、思いついた体術だ、普通に走るより速い。
その勢いのまま、槍を突き出す。
胸を突くが、思った通り、鉄の塊を小突いたようなものだ。
「かってぇな……、こういうヤツは……!」
でたらめに振り回す鎧の腕を跳んで避け、その、振り回す腕の関節へと、槍を突き立てる。
「細かいところから徐々に、な」
やはり、そこは、少し脆い。槍は、突き刺さった。
刺さった槍を強引に、切り上げ、腕を破壊する。
が、同時に槍を砕けてしまう。
「あぁ!・もう!・脆いな!」
鉄の棒と化した槍を捨て、再び近づく。
欠けた腕のほうから接近、背後をとる。
振り返る、よろいのきし、今度は、その左に回り込む。
左へ逃げるあたしを、よろいのきし、は、拳で攻撃する
あたしは、股下をくぐって、かわし、その拳は、橋の手すりをくだいた。
背中をとった。それに思い切り、体当たりをする。
「さよーなら♪」
よろいのきし、は、6階から、1階まで、墜落していった。
「最初から、こーすれば良かったな、槍もったいなかったー」
「普通、あそこで詰みだと思うのだが……」
スイの塔を、ここまで、ほぼ1人で攻略してしまった。
最上階に、きっと大物が待ち受けているだろうが……
「ま、行けるだろ」
この頃のあたしは、なかなか、楽観的だった。

第19話　でも愛してる

天ツ羽の間、フウラの話によると、ここに目的の衣、
風の衣があるらしいが、
あたしたちを迎えたのは、立派な祭壇では、なかった。
桃色の、ファンシーな部屋だった。
「……なんだここは？
雰囲気が一変したな……」
きっと、あたしと同じく仰々しい、エルトナ風の祭壇を想像していたのだろう。
しかき、出迎えたのは、年頃の女の子よろしく、ピンクピンクしたお部屋だった。
「いい趣味だな、目が痛くなる」
部屋の中央に置いてあるテーブルも、部屋の隅に、等間隔に置いてあるツボも、かなり高価そうなものばかり。
奥に佇むベッドは、まさに、「お姫様のそれ」だ。
「あーいうベッドに寝れば、あたしもお姫様だな」
「牛は、藁で寝るがいい」
聞き捨てならないことを言うオルセリアを、
「あぁん？」と威嚇するが、すっかり慣れられたようだ。
オルセリアは、ベッドに近づき、勢いよく飛び込んだ。
「見ろ！ふわふわだぞ！これ欲しいな！」
「いかにも頭の悪そうな感じが、よく似合ってるじゃないか」
ベッドで飛び跳ねるオルセリアを、苦笑しながら、見るしかし大きなベッドだ。
「でけーベッドだなー。オルセリアが６人くらい寝れるだろう」
どんな行為に及んだら、こんなスペースが、必要になるんだろうなと、軽く、そんな想像をしてみたところで……
「み、ミュスナ！」
オルセリアが叫ぶ。
あたしも、背後に気配、そして、強烈な怪物のニオイを感じた。

振り向きながら、振り下ろされた、それを躱す。
振り下ろされたのは、巨大で、強大な、腕。
「……この部屋の主か。」
竜の腕だった。
かなりメタボリックな体型の竜が、あたしを襲った。
目は鋭いが、つぶら。首には桃色のリボン。
ぽこんっ、と出たお腹は、何だか愛らしい。
黄色い体色の、中量くらいの竜だ。
「おい、オレサマがトイレ行ってる間に、勝手にお邪魔してるお前らは、誰だよ」
しゃ、喋っただと……？
しかも、無駄にいい声で！
……いや、焦るな。
こういう時は、先手必勝だ。
「……郵便局員だ！」
床を、蹴る。
飛び上がりながら、拳を振りかぶり……
竜の腹に、思い切り、殴りつける！
不意討ちは、完全に決まった。……が
「……なにも頼んでないぞ？」
驚くことに、あたしの拳は、ヤツの腹に取り込まれていた。
脂肪に包まれていた、という表現が正しいだろう
「ぐ……っ」
まずい、腕を引き抜こうとするが、抜けない。
ずむむむ……とか気持ち悪い音がなって、あたしの腕を腹の中へと引き込む。
「ヒトにしては、いいパンチだが……」
竜は、大きく息を吸い……、
風船のように、腹を一気に膨らませた！
それだけで、あたしの身体は、吹き飛ばされた…！
「そんなんじゃ、届かないな。クーリングオフだぜ、

郵便局員さん」
オルセリアのいる、ベッドへと、叩きつけられる。
それが、幸いだった。
「なんだよ……！あの腹……！」
衝撃を包み込むほど、柔らかいと思いきゃ、膨らんだ瞬間、恐ろしく硬かった。
勢いが足りないか……、拳がダメなら……
「あたしの十八番は、蹴りだッ！」
また、飛び上がりながら、今度は、ヤツの横腹に、蹴りを入れた。
「ミュスナ！あいつに物理攻撃は……！」
オルセリアの忠告は、1歩遅い。
もう、あたしの脚は、ヤツの腹に取り込まれ、抜けなくなっていた。
「凶暴な女だぜ」
あたしの全力の蹴りを、受けておきながら、
悠々と、深いため息をついてやがった。
……そうだ、このまま、蹴り抜けば…！
再び力を入れた脚を、ヤツの腕が、掴んだ。
「やれやれだぜ」
あたしを持ち上げ……
「おいおいおい…!?」
叩きつける気か、あわてて受け身を取ろうと、体勢を、整えた。
ヤツは、床に、あたしを叩きつけた。
背中に、強い衝撃を感じ、腹の中の団子が、逆走しそうになるが、なんとか受け身に成功。
それに、大したダメージじゃない。あたしは、すぐに立ち上がれた。
「……はぁ。ちょっとタンマな」
また、ため息ひとつ、ついてから、あたしを、指をビシッと指してから、中央にあるテーブルを片付けた。
いちいち癪に障るヤローだ。
「よし、来な。お前、名前は？」
手を打ち鳴らす竜。

「ランガーオのミュスナだ」
シンプルに、出身と名を教える。
「オレサマは、プスゴン
あるお方の命令で、ここの、『かぜのころも』?を、
守ってやってる」
プスゴンは、両手を広げて、それは、自分の偉大さを示すようだ。
「ここには、数え切れないほどのエルフ共が、その衣を取りに来てな?
ヤツら、どーしてると思うよ?」
……生きてるはずがないだろう。
「丁重におもてなしして、お帰りいただいたんだろ?」
プスゴンは、ニヤリと、笑った。
「おもてなし、ってとこは、合ってるぜ。
例えば、こういう風にな」
プスゴンは、指をパチンと鳴らす。
天井から、イチゴの置物が、4個、振ってくる。
「……? なんだこれは……?」
傍観していた、オルセリアのとこにもだ。
近くに落ちてきた、イチゴの置物を、まじまじと、見ている。
あたしの鼻は、そこで、ある物を嗅ぎ付けた。
それは、大量の、火薬。
「オルセリア!それを離せ!」
あれは、爆弾だ。
あたしは、ベッドに飛び乗り、イチゴの爆弾を、蹴りつけた。
飛び乗ったときには、すでに、着火されていた。
蹴ったが、飛距離が、近い。
「……クソッタレが……!」
オルセリアに覆いかぶさる。
背中で、爆弾が、爆発した。
爆発は、近かったが、鎧のおかげで、軽傷だ。
「ミュスナ…、しっかりしろ……!」
オルセリアが、あたしの下で、心配そうに、声をかける

あたしは、黙れ、と伝える。
「しーっ…」
あたしは、そんなオルセリアに、ヘタクソなウィンクをひとつ。
唇に、人差し指を当てる。
「……今ので、くたばったか
まァ、冥土の土産に、教えてやるよ」
すっかり油断したヤツが、無防備に、近づいてくる。
「おもてなし、されたエルフのお客さんは、今、ここにいる。」
ぽんぽん、と。腹を叩く音だろう。
つまり……、食ったのか。
「オーガを食うのは初めてだけどな……
まァ、仲良くやれよ？」
ヤツの影が、あたしを、覆う。
……今だ…！
「テメーが、あの世でなッ!!」
叫びながら、立ち上がり……
思い切り脚を、蹴りあげる！
「あぁあぁぁあぁあぁあぁッッッ!!」
脚が長いというのは、とにかく得で、素晴らしい。
あたしの蹴りは、見事、ヤツの目を抉った。
「て、てめえ……！てめえ……!!
オレサマの左目を……！」
プスゴンは、目を抑えながら、ゆっくりと、後退した。
そこは、脂肪は、ないんだな。当たり前か。
脚の長さもあるが、ベッドがデカイおかげで、大ダメージを与えられた。
「その立派な蓄えが出来るまで、何匹のエルフを食ったんだ？」
ベッドを降りながら、プスゴンの腹を指さした。
「覚えてるわけねぇだろ!!」
憎悪を乗せた声で、続けた。
「お前らは、今まで食ったパンの枚数を覚えてんのか…!?」

食人ならではの理屈だ。
不思議と聞き覚えが……、名セリフなのかもな。
「そうか」
格闘家のように、フットワークを取る。
槍があれば、もう少しうまく戦えたと思うが、仕方ない
「お前は、ここで殺す」
プスゴンは、首のリボンをほどき、左目に、眼帯のように、巻き付ける。
「死ぬのはお前だァ……！」
ヤツを闘志が、その身に、満ちる。
先ほどまで、本気ではなかったようだ
比べ物にならないくらい、巨人な気が、あたしの脚をすくませた。
だが……
「面白れぇ、やってみろよ……！」
面白いと思ってしまうのは、オーガの本能だろう。

◇◆◇◆◇

「やっと、着きましたね……」
「けっこう、迷ってしまいましたね……」
1方、わたしたちは、ようやく、最上階に到達できた。
姉さんは、すぐに来れたようだ。
「ミュスナさんは、迷わず、ここまで来れたのでしょうか？」
「たぶん、最上階の強い怪物の気配を追ったんだと……」
ニオイを追ったり、何かをクンクンしてる姿は、まるでワンちゃんみたい。
「まるで、狼みたいですね」
「あ、そんな感じですね！気高くて、孤高って感じで！それで、気難しくて、ちょっと非情で！」
我ながら褒めてないなぁ、でも、まさに狼って感じ。
頑な心で、迷いがない。そして、

「でも、狼は、群れを大切にする優しい生き物ですよ」
そう、決して、仲間を見捨てない。
銀色の、狼さん。
早く姉さんに会いたいな。
そう、思った、その時、天ツ羽の間の扉が、開かれた。
そうして、飛び出したきたのは、息を切らした、オルセリアさん。
「ど、どうしたんですか、オルセリアさん！」
オルセリアさんは、わたしたちを見ると、安堵したように、へたりこんで……
「た、助けて！ミュスナが……!!」
一瞬、気まずい顔をした、ハルカさんも、表情を変えた
わたしは、何かを考える前に、天ツ羽の間に、飛び込んだ。
すると……
竜の尻尾をお腹に叩きつけられ、吹き飛ばされる姉さんが、いた。
「姉さん……!!」
わたしがいるほうと、反対側に、吹き飛ばされてしまいかけ寄れない。
わたしは、姉さんと、竜の間に、指を向けた。
「イオラ!!」
姉さんに追撃しようときた竜は、閃光を、躱して、距離をとる。
「ヒャダルコ!!」
ハルカさんの声だ。竜のまわりに、氷が降り注ぐ。
「ちくしょう！新手か……！」
竜は、そう叫んで……叫んだ？竜が!?
「まァ、いい。お前らを殺してから、あの銀髪をなぶり殺しに……」
「姉さんをよくも……!!」
傷だらけで、動けていない姉さんを見たら、怒りがわいてくる。
「イオラ！イオラ!!」
連発する。
竜は、苦しそうに呻くが、倒れてくれない。
「この、地味女が……！お前から殺してやろうか……!?」

イオラを浴びながら、近づいてくる。
ハルカさんも、ヒャドで、応戦するけど、竜は足を止めない。
「なんてタフなんだ……！」
ハルカさんが言う。
竜の影が、わたしたちを、覆った。
「地味な女と、羽虫が2匹……ひねり潰してやる！」
まずい、やられる……！
その、瞬間、その竜の頭に、何かが、当たる。
円盤状の、なにか。
投げたのは、姉さん。
「悪い、趣味が悪すぎて、フリスビーかと思っちまった」
高価なツボの、蓋。
竜は、怒りを、つのらせた。
「オレサマのコレクションを……殺すッ!!」
竜は、姉さんへと、向かっていった。

◇◆◇◆◇

やばいやばいやばい死ぬ死ぬ死ぬ
あたしの頭の中は、そんな感じだ。
だが、それでも、ユイナを傷つけさせるわけには、行かない。
「殺すッ!!」
うまく、挑発にのったようだ。
怒りにのった、大振りな攻撃を、躱す。
そして左側へ、回る。
「こいつ、死角になってる左側に!?
戦い慣れてやがる！」
ツボを、振り回す！
デカイツボだ。重いが、プスゴンの顔を殴るつけた。
ツボが砕け、プスゴンがよろめく。
その砕けたツボの先端を、ヤツの腹に突き立てる！

「ぐぁっ……！
くそっ、オレサマのウルトラハイセンスのインテリアで、ぶっ刺しやがって！」
言いながら、ヤツは、あたしを渾身のチカラで殴りつけた。
あたしは、また、すごい、ぶっ飛ばされたが、ユイナの近くへ、幸いにも、行けた。
「ゆ、ユイナ、ごめん死にそう、回復してくれ…」
「ご、ごめんなさい、それがさっきのイオラで……」
マジかよっ
どうすんだ、あたし死んじゃうよ？
「ごめんなさい……ごめんなさい……
許せなくて……」
な、泣きそう……、怒れないよ、こんなの
あたし、死にそうだけど。
「……あたしのために、怒ったんだろ？ありがとな」
ユイナは、なんとか泣かずにすんだが、事態は好転したりしない。
「私を逃がすために、ミュスナは一人で……」
オルセリア、泣き出しそうだ。
それどころじゃないだろう……
「…セリア、考えがある。」
その空気を一変させたのは、ハルカだ。
オルセリアは、少し、ハルカと話すのに動揺したが、話を聞くようだ。
「キミの最大火力で、あの竜を消し炭にするんだ」
未知数の、オルセリアのチカラ。
この戦局を変えるには、これしかない。
「む、無理だ！お前達も吹っ飛んでしまうかも……」
「僕が横から調整する！」
僕が、調整。その言葉に、オルセリアは、表情を喜ばせた。
……が。
「だ、ダメだ！1人で出来ないと、ダメなんだ！」

「セリア！そんな場合では……！」
ハルカは、ぐっ、と言葉を抑えた。
そう、それでいい。
「僕が……悪かった。
あんなこと、言うべきじゃなかった。」
オルセリアに、かける言葉は、それだけで充分だ。
あたしは、立ち上がる。
「姉さん、なにを……!?」
ユイナが、あわてて、フラつくあたしを支えた。
「時間を稼ぐ」
「そんな身体で、だめです！」
そんなに必要ない。少しでいい。
少しで…、いいが……
「大切な時間だ」
その意図は、ユイナにだって、分かってる。
苦渋、と言った感じで、引き下がってくれた。
「大丈夫、死にはしない。」
水竜のときのようなあんな無茶はしない。
だが。
「あたしの全力で、お前たちを守る。」
こちらを睨む、プスゴンを、睨み据える。
「オレサマの必殺技で、全員、一掃してやるぜェ！」
必殺技……！あたしは、身構える。
プスゴンは、床を蹴り、その体型から信じられないくらい、飛んだ。
「フライング・ボディプレスだぜ!!!」
恐ろしく、そのまま、
だが、恐ろしい、落下速度。
あたしも、ユイナたちも、よけられない。
ならば……
「はぁぁぁぁぁッ!!!!!」
迎え撃つだけだ…ッ!!

あたしは、全身全霊を、右腕に、集中させる。
ヤツの体重全てを、右腕で受け止め、吹き飛ばす…ッ!!!!
「潰れろォォォ!!!」
濃くなる影、落ちてくる巨体。
全神経を集中させ、拳を、ヤツの左頬に打ち込んだ!!
「ぐぅ……!」
……腕が、砕けて落ちそうだ。
……が、それは作戦の成功を意味する!
このまま!ヤツの左目に、親指をかけて!
「お……らァァァッ!!!」
殴り抜けるッ!!!
腕のチカラ以上の、衝撃を生み出した。
それは、拳の絶技、『正拳爆撃』。
そう、後、名付ける。
「な……にぃ?!!」
プスゴンの巨体は、空中で軌道を逸らされ、あたしたちの、すぐ真横に落下した。
「ね、姉さん……、腕が……」
くそ、腕が折れた。
利き腕だぞ、クソッタレめ
……この、クソッタレが!!!
怒りのままに、倒れるプスゴンを蹴りつける!
眉間を蹴られ、白目を剥いたようだ。
それを確認してから、振り返る。
「セリア、僕を信じろ」
「けど……!」
まだやってた。
あたしは、2人に言う。
「この腕じゃ、こいつを倒せない」
ぷらん、とした腕を、2人に見せて、
頼んだ。

「おまえら2人で、あたしたちを、助けてくれ」
これが、効いた。
2人は、こくん、と頷く。
「セリア、すまなかった。
キミの想い、…その」
オルセリアが、かぁっ、と赤くなる。
「……嬉しかった。
僕も、伝えたいことがある」
オルセリアの鼓動が、ハルカの鼓動が、
そしてユイナの……なんでお前が一番ドキドキしてんだよ。
聞こえた。
「それは、終わってからだ。」
手を差しのべるハルカ。
それを取るオルセリア。
「うん！」
オルセリアは、全魔力を開放した。
部屋が熱気に包まれ、巨大な火球が現れる。
「セリア、もっとだ！もっと！もっと来い！
僕を信じろ！」
ハルカが言うと、さらに、火球が大きくなる。
ハルカは、オルセリアに触れ、魔力を調整している。
その手は、少し火傷している。
「信じてる…！」
発火しそうなほど、ハルカの手が赤く光る。
苦痛に顔を歪ませるが、彼は耐え切った。
オルセリアの身体は、宙に浮いた！
「なんていう魔力……これは、『メラゾーマ』…？」
巨大な火球を見上げたユイナが言う。
「いや……それ以上だ……」
メラゾーマより、上って確か……

「メラガイアー……？」
ユイナが、呪文名を、告げた。
オルセリアは、それを叫んだ。
「サウザント・ノヴァーーーーッ!!!!」
メラガイアーじゃないんだ…
が、それは、名前負けしない威力だ。
火球は、倒れ伏すプスゴンを襲い……
巨大な火焔の渦となった。
「あぁぁぁぁぁぁぁ!!!」
プスゴンが、起き上がる。
火にまかれながら、走り回る。
「あぢぃ！あぢぃぃぃ!!」
窓へと、乗り出す。
「ちくしょう！ちくしょー!!!」
そのまま、湿原へと、落ちていった。
焦げた部屋、窓枠を見て、
あたしは、中指を立てた。
「その火で痩せるといいな、メタボ野郎」
言い放ち、一気にフラついた。
「姉さん…！」ユイナが支えてくれる
そして、安心からか、意識が飛んだ。
勝つには、勝った。
なんとか、死なないで。

第２０話　風乗りと旅立ち

アズランに運び込まれるように戻ってきて、翌日。
あたしは、経過を看る必要があるということで、すぐには治してもらえず、今は腕を吊っている。
ので、オルセリア、ユイナと、休みがてら、アズランに滞在することになった。
「……あーもう」
約束通り、オルセリアの奢りで、酒場で舌鼓を打っているのだが、利き腕をケガしてるせいで、うまく運べない
「姉さん～、遠慮しないでくださいよ～」
左手で、箸とやらが、うまく使えず、悪戦苦闘する、
あたしを、ユイナが見兼ねて言った。
「やだよ、介護じゃないんだから」
妹に食べさせてもらうなど言語道断である。
「ならそこで、閉店まで苦戦しているがいい
私の奢りを無駄にするがいい」
オルセリアが、なぜか、勝ち誇った顔で笑う。
頭にきた、あたしは、ムキになる。
「……っ！　……あっ…！」
震える手で、魚の切り身を掴んだものの、こぼしてしまう。
我ながら情けない声が出た。
「そんな声が出せるのかー！愉快愉快
あー魚うまい！魚うまいなぁ!?」
こいつ……図に乗りやがって……
左手でアイアンクローしてやりたいが、テーブル越しじゃ逃げられてしまう。
「ほら、姉さん、あーん♪」
横を見やると、ユイナが自分の箸で、魚を切り身を、あたしに差し出していた。
「……んー」

逡巡する。
いい加減、腹減ったし、食べたいが、これでは、オルセリアに屈したような……
「もうっ」
ユイナは、ぐいっ、と押し付けてくる。
意外と気が短いヤツだな。
「あー」
根負けする。
ユイナは、そこに、ほいっ、と、魚を入れてくれた。
「美味しいですか？」
「んまい」
さりげに骨をしっかり取ってくれている。
「米くれ、米」
「はいはい」
1度されれば、あとは順応するだけだ。
あたしは、大口をあける。
「……エルトナのメシもうまいなー」
「ですよね！あっさりしてて、いいです♪」
ユイナは、好き嫌いがないのか、と言うほど、選り好みせず、よく食べる。
「ふん、仲がいいことだ。お前ら、もう結婚しろ」
オルセリアが、呆れたように言った。
その目には、しっかりと、あの眼帯がついている。
「確かに……男にやるくらいなら、あたしが……」
「不束者ですが……」
ユイナが、深々と頭を下げる。
けっこー、洒落が通じるんだな。
「バカ言ってないで、もっとメシ～」
「もう、大きい赤ちゃんですね～」
ユイナのヤツ、完全に勝ち誇ってやがる。
ユイナのくせに。

ユイナは魚を切り身をとり、あたしに、差し出し……
口を開けさせてから、手元に引いて、自分で食べてしまう。
「ん」
「ふふふ、おいしーです♪」
完全に調子に乗ってやがる。ユイナのくせに。
あたしは、左手で、ユイナの両頬を掴む。
「悪い口だな、このやろー」
「ほ、ほぇぇ～…！」
タコみたいな口にされるユイナ。なにか言ってるが、タコ口じゃ、ちゃんと言えないようだ。
「う～、怪我人は、おとなしくしてください！」
「じゃあ。ちゃんと看病してくれよ」
アイアンクローから逃れたユイナが、抗議の声をあげる
「だって、こうじゃないと、わたしが上になれないんですもん～」
唇を尖らせるユイナ。
「ほう？誰が上だって??」
再び、アイアンクローをちらつかせる。
ユイナは、ささっ、と後ずさった。
躾は、しっかりしないとな。
「……ハルカ、どこ行ったんだろうな」
上下関係を教え込む、あたしたちを遮ったのは、オルセリアだ。
ハルカのヤツは、キーエンブレムを受け取るなり、さっさと、行ってしまった。
「もう、行ってしまったのだろうか……」
挨拶もなしにか。それは、ないと思うが……
「……大丈夫ですよ。」
不安にかられるオルセリアに、ユイナが優しく語りかける。
「彼は、必ず戻ってきます。」
不思議な説得力とは、こういうものを言うのだろう。
「……そう、だな。」
オルセリアも、なんとなくだが、落ち着いた。

そのとき、あたしの耳が、足音を捉えた。
「噂をすれば、……ってヤツだな。」
この足音は、ハルカのモノだ。
足音は、酒場に入ってきて、オルセリアの表情が、輝いた。
「おまたせしました。手続きに、意外と手こずりまして……」
役所に行ってたらしい。どこの世界でも、たらい回しにするんだよな、あそこは。
「手続き？」
オルセリアに聞かれ、ハルカは、それを、懐から、取り出した。
「これですよ。」
取り出したのは金の豪華な手帳、大陸鉄道パスだ。
それを見た、オルセリアの表情が、曇った。
「ん、そうか…」
確かに、ひどく悲しそうだが、
前の時のような、冷たさは、感じない。
「ハルカさん……っ！」
ユイナは、なにか、後押しするように、勇気づけるように、ハルカを見ていた。
その表情は、雄弁に、がんばれ！と言っている。
「……」
オルセリアを見やる。
震えながらも、すべてを受け入れようとしている。
これは、見守るしか、ない。
「……ハル」
最初に沈黙を破ったのは、オルセリアだった。
今にも泣き出しそうな顔で、必死に笑っていた。
「今まで、ありがとうな」
絞り出したか、のような、か細い……が、チカラ強い声。
「私には、これがある。
……もう…、大丈夫だ。」
そう言って、オルセリアは、自分の眼帯に触れた。

再び、訪れた、長い長い、沈黙。
呼吸をする音すら、申し訳なく思えてくる、そんな空間
それを打ち破ったのは、今度は、ハルカだ。
「……なにを言っているんだ？」
そう言って、彼は……
「これは、キミの分だぞ」
大陸鉄道パスを、オルセリアへ向かって、放り投げた。
オルセリアは、反射的に受け取り……
「……え？」
困惑してるようだった。
ハルカは、オルセリアに確信を与えてやる。
「キミも、エルトナを出るんだ。
……僕と一緒にな」
え？え？と、何度もオルセリアは、繰り返した。
ユイナも、あたしも、苦笑するばかりだ。
「わ、私か……!?」
パスを握りしめ、信じられない……！といった表情の、オルセリア。
「他に誰がいるんだ…」
まだ信じられていないオルセリアに、呆れるハルカ。
そんなハルカに、オルセリアは、食い下がった。
「私、弱いぞ……?!」
「承知の上だ」
「役に立たないぞ……!?」
「だろうな。」
だろうな、という即答に、オルセリアは、眉根を寄せた
不機嫌そうに、オルセリアは、訪ねた。
「なんで……、私なんかを連れていくんだ…？」
一瞬、沈黙。
「……決まってるだろう。」
目を、わずかに、そらして、続けた。
「……生徒を途中で放り出すのは僕の主義に反する

それだけだ。」
一瞬、かすかに動いた唇とは、違う言葉だ。
そう、俗に言う……
「仕方ないな、先生がそう言うなら、ついていくしか、ないだろう……」
オルセリアも、幸せそうに、胸を張った。
俗に言う、ツンデレというやつだ。
「全く！身勝手なヤツめ！」
「……キミもだ」
最初から、素直に言えばいいものを。
わざわざ、回りくどいことをして。
「お似合いじゃないか」
あたしは、呆れ気味に、茶を傾ける。
ユイナは、その隣で静かに微笑んでいる。
「お似合いじゃない！」
同時に言って、まるで曲芸士だ。
これは、笑うしかないな。

◇◆◇◆◇

あれから、からかわれ続けた２人。
参ったオルセリアが、突然、話を変えるように、温泉に行きたいと言い出した。
「あ！温泉入りたかったんですよー！」
ユイナが、即、乗った。
「この腕で入れるのか？」
「まあ、大丈夫じゃないですか？姉さんだし」
おいコラ
「背中流してあげますよ～♪」
あー、それが目的か。
「もうここを立つのでしょう？
思い出になりますよ」

ハルカも、お勧めしてくれる。
確かに、温泉とやらがある場所は、そうないだろうな。
「ねーさーんー」
「わかった、わかったよ」
あたしたちは、アズランの宿へ向かう。

◇◆◇◆◇

「あ〜、しみるな〜」
全身に染み渡る、湯！
古傷も癒してくれるような…、自然と身体も軽くなる！
「姉さん、右腕、つけないようにしてくださいね？」
「やー、これすぐ腕、治るんじゃないか？」
だめですってば、と心配症な看護師みたいなユイナ。
「悪化するような繊細な作りしてないだろうミュスナは」
少なめの湯に座り、胸までつかる、オルセリア。
あたしたちの、ガタイでは、まるで足湯だ。
「私たちは骨格に至るまで、繊細だからな！
毎日、温泉で癒さないと……」
「胸元も繊細で、謙虚だな」
オルセリアは、胸を腕で隠した。
「大きければいいってものじゃない……！」
「まあなー肩こるし」
「ですよね〜」
オーガは、生まれつきスタイルがいい。
あたしは、背もでかいが、ほかも例外ではない。
それに比べてユイナは、高バランスというか……
でも少し……
「ユイナ太ったか？」
腹が出てるような気がする。
「ひゃっ！」

ほら、つまめた。
「あたしの分まで食うからだぞー」
「姉さんがくれるって言うから……」
ぷにぷにと、腹を揉むあたしの手から、よたよたと逃れる。
「オルセリアは、腹もつるんってしてるんな」
「腹も！ってなんだ！腹も！って!!」
公共の場で声を張り上げるオルセリア。
ユイナが、くすくす、と笑う。
「まな板って感じですよね♪白いし！」
正直ゆえに、たまにキツイよな、こいつ……
まな板……そう言われたオルセリアが、一瞬固まり……
「黙れ！デブ！」
オルセリアが怒った。
「デブではないはずです！」
キャーキャーケンカをはじめた。
しばらく見てたら、ユイナが、こちらを振り返り……
「姉さんー、背中流しますよ～」
「お、デブ訂正してもらったか？」
ユイナが、じろり、と睨む。
あたしは、苦笑しながら、湯をでる。
木の腰掛けに、腰を落とす。
「髪から洗いますねー」
ユイナは、髪を洗ってくれる。
「やっぱり銀ってキレイ…」
泡立てながら、感慨深そうに言う。
「そーか？黒のがいいぞ」
汚れは目立つし、人目に付くし。
まあ地味さを気にしてるからなユイナは。
「ずっと、見てましたからね
キラキラと、流れる、銀の髪を。」
後ろをついてくる、ユイナ。

その目を引くのは、やはり、この銀髪か。
「そうか」
長いとは思うが、切ろうとは思わない。
ランガーオのミュスナが、大事にした髪だろうから。
でも、黒髪も、憧れるな
「でも、黒も、あたしは、好きだぞ」
お世辞や、フォローなんかじゃなく、そう思う。
「何者にも、染まらない強い色だからな」
自分を変えないのは、難しいことだ。
「わたしも、黒、好きですよ」
安心した。
「なら良い。」
自分が嫌いということほど、悲しいことはそうない。
ユイナが、桶で、慎重に、泡を流してくれる。
先程より輝く銀の髪が、誇らしい。
「次、身体です～」
「えー、くすぐったいからイヤだ」
あたしの抗議をよそに、ユイナは、タオルをしぼる。
「できるだけ強くしますから！」
「あと、早くしてな」
妹にされるがままなんて屈辱的すぎる。
「お痒いとこは、ございませんか～？」
「◎X※かな」
「えっ…」
「うそうそ♪」
ユイナの、労っているのが分かる優しい手つきに、身を任す。
ユイナは、あたしのNGワードを文字通り流して、続けた。
「あ、このお腹のキズ…」
「ん？」
脇腹に、痕がある。
細かいのも、ちょくちょく多い。

「カッコイイだろ？」
ユイナは、また、謝るんだろう、と思った。
けど、違った。
「はい♪とってもとっても、カッコイイですっ」
なかなか、ユニークな娘だったんだな。
「でも、あまり増やさないで欲しいです…っ」
そして、優しい子だ。
「気をつけるさ」
ユイナは、にんまり、と、笑った。
「よろしい♪」
ちょうど、話が終わったところに、オルセリアが、声をかける。
「おーいー、のぼせそうだー」
白い肌が、すっかり薄ピンクになっている。
「おーおー、まるで桜餅だな」
「かわいいー♪」
ぐてっ、と、している、桜餅を、起こす。
「餅って言うな……」
「はいはい、もう出ましょう」
ユイナの手を借り、オルセリアは、立ち上がり、
あたしたちは、温泉を出た。

◇◆◇◆◇

宿から出ると、既にハルカが待っていた。
「いい湯でしたか？」
待たされただろうに、嫌な顔1つせず、聞いてくれた。
「おかげさまで。もう腕が動かせそうだ。」
「また来たいですね～」
あたしたちの返事に、満足した様子のハルカ。
そうして、ハルカは、オルセリアを呼んだ。
「では、そろそろ行きますね」

オルセリアが駆け寄り、ハルカの隣に立つ。
最初に会ったときと、逆の立ち位置だな。
「あぁ、じゃあな。」
別れは簡潔に限る。
すぐに、立ち去る。
「あ、姉さん……！もう行くんですかー？」
ユイナが、なんか言ってるが、無視。
「じゃあ！またですー！」
ユイナの足音が、近づいてくる。
「うむ！達者でな！」
オルセリアの声だ。
最後まで、ブレなかったなー。
「ミュスナー！」
別れを告げた、その口で、あたしを呼んだ。
あたしは、振り返り、
オルセリアは、何かを投げた。
左手で、それを取った。
それは……ここのキーエンブレムだった。
「……ありがとう！」
今までの、全てがつまってそうな、ありがとう。
あたしは、それに、親指を立てて、答えた。
あいつの精一杯の正直に、精一杯で、答えた。

◇◆◇◆◇

それから、ユイナと、２人の背中を見送った。
「行ってしまいましたね……」
寂しげな横顔。
今生の別れって、わけじゃないのに。
「ま、すぐに会えるだろ」
世界は広いようで、狭いもんだ。

そうとわかってても、この気持ちは、簡単には拭えないが。
「とても、お似合いな2人でしたね」
というより、めんどくさい2人だったけどな。
「……まあ、お似合いか」
お似合い、とか、愛してる、とか
あたしには、縁のない、言葉だなぁ
少し羨ましい……かな
「姉さんも、そう思ったりするんですね！」
「へ？」
突然、声を張り上げたユイナ。
なんのことか、分からず、変な声を出してしまう。
「羨ましいって！」
声に出してたのか……
「いや、別に男が欲しいってわけじゃ……」
「またまたー、姉さんったら、ませちゃってー♪」
年上だぞレディだぞ、ませたって何だ！
「それに周りに男なんて……」
言いかけて、1人、瞼に浮かぶ。
紅い服に、蒼い髪の、魔法戦士。
「アルベールさん？」
「なんでアイツの名前が出てくんだよッ!!」
つい、声を張り上げる。図星をつかれた気がして。
「姉さんって、どういう人が好みなんです？」
「え？そりゃあ、優しくて、誠実で、よく笑うヤツ…」
「それ、アルベールさんですよね……」
あわてて、付け足す。
「あたしより強いヤツ!!!!」
「そ、それは、難しいですね……っ」
ユイナは、そっから、ニヤニヤし始める。
「ふふーん、姉さんでも、そんな風になったりするんですねぇ」
「お前、あたしを何だと思ってんだよ」

珍しく興奮してしまい、顔を手で仰ぐ。
「手紙とか、書いてみます？」
「手紙ー？柄じゃないな」
「近況報告くらい、しましょうよ～
ほら、相手のも、気になりませんか？」
そりゃあ、まあ。それなりにな。
「んじゃ。てきとーに便箋買って……」
「写真撮りましょ！写真！それを絵葉書して……」
「やだよ！恥ずかしい！」
「一緒に写りますから!!」
こういうときは、なかなか強引。
結局、写真を撮られ、下手な文章を書かされ……
アルベールに発信させられたとさ……。

第21話　心霊探偵ユイナさん

お医者様の話によると、姉さんの腕は、もう魔法で回復させても、問題ないくらいまで回復したみたい。
「トロルより回復が早いとか言われたぞ」
トロルというと、巨大な太った怪人。
巨大に見合った怪力と、強靭な体力を誇るらしいけど…
「昔からですが、相変わらず人間離れしてますね～」
超人的な感覚といい、猟犬以上の嗅覚といい、怪物並みの代謝能力といい……
姉さんは、とにかく、すごい。
魔法は、一切使えないらしいけど！
「そーなの？まあ、なんでもいーから、早く治してよ」
と、姉さんは、包帯に包まれた右腕を、差し出してきた
「はーい」
わたしは、そこに、手をかざし、精神を集中する。
わたしの手は、淡い光を放ち、それは、姉さんの腕を照らした。
「ふむ……」
光が消えた後、姉さんは、拳を握ったり、腕を揉んだりして……
「完璧だな、ありがと」
治った腕で、頭を撫でてくれた。
「えへへ～」
昔から、こうしてもらうのが大好きだったっけ
こんなすごい姉さんのチカラになれて、嬉しい瞬間。
怪我は、してほしくないけれど……。
「さて、出立の前に、掲示板でも見ていこ」
「はぁい」
ここに滞在するための宿代は、けっこうバカにならなかった。
出立の前に、小銭を稼ぐことに。

◇◆◇◆◇

「んー、化け物退治とか、あればいいんだけど」
姉さんと並んで、掲示板を見る。
目につくのは、宿のスタッフ募集や、店のオススメ商品
など、
カムシカせんべい、の新しい味という見出しに心惹かれた！
「……くだらない掲示ばかりだなー」
「宿で働くのは、どうです？」
と、わたしの提案。
「時間かかりすぎるし、割が悪い。」
一蹴されてしまった。
姉さんは、悪びれる様子もなく、こう続ける。
「それに、あたしに、炊事、洗濯、清掃が出来ると思う？」
やれば出来ると思う……、けど、してる姿が想像出来ない。
結局、「う～ん…？」という曖昧な返事しか出来なかった。
「だろ？　……興味深いのは、これくらいだが……」
と、姉さんな、もっとも古ぼけた感じの掲示を指さした
貼り出されたまま、解決されず、けっこう経ってしまっているみたい。
「専門外っぽいんだよなー」
姉さんが指差す、その掲示を、見てみる。
内容は、わたしの興味を引く内容だった。
「呪い……悪霊……退治……
興味深いですね」
わたしの専門だ！
報酬も、なかなか良い！
「ユイナは、こういうの得意だったよな？
ちょっと本格的すぎるか？」
本格的すぎる、と、心配する姉さんに、少しムッ、とする。
わたしの知識は、確かに独学ですが、専門的です！
「これを解決して、わたしが、ただのオタクじゃないって、証明してみ

せますよ！」
わたしは、断じてオタクではない！
「んじゃあ、行ってみるか？
場所は、えーっと…」
指定の場所は、アズラン教会。
わたしたちは、そこへ向かった。

◇◆◇◆◇

教会に入ると、何だか、慌ただしい雰囲気だった。
司祭や、信徒が集まり、何かを囲んでいる。
姉さんは、聞きなれない彼らの言葉に、眉根を寄せる。
「……なんだうるさいな」
「経文ですね。悪霊には、あまり効果ありません。」
悪霊に対しての経文は、怪物に人を殺すな。罰が当たるぞ！と説教するようなものだ。
「あの、掲示を見たものですが…」
と、わたしは、一番近い、信徒の方に声をかけるけど…
「部外者は帰れ！」
一蹴されてしまう。すこし、怖気つく、わたし。
「レディに、そんな口を聞くな。」
姉さんが、ケンカ腰に、声を張り上げた人を睨む。
さりげなく、わたしの前に出て。
「どけ。」
そのまま、経文を唱える人を、無理に押しのけ、わたしをそこに放り入れた。
「う…」
信徒たちに、司祭の人に、睨まれ、かなり怖気つく。
けど、ここまできて引き下がるのも…
「掲示を見てくれた方ですか…？」
女性の声だ。

この季節に、なぜか厚着をしているのが、気になる。
「はい。物見遊山では、ありませんよ」
見学に来たのではない、と、言っておく。
「良かった…、ここに預けてもよくならなくて…
気休めになるかも。見ていただけませんか？」
と、その、女性は、わたしを招き入れた。
依頼主の意向に、周りは何も言えない。
「では、失礼して…」
わたしは、その信徒たちの中心、女性に近づく。
…と、強烈な冷気を感じた。
ここだけ、冬のようだ。
「彼が、取り憑かれているんですね？」
ベッドに寝かされたエルフの男性がいた。
女性は、頷く。
「夫です…」
それなら、なおさら、助けなきゃ。
わたしは、彼を、よく見る。
「…ところどころ、凍傷を起こしてる……
冷気の中心は、この人ですね。」
なるほど、と、わたしは、呟いた。
この案件に該当する知識は、一つある。
「ナイトゴーストですね。
深い悲しみで、宿主を憑き殺す、自殺者の悪霊です。」
わたしは、奥さんを見る。
「このままでは、旦那さんは、凍死してしまいます。」
「そんな……！どうすれば…！」
取り乱してしまいそうな奥さんに、わたしは、言い放った。
「安心してください。わたしに、任せてください。」
と、話が、まとまったところで…
司祭さんが、わたしを、怒鳴った。
「素人は、すっこんでいなさい！

何かあったら、どうするつもりですか！」
「それは、こちらも、同じことを言えます！」
下手な経文で、悪霊は、挑発されたと思い、怒っている
わたしは、彼を無視して、カバンをあさる。
「結果をみてから、素人かどうか、判断してください」
わたしが、取り出したのは、人形。
人の形であれば、なんでもいい。
「旦那さんのお名前は？」
「ハンスです」
人形の、お腹に、ハンスと、書き、ハンスさんの髪の毛を1本抜いて、それを人形に埋め込む。
それを、ハンスさんの隣に置いた、ら
「これで、ひとまず、安心です。」
思惑通り、ハンスさんの容態は、みるみる回復し……
代わりに人形は、凍りつき、砕けた。
「こ、これは……？」
「人形は、本来、災厄と呪いを引き受けるモノですから。供養が必要になりますが」
それは、あとで。
今は、まだ油断できる状況じゃない。
「それより今は、呪いの元凶を絶たなければ。
呪いの心当たりは、ありますか？」
理由なく、呪われる人は、いない。
奥さんは、あごに手を当てて、考えるけど、浮かばないみたい。
ハンスさんに聞いた方がいいか。そう、判断したとき、
「うぅ…」
ハンスさんが、うめいた。
目を覚ました…、わけじゃない。
うなされてるようだ。
「ハンスっ！」
「静かにっ！」

何かを言おうとしている。わたしは、耳を傾ける。
「か、カンナ……やめてくれ…、おまえは、もう…」
女の名前。これは、重要な手掛かりだ。
「カンナ、聞き覚えありますか？」
「え、ええ。確か、夫の幼なじみで…
もう、亡くなったはずです。」
なるほど、話が、見えてきた。
「カンナさんの死因は…自殺ですね？」
奥さんは、ためらいがちに、こくん、と頷いた。
「キリカ草原の…廃村の、古井戸で…」
「ご遺体は…？」
おそらく、そのまま…。
あとは、そこを、調べて…
「行きましょう、姉さん」
信徒たちをかきわけ、教会を出ようとする、と
司祭さんに、呼び止められた。
「待ちなさい！部外者が勝手に…！」
「一刻を争うんです！」
また、呪いがきたら、次は耐えられないかもしれない。一刻の猶予すら、なかった。
「だが……問題だ！」
もう！なんでこう、頭が堅いかなぁ！
そこで、痺れを切らしたのは、姉さんだ。
「うるせーなタコ。部外者じゃなきゃ、いいんだろ」
と、姉さんは、信徒たちを押し退け、教会の奥に、なにか、衣服を持って、戻ってきた。
姉さんの手には、白と赤の、着物。
俗に言う、巫女服。
「それは、我が教団の…！」
「あぁ！なにするんですか姉さん！」
司祭さんと、わたしの悲鳴が、響く。

姉さんは、わたしの服を強引に脱がした！
「みんないるのにぃ！」
「嫌なら早く着ろ。時間ないんだろ？」
と、差し出したのは、巫女服。
わたしの、着てた服は、姉さんの手の中。
仕方なく、わたしは、巫女服を着た。
「これで、部外者じゃないですね？行きましょう！」
わたしは、軽い準備を済ませ、すぐにアズランを出た。

◇◆◇◆◇

「悪霊退治ってのは、どーやるんだ？」
キリカ草原へ向かう途中、姉さんが聞いてきた。
公衆の面前で、裸にされた恨みは、まだ消えないけど、無下にはできない。
「怪物退治と同じです。武器で、撃退できます」
「成仏（物理）って、やつか」
少しコツが要りますが…、そのコツの一つが、これ。
さっき、町で用意した、袋を姉さんに見せる。
「なんだそれ？」
「これには、『銀の粉』が、詰まっています。」
銀には、あらゆる不浄、悪意を遠ざけるチカラを持つ、
この、世界で、もっとも清い鉱物。
「霊、と、言うと実体のない物理攻撃完全無効みたいなイメージありますが、それは間違いです」
「ほお？」
わたしは、人差し指を立てる。
「説明しましょう
霊の身体は、エクトプラズム…霊媒物質と言われる物質で構成されており…」
「え、エンコーズブズブ…？」

難聴にも、ほどがある！耳良いくせに、ふざけてますね!?
「エクトプラズム！
その多くは霧のような物質で、霊は、…意志を持った霧と思ってくれていいです。」
「霧を攻撃できるのか？」
そこで、これです。と、姉さんに例の袋を見せる。
「霧の…濃度の問題ですね
霊とて、攻撃するときには、霧の濃度をあげないと、危害を加えられません。」
「つまり、殴られる時に殴れ、と。」
それでもいけるけど、危険すぎです。
「銀は、その霧の濃度を引き上げるというか……
早い話、変身を解く、というか」
「まあ、攻撃可能にできるんか」
これを当てることができれば、物理攻撃で、撃退可能だ
「まずは、調べて、彼女をおびき出さないと……
姉さんの出番ですよ」
「殺す以外に、あたしの仕事があるんか？」
霊をおびき出す手順。
それを説明しましょうっ

◇◆◇◆◇

キリカ草原の廃村、その中心に、件の井戸は、あった。
「さて、と。じゃあ、調査をお願いします」
「お、おう。しかし、なんで夜なん…？」
村に入ってからというもの、姉さんの、元気がない。
まさか、怖いってこと、ないだろうけど。
「ナイトゴーストですから…」
「…まあ、そうか…。分かった、調べるよ」
と、渋々と言った感じで、姉さんは、井戸の周辺を調べた。

「…古い足跡が、いくつもあるな。
井戸の周りを、ずっと回っている。」
「自殺する前に、何度も逡巡したのでしょう」
「…みたいだな、あの家から、来たみたいだ」
と、姉さんは、廃墟を指さした。
その顔は、うへぇ、って感じ。
「…調べないとダメか？」
「思い出の品とかが必要ですから…」
がんばって♪としか、言えない。
まさか、本当に怖がってる…？
「はぁ…マジかよ…」
ブツブツ言いながら、廃墟の中へ。
姉さんが、足を踏み入れた、その時！
ガタン！と半開きだったドアが、外れて倒れた！
ひとりでに…
「……いまの風だよな？」
「いえ、警告のようですね、近くにいます」
「…怖くないん？」
「まあ…姉さんが怪物を恐れないのと同じと言いますか…」
じゃあ、お前が調査しろよ…、とブツブツ言いながら、姉さんは廃墟へと、進んだ。
ポルターガイストが起きる度に悲鳴が聞こえたけど、
がんばって！姉さん！
廃墟から、一際大きな物音、すぐに、姉さんが…
「ひぃやぁぁぁ！ユイナぁー！」
廃墟から、飛び出してきた。その手には、なにやら…、日記かな？
「どうしました？」
「こ、これ取ったら棚が倒れて……机の引き出しが、ガタンガタン！って！」
「なるほど、貸してみてください」
日記のようだ。タイトルは……

『カンナの夢☆日記』
「……これは、読んでいいのか？」
「読みましょう」
開く。物音が強くなる。
周りのあらゆる物が、音を立てた。
「お、怒ってないか…!?」
「怒ってますねぇ」
まだ、出てこない。
朗読とか、すればいいのかな。
「えーと、なになに？」
けっこう古い日付けだ。
内容は、こうだ。
『今日、ついに幼なじみのハンスと付き合えちゃった♪はぁ。。。ほんと、しあわせ。。。
今日から、だーりんって、よんじゃおっと♪』
次をめくる。
『だーりんがプレゼントくれた♪
彼の名前が掘られた、ブレスレット♪
お前は、俺のモノだって♪♪
うちは、ずっと、だぁ、のモノだよ♪』
「だぁ、って、なんだ？」
「ダーリンと同じ意味です。」
次のページをめくる。
しばらく順風満帆だったようだけど…、それは唐突に終わりを迎えた。
『好きな人が出来たから別れてほしいって言われた。』
この、一言だけ。なんか怖い。
『新しい女と結婚するんだって。』
誰に向かって話しているんだろう…
『もうまぢむり。。。井戸の底に、優しかった、だぁ、がいる。
うちも、そこにいく。』

…日記は、ここで終わってる。
彼女は、今も、そこにいるんだろうか。
「……井戸、そしてブレスレットですね」
井戸をのぞき込むけど、暗くて何も見えない。
姉さんが、覗きみると……
「……白骨死体が、ぶら下がってる」
と、言った。なんて夜目！
「引き上げられますか？」
「やってみる。」
と、姉さんは、備え付けの、桶のぶら下がった縄をひいた。
どうやら、カンナさんは、これで首を吊ったらしい。
引き上げて、姉さんが、井戸のそばに、それを寝かした
「薄くて細い骨格、小さいアゴ、広い骨盤」
「カンナさんで、間違いないでしょう」
エルフ、そして、女性の特徴だ。
「……と、すると、ブレスレットは、井戸の底か…」
「お願いします」
姉さんは、深くため息をついてから、井戸に、足をかけて……
「足を折らなきゃいいけど…」
飛び込んだ。
すぐに着水する音が聞こえて、一安心。
「なにかありましたかー！」
すぐに呼びかける。泳ぐ音が聞こえる。
しばらくして、声が帰ってくる。
「ブレスレットがあった！ハンスって彫られてる！」
間違いない。
「それを持って、上がってきてくださいー！」
「待ってろー！出口をみっける！」
しばらくして、姉さんが、別の方向から、上がってきた

◇◆◇◆◇

「遺体と、ブレスレットを並べて…焼いてしまいましょう」
姉さんから受け取ったブレスレットを、遺体のそばに置く。
「よし、離れてろ」
姉さんの手が、光る。
雷撃で、着火させるつもりのらしい。
姉さんの手から、光線のように雷撃が放たれて、遺体とブレスレットをそろって、燃やした。
「すぐに、来ると思います」
「…おう」
すぐに、強烈な冷気を感じた。
皮膚を突き刺すような、それは、異常っぷりを語る。
「…来ました…！」
ぼんやり、と、姿を表した。
霊の多くは、亡くなった時の姿をとっている。
それは、彼女とて、例外ではない。
首に縄をかけた、エルフの、女性が浮いていた。
目が飛び出て…、舌が、ちぎれそうなくらい、飛びてて…
ひどく、悲しい、首吊り遺体の、姿だった。
先手必勝、わたしは、銀の粉が詰まった袋を投げて…
指をむけ、呪文を唱えた。
「イオラ!!」
即席、銀の粉爆弾だ。
閃光とともに、銀を散らし、霧の変身を解除し、
その実体が、あらわになる。
「姉さん！」
さっきまで、怖がりまくっていた姉さんだけど、出てきてからは、もう、
戦士の顔だ。
槍を鋭く突き出し、亡霊の腹を突き刺し…
乱暴に切り上げた。

勝負は、ついたようだ。
霧のように、消えていくナイトゴースト。
すすり泣いている。
「苦しかったでしょう？
手荒に、ごめんなさい」
わたしは、カバンから、経文が書かれた巻物を取り出す
自分で写したものだけど、
「でも、もう大丈夫ですよ。こっちへ…」
それで、輪を作る。
ナイトゴースト、カンナさんは、そこに、吸い込まれるように入っていく。
『ありがとう』
通り過ぎるときに、そう聞こえた。
「…生まれ変わって、素敵な恋をしてね」
聞こえたか、どうか、分からない、わたしの呟きは、
夜の闇にとけた。

◇◆◇◆◇

戻ってみたら、ハンスさんが起きていた。
憑き物が落ちたようだ、と話していた。実際、そのとおりだけど。
わたしは、何度もお礼を言われ、多額の報酬を受け取った。
こんなにいらないって言ったんだけどな…
わたしの功績は、教会のモノとされたらしいけど、細かいこと。
正式に、この巫女服をまとう権利を与えられたとか、なんとか…
「つまり、正式に専門家になったんだな」
と、姉さんが、言った。
「つまり……？」
認められたということ！
脱！オタク！
「オタクは偉大だな」

姉さんの皮肉に、
わたしは、胸をはって、言った。
「オタクじゃないですー！」
わたしは、この日から、心霊探偵を名乗ることとなる！
（探偵っぽいことをするのは姉さんだけどね）

第22話　ジュレットの町

「海が見たい」
　あたしの、このロマンチックな一言で、次の行き先が、決まった。
「では、海と欲望の町、ジュレットですね！」
　そんな大層な二つ名を持つ、ジュレットは、
　この辺りでは、もっとも、大きな町のようだ。
「お、海！」
　そのジュレットが近づいてきたようだ。
　窓から見える景色は、１面の大海原。
　エテーネでは、有り得なかった、海の上を駆けるという行為は、あたしの胸を高鳴らせた。
「キレイですねぇ…！」
　水面に太陽の光が、反射して、キラキラと輝いている。
　あたしたちは、しばし、目的も忘れて、海に見とれていた。
『次～ジュレット駅～、ジュレット駅～』
　そのアナウンスが聞こえるまで、飽きもせず、海を眺めていた。

◇◆◇◆◇

　辿りついたジュレットの町は、大海原のように、光り輝く自由都市…！
　…では、なかった。
　駅から、まっすぐ行った広場に、常に人が集まっている。
　一見、交流広場だが…
「けっこー都会だな」
「ですねぇ…」
　島国出身者と、山奥出身者が、驚くのは無理はない。
　とりあえず、町についたら、あたしは、用事があった。
「あたしは、郵便局行ってくるね」
　アルベールに送った手紙の返事が、来ているかもしれない。

一応、チェックしないと。
「あ、妙にそわそわしていると思ったら、それですか」
そわそわなんかしていない。ニヤニヤするな。
人の往来の真ん中で、ニヤニヤする巫女は、目立つ。
「お前、それ脱げよ…
すげー目立ってるぞ」
アズランで、正式に、その制服を受領してから、脱ごうとしない。
おかげで、電車内から、悪目立ちだ。
「目立つことこそ、我が望みです！」
ここにくるまで、地味と言われ続けたユイナは、すっかり、根に持っているようだ。
しかし、その目立ち方は、間違ってるような…
「まあ、いいか…
変に絡まれても知らないからね～」
と、半ば、投げ出すように、あたしは、ユイナから、離れた。
まあ、たぶん、大丈夫だろう。
「大丈夫ですよ！ほら！行って行って！」
と、ユイナは、あたしの背中を押して、郵便局へと、
送り出した。
…道、分からないんだけど…

◇◆◇◆◇

姉さんを見送ってから、周りの視線に酔いしれる。
ふふふ、地味、地味と言われ続けた、わたしですが、
もう、それを言わせませんよ！
この格好で、ばんばん事件を解決して！どんどん有名になって！
心霊探偵の名を世に知らしめるのです!!
「お、巫女がいるよ」
「え、マジで？うっわ、マジじゃん」
と、1人、意気込んでいると、後ろから、男の人の声が

やったー！目立ってるー！と喜んだのは束の間、
ウェディの男性が、２人。
振り返ってみると…
「黒髪巫女じゃん」
「うわー、漫画みてぇー」
金髪と、茶髪のウェディさん。
ウェディの男性は、皆さん、イケメンですけど…
「ねぇ君、巫女とか普段なにしてるの？」
「お茶でもしながら聞かせてよ～」
なんていうか、判子を押したみたいに同じような感じというか…
量産型っていうか…
「君、けっこーかわいいねー」
「清楚系？って感じ？」
ぐいぐい来ますね！この人たち！
と、心の中では、思ってますが…
「えっ、その…、あはは…」
こんな感じで…、
困ってるの、分からないのかなぁ…
「この先に酒場があるんだよ、奢るからさ～」
「魚料理、うまいよー、ね、いこーよー」
こ、こういう人、苦手…
姉さん助けてー…
と、途方にくれた、その時！
「レディース＆ジェントルメーン！」
高々と、男性の声が、響いた。
あまりの大声に、ざわついた周囲、そして、わたしに話しかけてきた、ウェディさんも、凍りつく。
声のほうを向く、と変わった格好のウェディの男性がいた。
派手な黒と赤のマント、負けないくらい派手な羽根の帽子。
その帽子から、のぞく、燃えるような赤髪。
そして、黒い仮面。

「特にレディースの皆様、御機嫌よう
今宵も、『道化師』のショーが始まるぜ！」
レディースの方だけかい！と、コケそうになる。
仮面のウェディは、マントを翻す。
すると、そこから、メカの鳥の魔物、メタッピーが3匹飛び出した。
「ヒィ！魔物!?」
町は、大騒ぎになる。
「心配無用！道化師とハトは友達だからな！
あー、たまにつっつくよ！気をつけて！」
余計、大騒ぎになる。
幸いにも、メタッピーは、誰にも危害を加えることなく天高く、消えていった。
「さて、次は、お得意の消失マジック！
さあ、誰を消しちゃおうかな～」
と、仮面のウェディは、観客…（とは言っても勝手に始めて、周りの人を勝手に観客にしている）を、物色するように見て…
「そこのキュートな巫女ガール！キミに決めた！」
わたしを、指さした。
仮面のウェディは、なかなかのスピードで、わたしのすぐそばに来た。
「大丈夫、怖くないからな」
そう言って、懐から、魔法の小瓶を取り出し、それに、ハンカチをかぶせた。
それを、のけると、いつの間にか小瓶の蓋が空いていて、代わりに生けるように薔薇がさしてあった。
「お嬢ちゃん、ナンパで困ってるんだろ?」
仮面のウェディは、その花を、わたしの髪に、さした。
髪飾りみたいに、わたしの頭に薔薇を飾る。
「マントで、隠すから、走って逃げな」
わたしの返事を待たずに、仮面のウェディは、マントをひろげた。
「3！2！1！」

カウントダウンを始めた。
わたしは、急いで走り出す。
「じゃじゃん！」
仮面のウェディは、マントを翻す。
当然、わたしの走っていく後ろ姿は、公衆の面前に晒される。
「インチキじゃねーか!!」
「また失敗か！　このクソ道化師！」
「誰だクソ道化師だ！誰が！」
背後から喧騒が聞こえる。
なんとか、ナンパから、逃げられたようだ。
少し、離れたところから、あの道化師の無事を確認するために、振り返る。
「またお前か！赤毛！町にモンスターを放すなと言っただろう！」
「げ、やべーのが来た…！」
なにやら、ここの警備員に目をつけられたようだ。
道化師は、口笛を鳴らした。
「あばよ！淑女の皆さん！」
再び、3匹のメタッピーが、現れ、道化師は、メタッピーの足を掴む。
すると、空高く舞い上がって、消えていった。

◇◆◇◆◇

アルベールからの返事をみて、また返事を書いて、ユイナのいる広場のほうに来てみると、ひと騒動起きていた
あたしは、近くで、同じように野次馬をしている、女に話を聞いた。
「おい、嬢ちゃん、なんの騒ぎだ？」
クリーム色のポニーテールを翻して、振り返ったのは、青白い顔をした女だ。
細身な身体は、スラッとしたタンクトップと、短パンで、さらに細く見える。

タンクトップからのぞく腰は、驚くほど細い。
確か、この半分、魚みたいな種族は…ウェディだったか
「うちが聞きたいよ!・また『道化師』のあんちゃんが、騒ぎを起こしてるんやと!」
変わった訛りのウェディの女は、気になる言い方をする
「なに?・道化師?・また?」
ジュレットの有名人だろうか。ウェディの女は、意外そうに片眉をあげた。
「なんや?・自分、ジュレは初めてかいな?
道化師っていうと、有名な変人のことやけど」
有名な変人…、それは会いたくないな…
だが、探してる変人は、そっちじゃない。
「あたしの探してる変人は、巫女の格好してるんだが」
「…あぁ、走っていく後ろ姿が見えたで
めっちゃ、かわええのぅ、巫女!」
まあ、うちは、道化師のほうに用があるんやけどな、と女。
そんな事情は聞いてない!
ユイナの走り去った方向を聞いてから、そちらに駆けようとするが、
「待ってや!・自分!
うちの話も聞いてくれや!」
腕を掴まれ、つんのめる。
「なんだよ!?　変な訛り女!」
「変とは、なんや!　れっきとした、レーン訛りやで!」
レーンという地名は、聞いたことがないし、ユイナが離れていくし、なんだこの女は!
「うちも、巫女ちゃんに興味あるねん、つれてってくれへん?」
「勝手にしろ!」
女に言い放ち、あたしは、駆ける。
「おおきに!」
いやぁ、ほんまジュレってとこは、世知辛くてなぁ

うちの故郷レーンはなぁ
あ、うち、スズって、いうんやけど…」
「黙って走れ！黙って！」
おしゃべり女、スズを黙らせて、
あたしは、人混みをかき分け、走った。

◇◆◇◆◇

幸い、すぐにユイナは、見つかる。
目立つ、とんでもなく目立つ。
「ね、姉さん…！」
目が合うなり、泣きそうな顔で見てくる。
頭に飾られた薔薇を見るに、怖い目に、ナンパにあったに違いない。
「無事か？その薔薇、どうした？」
ユイナは、そっ、と薔薇に触れる。
「これですか？お節介な道化師がくれたんですよ」
「ナンパか？ナンパされたのか？」
薔薇をあげるとは、また古風な…じゃなくて
「どんな奴だ？怖くなかったか？」
あたしの質問攻めに、ユイナは、たじたじ。
クソナンパ野郎め、お前の血で薔薇を生けてやる。
「逆です！ナンパから助けてくれたんですよ！」
じゃあ、なんで薔薇が…、と、聞くと、ユイナが、かくかくしかじか。と説明してくれた。
なるほど。感謝するぞ道化師。
でも、ナンパしたやつは、八つ裂きな。
「初めまして巫女ちゃん、急で悪いんやけど…」
「初めまして！姉さんのお友達ですか？」
話の腰をおられたスズだが、嫌な顔ひとつせず、笑って「せやで、スズちゃんって呼んでな」と言った。
「友達になった覚えなんかねーよ」

「レーンじゃ、名乗りあったら、友達なんやで！」
「名乗ってすらいねーって」
うっかりしてたな！とスズ。名乗るように、せがる。
「わたしは、ユイナ。こっちは、姉の…」
「ミュスナだ」
スズが、手を叩いた。
「なんや！自分ら姉妹かい！似てへんなー？
狼とチワワって感じや～」
「チワワなんて褒めすぎですよぉスズちゃん♪」
なんかすっかり意気投合してるし、チワワは、褒め言葉なのか？
すっかり変わってしまった話題を、スズが、戻す。
「そんでな、チワワちゃん。
うち、道化師を探しててな？」
「あぁ、彼なら…」
ユイナは、空を指さした。
「なに？死んだの？」
あたしの疑問にユイナが、首を横に振る。
「メタッピーで飛んでいきました」
待って。何言ってるか、分からない。
「やろなぁ。あいつは、殺しても死なないやろなぁ」
なに納得してるんだ、この女は。
周りのヤツらの話によると、警備員に追われ、飛んで逃げたらしいが、信じられないな。
「飛ばれたんじゃ、しゃあないなぁ。
今日こそ、会うつもりやったんに」
「困りましたねぇ…、あ、姉さん！」
周りの声に耳を傾けてたあたしを、ユイナが呼ぶ。
そちらを見ると、薔薇を、差し出している。
「なに？」
「たぶん、道化師さんのニオイが残ってるかもしれないので…」
男をニオイで、追えってか？

なにその新たなストーカー。
「自分、犬みたいやなぁ
一生のお願いや！頼むで！」
「何回目の一生のお願いだよ、それ」
呆れる、が、道化師とやらに興味がある。
ユイナを助けてもらった礼もいいたいし。
あたしは、薔薇を受け取った。
と、同時に、一変する空気に気付いた。
「…あ、まずいなぁ」
スズが、つぶやく。心なしか、周りも慌ただしい。
「な、なにかあるんでしょうか？」
緊張した空気に呼応するように、ユイナ自身も、こわばっている。
「ジュレットの有名人、『道化師』『男爵』『女王』
のうち、もっとも危険な人物でな…」
説明するより、見た方が早い、とスズは、酒場の方面を指さした。
人が集まっているが、川のように、割れている。
まるで、王族の凱旋パレードのように。
「頭を低く！絡まれると、めんどうやで！」
スズが、平伏するように、地面に伏せた。
ユイナも、それに、習う。
女王、と呼ばれるヤツと、ご対面か。
ここまで、恐れられる人間、もしかしたら、魔族の類いかもしれない。
そして、魔族は、冥王へと通じる。
「ミュスナも、伏せなあかんで！」
「いや、これでいい。」
ご尊顔を、よく、拝見しなければ。
神輿のようなものが、見えた。
屈強なオーガの男たちが、担いでいる。
神輿には、もちろん、女王が乗っている。
「あれが、ジュレットの『女王』レイナや…」

丸くまとめられた、桃色の髪。
輝く真珠と謳われた、瞳。
豪者な白いドレスに身を包み、手には桃色で、ハートのついた鞭。
「あれが…女王レイナ…」
「あぁ、噂じゃ、ゴールドシャワーでガートラントを血の海に沈めたとか…」
「今はヴェリナードへの侵攻を考えてるらしいぜ…」
聞こえてくる噂話だけで、やばいヤツなのが分かった。
女王、レイナは、平伏しないあたしでは、なく、
平伏して、怯えきっている、ユイナを呼んだ。
「そこの巫女服の貴女」
巫女服を着てるやつなんて、この場で、ユイナしかいない。
ユイナは、スズに横から小突かれ、怯えながら立ち上がる。
「よく似合ってるわ。」
ユイナが、ほっ、としたように、胸を撫で下ろした。
「あ、ありがとうござ…」
言いかけたユイナのすぐ近くの砂が跳ねた。
しなる鞭で、打たれたのだ。
「本当に、よく似合ってる。
私がそれ着た時より、膨らんでる胸とかね？」
女王は、鞭を奮う。
ユイナは、縮こまって、悲鳴をあげた。
「Dカップ以上は殺す」
物騒すぎることを言って、鞭を奮う。今度は当てにいった。
あたしは、2人の間に入る。
ユイナを襲う、しなる鞭を、掴んだ。
「…鞭は、人間の目じゃ追えないらしいけど？」
武器を掴まれたレイナだが、冷静だ。
「だとしたら、あたしは、人間やめてるな」
掴んだ鞭を、両手で、掴み…
左右に思い切り引き、引きちぎる。

「止まって見えた。」
ちぎった鞭を捨てる。
レイナは、あたしを、値踏みするような目で見て、
指を鳴らした。
神輿が、降ろされる。
「レイザック」
神輿を担いでいたオーガの1人が、呼応した。
「懲らしめてやりなさいな」
「承知いたしました。」
オーガの男が、あたしの前に立ち塞がる。
「…覚悟しろ」
ウォーミングアップには、ちょうどいいな。
「どけ。」
指を鳴らす。
その奥では、レイナが…
「爪！」
と、叫んで…
イケメンのウェディが、「はい！」と、道具を手に、近づき…作業し…
「痛いわね！へたくそ！」
と、平手打ちされていた。かわいそうすぎる。
「女王の名の元に…」
「時給いくら？」
「え？…８００Ｇだが…ぐぁ！」
答えてる間に、顎をうつ。
どんなにでかいやつも、脳を揺らせば、倒れる。
「ったく、使えないわね」
一撃で倒されたレイザックをみて、レイナが、言った。
「次は、お前だぞ」
レイナは、扇を広げ、口元をかくした。
「やぁよ。痛いの嫌いだし…

レイド」
「ここに!」
名を呼ばれて、どこからか、エルフの青年が、現れた。
「逃げる。足。」
「では、このキラーパンサーに…」
「お尻臭くなるからヤ。」
ワガママな女王さまだ。
結局、彼女は、モーモンブランコで、去って行った。
「……なんだったんだ?今の…」
あたしの疑問に答えてくれる人は、いなかった。
波乱に満ちた、ジュレット編が始まる。

第２３話　道化師と…

雷鳴のごとく現れ、そして去っていった、自称ジュレットの女王、レイナ。
彼女が去った方向を見上げながら、ユイナが安心したように一息ついた。
「すごい人でしたねぇ……」
感想は、この一言に尽きる。
鞭で打たれそうになったのに、なかなかの落ち着きようだ。
「あの人は、名実ともにこの町の女王でなぁ
町長より発言力があるらしいで」
町長も、あの女の前では、たじたじらしい。
「お山の大将って感じだな」
まぁ、それでも、所詮、小さな町で、女王を気取る女
それだけの話だ。
「……まあ、この町じゃなければ、そうやな」
スズの含みのある言い方。
どうやら、この町は、普通とは違うようだ。
「あまり関わらない方がええで」
興味深い人物ではあるが……、目的と無関係なら、
関わらない方がいいだろう。
あたしは、素直に、スズの忠告を聞き入れた。
「せや！　自分らは、この町に何しに来たんや？」
話を変えるように、突然、質問をするスズ。
目的は、もちろん、これだ。
「英雄を募集していると聞いてね」
懐からキーエンブレムを取り出し、スズに見せた。
それだけで、スズは得心いったようだ。
「おぉ、それじゃぁ、冒険者さんなんやね
……うんうん、よく見たら冒険慣れしてそうや」
スズは、商品を値踏みする商人のように、あたしを舐めまわすよう

に、じっくり見る。
「……なにか困り事か？」
こういう反応は、けっこうされる。
決まって、悩み事や、問題を抱えている人に多い。
「自分鋭いなぁ！
ちょっと人を探してるんよ」
どの町にもパイプは、あったほうがいい。
なにより、金は、いくらあっても困らん。
「協力してもいいけど、まずは、これの話だな」
あたしは、ただ働きは、しない。
親指と人差し指をすりすり合わせた。
もちろん、報酬の話だ。
「あんまり持ち合わせがないんよ～
代わりに、キーエンブレムの情報で、どや?!」
見るからに貧乏そうな娘だ。期待は、していない。
情報は、金と同じくらい重要だが、その価値は、金のそれより、分かりづらい。
「んー…、内容による。」
簡単なものなら、断る理由はない。
「最近、この町に居たのは分かってるんよ
それに、目立つから、簡単やと思うで」
それなら自分で探せばいいのに、と思うが、大事な食い扶持だ。
「そいつの特徴は？」
町の外で死体になっているパターンも考えられる。
急いで、探すべきだろう。
「２０歳くらいのウェディの男で、仮面をつけて、マントをしていると思うで」
話を聞いただけで、容姿が、かなり絞り込めた。
ウェディというと、そこらにたくさんいる、生白くて、細っちょろい、あれか。
「あ、わたし、その人知ってますよ」

と、黙って話を聞いていたユイナ。
この分なら、すぐに、見つかりそうだ。
「おぉー幸先ええなぁ！
どこに行ったとか、分かる？」
スズの声が弾む。
ユイナは、町の広場1角を指差し……
「あの辺で、わたしがウェディの男の人に声かけられてるとき……」
ここで、話の腰を折る。
「待って、ナンパされたの？」
聞き捨てならない。仮面のウェディより、そいつらを探すべきだ。
「大丈夫ですよ
その時に、助けてくれたのが、その仮面の方です」
ナンパされたことを否定しない！
なんて町だ、ユイナを1人にするんじゃなかった！
「触られたりしなかったか!?」
肩をつかんで、詰め寄る。ユイナも、たじたじだ。
「大丈夫ですってばぁ～」
「おねーちゃん落ち着きな、話が進まないやないか」
「これが落ち着いていられるか！」
魔物にでも襲われていたほうが、まだ安心できるというものだ。
「姉さん、うるさいっ
話、続けますよ？」
ユイナに、びしっ、と言われ、あたしは、とりあえず、退く。
まぁ、これから1人にしなければいいだけの話だ。
まずは、ユイナを助けた仮面の男とやらを探そう。
あたしは、ユイナの話をよく聞く。
「それで、いくつか手品を披露して、警備員の方が、現れて、鉄の鳥のモンスターに乗って、逃げていきました」
……ん？
「……んん？」
スズと同じ反応をしてしまった。

スズが、人差し指を立てた。
「もっかい、頼める？」
ユイナが、いまの説明と、全く同じ説明をした。
「……聞けば聞くほど、意味が分からないな」
「それで、どこに行ったんや？」
とりあえずは、受け入れ、それから質問だ。
ユイナは、南口のほうを指差した。
「あちらの方ですね」
あっちは、確か、ミューズ海岸に続く道だ。
「じゃあ、探してみるか」
1人で充分だろう。
あたしは、町にスズとユイナを待たせて、ミューズ海岸へと向かった。

◇◆◇◆◇

ミューズ海岸、打ち付ける波や、ヤシの木。
海辺の洞窟が、冒険心をかき立てる、美しい海岸だ。
多く魔物が群生しているが、強敵は、いない。
魔物は、力の差を理解できるものが多い。
ここの魔物は、あたしより、格下なようだった。
おかげで、邪魔されることなく、目的へと、近づけた。
海岸にぽつぽつと落ちているそれを拾う。
「鉄製の羽……？
驚いた、ユイナの話は、本当か」
鉄で出来た、鳥の羽のようなものが、一定の方向に向かって、落ちている。
本当に、仮面のウェディは、鉄の鳥で飛んで逃げたようだ。
「羽は……あっちのほうか」
それを辿ると、すぐに、バカ暑い海岸で、バカな格好をした、男へと、行き着いた。

「おーい！助けてくれー!!」
向こうも、こちらを見つける。
戦闘中のようだ。近くには竹のやりを持った兵士のような魔物。
確か、アズランのほうに生息する、たけやりへい、だ。
「いま助ける！」
背中の槍を取り出して、地面を蹴る。
すると弾丸のように、あたしの身体は、宙をかける。
狼牙突き、と呼ばれる、槍の奥義だ。
彼を取り囲む、魔物たちを、一瞬で、蹴散らした。
あとは、たけやりへい、だけだ。
たけやりへい、に、槍を向けた、あたしを、ウェディは慌てて止めた。
「待て待て！たけぼーは、仲間だ！」
「たけぼー？」
言われてみれば、戦意がない。
魔物を仲間にできる職業があると聞いたが、それだろうか
「着地したら、魔物の巣でさー
いやいや、死ぬかと思ったよ」
「それは災難だったな」
ウェディは、魔物の死体の中、倒れる例の鋼鉄の鳥を、抱き起こした。
「メタピー、オレを庇って……バカ野郎がっ！」
妙に熱が入ってるな。魔物とはいえ、大切な仲間だったのだろう……。
「……死んだのか？」
「いや、修理すりゃへーキへーキ」
軽く言い放った彼の言葉に、ずっこけそうになる。
「なら、さっさと引き上げるぞ……」
心配して、損した。
「助かったよ、オレは、リョン。キミは？」
仮面の下で、微笑むリョン。

あたしは、簡単に、名乗る。
「ミュスナちゃんかー
いやーこんな美人に助けられるとはツイてるなぁ」
「よく言われる」
あたしの性格は、とにかく、この身体は美人だからな。
「お前を探してくれと、頼まれてな
感謝なら、依頼主にしてやれ」
「オレを？　誰だれ？」
「会ってからのお楽しみだ」
あたしは、リョンをつれて、ジュレットの町へ戻った。

◇◆◇◆◇

「リョンちゃーん！
もう会えないかと思ったでー！」
酒場につれていくと、そこで、待たせていたスズが、目ざとく、こちらを見つけた。
「おー誰かと思ったらお前かスズ！」
酒場で顔を合わせるなり、旧知の友に会ったように、喜んだ２人。
「とーっくに死んだかと思ったで～」
「死ぬ思いはしたけどな！あっはっはっ！」
スズの向かいの席に座るリョン。
あたしも、その隣に腰をかけ、足を組む。
「お２人は、どういう関係ですか？」
リョンが来るまで、スズと談笑していたユイナが、訪ねた。
その手にあるジョッキの中は、きっと、牛乳だろう。
「幼なじみだよー」
「下の毛も生えてない頃から知ってるで～」
スズの言葉に、ユイナが苦笑する。
そうしてると、注文を取りに店員がきた。
「ミュミュちゃん何飲む？おごるよ」

「なんでもいーよ。あと、なんだその呼び方」
任すと、リョンは、強めの酒を2つ、注文した。
「なんや、万年ビンボーのくせして。
相変わらず、美人の前だとカッコつけるなぁ」
「万年ビンボーは、お前もだろーが」
うちは、計画的にビンボーなんよ!とスズ。
結局ビンボーじゃないか。
「テキトーに酒頼んだけど、ミュミュちゃん、イケる口だった?」
「まあ、大丈夫だろ」
これだけ力強い身体が、酒に弱いとは、思えない。
と、思ってたが、ユイナは心配そうだ。
「大丈夫ですかぁ…?
姉さん、あまり強くないはずですが…」
そうだったのか。
でも、今更、頼み直すのもなぁ
「2人は、姉妹なん?」
「はいっ!」
リョンの質問に、なぜか、誇らしげに胸をはるユイナ。
店員が、あたしの前にジョッキを置いた。
「おぉー妹さん、かわいいねーミュミュちゃん」
「ちょっとアホだけどな」
アホと言われたユイナが唇を尖らせた。
「そーいや、リョンちゃん、せっかく村を出たんや
彼女の1つでも出来た?」
この2人、会うのは久しぶりなようだ。
つもる話もあるだろう。
「んー、ぜんぜんだねー」
「あのオーガの子は?くせっ毛の子や」
リョンが、思い出したように、語る。
「あぁ。花瓶を投げつけられて、ベランダから突き落とされたよ」
「相変わらずやなぁ」

けたけたと笑うスズ。あたしも、これは笑う。
「スズさんは、商売をやりに、この町に来たんですよね」
「そそ、脱、ビンボーや」
「あはは、無理無理」
笑うリョンをスズが睨んだ。
そこで、スズが、思い出したように言った。
「あ、そーや
キーエンブレムのことやけど」
報酬の件だ。無償で、こんなバカを助けたんじゃない。
「この町のキーエンブレムを管理してるのは、あの女王なんよ」
元は町長が管理してたらしいが、あの女王が強引に権利を奪ったらしい。
「結局、関わるしかないようだな」
「う～ん、あの人、苦手です…」
ユイナも憂鬱そうだ。そらそうだ。鞭で殴られそうになったんだから。
あの女王のことだ。また巨乳は死ねとかで、取り合って貰えないかもしれない。
「ミュミュちゃん、あの女王に用があるの？」
なにか、パイプが必要か。
考えていると、リョンが助け舟を出してくれた。
「オレ、あの人と知り合いだけど、あんまりオススメできないなー」
どんだけ嫌われてるんだ、ここの女王は。
だが、取り持ってくれそうなら、頼らない手はない。
「なんや、リョンちゃん、女王さまにまで手ぇ出してたんか」
スズがニヤニヤ笑う。リョンは、苦笑いする。
「冗談だろ？命がいくらあっても足りねーよー」
「でも、美人やんか」
そのまま、2人の会話に花が咲く。
あたしは、ジョッキを飲んで待つ。
「あの女王さまは、なんていうか、上等なワインって感じじゃん？」

と、言ってから、リョンは、あたしを見る。
「オレは、気が強いウォッカのほうが好みなのさ」
酒が入って、ぼーっとした頭に、酒扱いされたことが、理解できたのは、しばらく経ってから。
まあ、と話を区切るリョン。
「1番は、甘いイチゴミルクだけどな！」
言ってからユイナを見る。
大人しく牛乳を飲んでいたユイナは、突然、話をふられ……
「ほぇ？」
素っ頓狂な声をあげる。
それから、笑って、言った。
「わたしも、イチゴミルク大好きですよ～」
話の流れが理解できず、少しアホっぽい。
リョンは、そんなユイナを微笑ましく見ていた。
「わ、姉さん、顔真っ赤！　大丈夫ですかー？」
ユイナが、こちらを見る。
気づいたら、視界は、ぼやけていた。
「あらら、半分しか飲んでないのに」
「意外と、お酒弱いんやね～」
身体は熱いし頭は、ぼーっとするし……
参ったな、寝てしまいそうだ。
と、頭を抱えた、その時。
しん、と周りが静まりかえった。
酒でぼやけた頭でも、理解できる。
向かいのスズの顔も、「うわぁ……」って感じだ。
あたしは、振り返る。
ぼやけた視界が、少し安定する。
そこには、桃色の髪のウェディの女と、デコボココンビ……
件の、女王様だ。
酒場の中央、女王様の登場に気付かず、バカ騒ぎをする男たち。
「ん。」

女王レイナは、そう言って、あごで、指示をした。
オーガの男が、動き出す。
「んん…？なんだおめぇ……うわぁっ！」
オーガの男が動き出し、男たちを席ごと投げ飛ばした！
これはヒドイ！
空いた席にエルフの男が、椅子を用意し、レイナは、そこに腰をかける。
そして、テーブルに足を乗っけた。
「なにすんだ、てめっ…」
席を強引に取られた男が、怒鳴る。
それを、レイナが睨んだ。
「こ、これは女王様……」
へへ、と愛想笑いし、彼は、逃げていってしまう。
おかげで、いい酔い覚ましになった。
エルフが、カウンターからワインを持って、それをグラスに注ぐ。
レイナは、それを受け取り、優雅に飲む。
容姿の美しさもあって、本当に女王のようだ。
「探したわよ、狼さん」
桃色の唇か静かに動いた。
バニラ色の瞳は、あたしに向けられていた。
「奇遇だな、あたしもだ。」
女王と、道化師と、狼と。
「役者は、揃ったわね」
レイナは薄く笑った。